
なぜ僕はここにいるのだろう？

doura

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なぜ僕はここにいるのだろうか？

【Nコード】

N3849V

【作者名】

doura

【あらすじ】

鉄道趣味である自分の楽しみは、入学した高校でのクラブ活動。やっと見つけたそこには予想とは違って綺麗な女性が。免疫のない自分としてはどうしたものか脳内ふる可動で疑問と格闘です。

01 なぜ僕はここにいるのだろうか？

<01 なぜ僕はここにいるのだろうか？>

目の前は駅前広場とは言えない小さなスペースが有り、数年前までは開いていただろう商店（元）が1軒。

職員の居ない無人駅と大きな木とささやかな駐輪場が全て。赤く鮮やかなミニバイク

だけがタイムスリップではない現代を認識させていた。

約束の時間から、まだ5分ほどしか経過していないのに、

なぜか異次元に一人で迷い込んだような心細さと疑問ばかり。

なぜ僕はここにいるのだろうか？。

新入2日目の金曜日、授業は午前で終わり、午後は各クラブの勧誘説明会に

なっていた。鉄道が好きで、できれば高校で鉄道関連の倶楽部にとの願いも、

配れらた倶楽部リストで見事に打ち砕かれ、ただぼんやり校内を歩いて

いた目に「鉄道」の文字が飛び込んできた時は思わず声をあげて駆けだしてしまった。

廊下側の窓に貼られた「鉄道」「研究会」。

恐る恐る空いていた所から中を覗くと・・・、黒髪セミロングの女

子が座っていた。

「入会希望？」

かけられた声は静かだがよく通る。

初対面の挨拶を考えていた頭が一瞬で停止。

口は勝手に答えていた。

「はい」

「時間ぎりぎりなので急いでね」

歩き出した女子は、廊下側窓から見ていた自分まで歩いて封筒を渡す。

セミロングの髪が逆光に反射して作る光の舞いに見とれていたからなのか、

そのまま離れていく女子が、廊下の角に消えるまでポカンと見送っていた。

頭に「急いでね」の言葉がくりかえされた頃……。

我に返って封筒を開けてみた。

15:00 早川口駅。

封筒の中の文字です。なんとか間に合いました。

学校最寄り駅からさほど本数多くないローカル電車で2駅。

ほんとにギリギリセーフでした。

おそらく、この時間、場所に・・・との指示だろうと判断したのです
が・・・。

結果、冒頭の状況で途方に暮れております。

「てか、あの女子は何だったのだろう？最近鉄女も居るようだし・
・居てもおかしくないのかな？

あまりの綺麗さにビックリで思考フリーズだったな。なんか甘い
香りも・・・気のせいだろうけど。

嬉しいのかな、やっぱり・・・どうしよう、ちゃんと話せるかな
？かなり不安だな・・・。

あんな姉貴が居たらもっと女の人に免疫できたかも・・・でもやっ
ぱり不安だな・・・」

一気に広がった一人妄想劇場は、知らず知らずに声となっていた。
無人駅で良かったです。

今現在クールダウンした脳は、目に入った情報の解析をはじめた。

「今は・・・3時10分・・・」

早川口は無人駅。鉄道研究会関係者が他に居ればすぐ解るはずなの
だけれど・・・、なんかだまされた？

あゝ・・・、そうなのかも。やっぱり・・・、女の子は・・・苦手だ。

「ほんと、なんなんだ、あの女子・・・」

と、半分やけになった目は、帰る電車の時刻を調べ始める。

ふと目のハシに入った伝言板に気になる文字が見えたような・・・
今一度じつと見直してみる。

> 1 5 : 2 0 3 2 3 M 2 8 D

3 2 3 M。

目についた。

僕の好きな電車が1日1往復走っている。よく写真を撮りにいつて
いるので時刻はおおむね解っている。

その列車番号が3 2 3 M。列車ごとにつけられた背番号みたいなも
のだ。

「1 5 : 2 0 は多分時刻。では 2 と 8 D は・・・？おそらく2号
車の8 D 席。」

当然ローカル電車に指定席は無いのだが、だいたい車内には座席番
号札が付いている。

「これに乗れ・・・なのか？。まあ好きな電車だし時間も出来たし、
帰るにも丁度よいので
もう少しダメされてみるか。」
少し面白がってみることにした。

目標の電車は2両編成。

後側の2号車は程よく座席が埋まっていた。

真ん中あたりでポカッと空いたボックスが8 D だった。

なぜ空いていたか不思議に思うのもつかの間、座席の上に見覚えの
有る封筒が

目についたことで、まよわす思考がその中に集中した。

> 金十駅北口 鈴八

北口？鈴八？なんだかさっぱり解らない？

金十駅は先ほど乗ってきた高校の最寄り駅。だとするとまた戻るところに

なるわけで、早川口へ行くのはなんの意味があつたのか？

鈴八・・・は、駅前に有るケーキ屋か？

カフェにもなつてて、女子に人気のパフェやシュークリームが有るらしいが・・・。

悩んでいたらあっけなく金十駅到着なので、とりあえず鈴八に向かつてみた。

店の中は近くの学校の生徒に埋め尽くされていたので、覗くだけですぐ出てきてしまった。

店の客はだれもちちに注目するなどもなく、つぎの進展を少しながら期待していたのですが、あっけなく拍子抜け。

一度学校に帰ろうと思い直し、歩き出したとたん、横から出てきた箱に行く手を遮られた。

その箱を見つめていた自分は、持っている手、持ち主の顔まで視線をあげる・・・。

と、そこには先ほど学校で見た女子が。

「行くわよ」

引き続きポカンと見てた自分に、静かでよく通る声が。

ああ、こんな声だったと思うのと同時に足は自然と歩き出していた。

学校までの10分。その間に女子のセミロングがはなつ柔らかな光を見ながら歩くだけで、思考はくりかえされる数々の疑問を黙って整理していた。

最初覗いた部屋まで戻る。くるっと振り向いた女子は

「合格だわ」

と一言声に出して、そのまま箱の中身を机に出し始めた。

「あの・・・、あまりよく解らないのですが・・・。いろいろとお願いしたいことが・・・」

最初の疑問が口から出る頃には、魔法瓶から紅茶らしいものをそそぎ終わった女子が正面に座ろうとしていた。

「座ってから、ね。」

言われるままに無意識に座る・・・が、やはりハズカシイので正面の綺麗な顔を見ないことにする。

目は机の上に並べられたシュークリームを見て、じっと答えを待つことに。

「今日から研究会のメンバーよ」

「あの、それは入会許可・・・のことでしょうか？」

思わず目線を上げると自分の問い掛けにただ一回うなずいて、ゆっくりと紅茶を飲んでいる。

目はこっちを見据えて・・・。
ダメだ、ハズカシイ・・・、見れない・・・。
いろいろと聞きたいことがあるのに・・・。

再び机あたりまで視線をおとす。

何も言わずに、シュークリームのお皿をこっちに押し出してくる手が見えた。

たぶん食べる・・・なのだろうが・・・。

「私、八神 鈴」（やがみ すず）

もう一度目をあげ、今度は今のことばの意味の疑問をたしかめたくジッと女子の目を見た。

「会長よ」

「・・・あ！、僕は・・・」と言いかけた所に

バタタタ・・・「リン」！、糖分補給！！」

と大声で飛び込んできた女子その2。

「おおー！新人？兵隊？合格ー！！」

ガコーン！！！！ガタタ・・・

「アイタタ・・・、イタ」。なんで私の前にイスなんか有るのー！ガツ！」

盛大に足ひっかけて転んで起き上がってイス蹴って・・・で1秒くらい？

その間見ているだけでスローモーションでした。

「モー、まったくモー！！」

「・・・牛？」

思ったことが思わず口から出てしまったのは、またもや無意識で後悔。

「ちょっと、なに何、年上のお姉さんにさっそくセクハラ？」
「え、え？、セク・・・とかまったく考えてません！てかまだそこまで思考まわってません！」

今初めて思ったかもで、でも、でも、さっきの突進とか文句とかが無意識に・・・思っただけ・・・かもですが、ちょっと声が出てたかもで、

でもセク・・・と言われたらついその胸・・・お洋服を見てしまったかもで、

その、あの、えっと、大きい・・・ではなく、お豊かかも・・・かもですが、

そんなに長くは見てませんので、きつとただ太・・・」

バキッ！

突然の嵐に自分もいきなりスイッチきりかわったかもで、支離滅裂言い訳が

収まったのは脳天から何かの本でたたかれてやっとなりました。

「今度不穏な文字を連想させたら・・・死！」

「・・・はい・・・」

でも、おかげでなんかやっとな顔をあげて普通に目を見れる気持ちになりました。

「で、自己紹介ね！」

スカートの裾を整えながら斜め向かいに座った元気女子。

「会長の名前は聞いた！？ 八神 鈴ね！」

そしてあたしが三木 蘭。

二人とも2年生で、この会のすべてです！」

「あ、僕は先日入学の 一条 瑞樹です。1 - Cです」

まだ少し混乱しつつ、やっと自己紹介出来たのにホッとしたのですが……

「……え??、お二人で全員なのですか!？」

「そうよ! まだ出来立てほやほや! だし、入会規定厳しいからね!」

「……そう。出来立て。」

二人の答えに少しだけフリーズ。

「ですが、鉄道研究会……ですよね!??、女子……、女性だけって?」

「そうねえ、そうかな?……。鉄道つてのがやっぱり限定しすぎだよな」

「限定って……、でも、そのための研究会ですし……」

と、窓の字を指さしつつ疑問とも質問とも声に出していると、女子……、

八神会長がすうと窓際へ。

カラカラカラ・・・

「ありゃゝ、文字隠れてたよゝ！、どうりで変な質問ばかりくるわけだ！。

モデル主流とか、写真主流とか・・・。モデルクラブじゃないっつうの！」

出てきたのは<ミステリー>の張り紙。

ッ！

ええええゝゝゝ！「鉄道ミステリー研究会」ですかゝゝゝ！！！！

目を丸く、口を大きく開けてるだろうなゝゝゝ。となぜか自分ですみながら声も出せずに再びフリーズ。

「リンちゃんさゝ、やっぱり名前限定しすぎじゃない？」

「そうかしら？・・・。でしたら・・・。」

ペリペリッ

ッッ！

ええええええゝゝゝ！！「鉄道」をハガシマスかゝゝゝ！！！！！！それじゃあ、ただのミステリー研究会ですよゝゝゝゝゝ！！！！

（心の声、いや叫び！）

「てなこと、で、よろしくねゝ！瑞樹ちゃん！」と三木女子・・・、い

や先輩。

「蘭、ダメよ!」

「えゝ、セクハラの償いとしていただこうと思ったのにゝ」
気付くとぷうゝつとふくれた三木女子に、諫めた八神女史の構図。

どうやら自分のシュークリームは早々に平らげ、こちらのシュークリームにまで
出してた手を叩かれたらしい。

そんな様子を停止した脳はなにも判断することなく、この先の高校
生活計画が
別の路線に変わってしまったことを予感しています。
ただし、ほんの少しゝゝこの女子とすごすのもウレシイかもとも
思ってます。

ゝゝ合格ですか。ミステリー研究会です。
鉄分無しゝゝですかゝゝ。
「牛」ゝゝは禁句でインプットですね。

02 新会員募集

<02 新会員募集>

会員名簿に個人情報書いてます。

1-C 一条 瑞樹 (いちじょう みずき)

<趣味> 鉄道模型

<好きな作家> 宮北洋二(鉄道模型モデラー)

<好きな作品> 北越交通 悦楽駅(宮北氏ジオラマ作品)

たぶん、聞かれている方向は違くと重々承知ですが、消えた鉄道研究会への

ささやかな抗議なので許してもらいたい。

「ちゃんと出してね」

「・・・はい」

我が反抗は弱い。

「蘭、入会希望はどう?」

「それさ、うまくいけそうなんだよねー!」

どこからの情報なのか、この鉄道ミステリー研究会(鉄道削除)に

入りたいなる

人物がいるらしい。

やはり入会テストがあるのだろうか？

その後、なぜ二つ隣の駅まで行かされたのか八神会長に聞いてみた。

「駅前の建物ね」

「え？あの閉まった商店みたいなしか無かったですが・・・」

「そこが基地ですわ」

「基地？」

??? ?

「この教室は勝手に使っているだけ。

会とは私個人のなの。学校は関係無しですわ」

「学校活動での倶楽部でもサークルでも無いと」

「私のことは ” りん ” とよんで。字で書くときは怪しげに R I
N」

「意味解らないのですが・・・」

鈴会長の目が柔らかく笑った・・・ように見えた。

瞬間やバいくらいにドキドキしたため、いそいで目をそらして
電車の形式番号を妄想しておさえた。

説明は三木先輩にひきつがれて続く。

「あのさ、鉄道ミステリーだから簡単なヒントで目的地に行けなきゃ」

ダメかなって。で、基地の場所を教えておいて、ついでに帰りにシュークリーム欲しいかなって」

簡単ですが、よくく解りました。

「でも、駅でのヒントや座席の封筒って、どうやって仕込んだんですか!？」

「そこは大変だったんだよ!」

と、待ってましたとばかりにイスの上で足をアグラに組み直してから。

「まずリンが封筒渡すでしょ!それからバイクで早川口駅へ先回り・

・」

「え、蘭さんが?」

「違うよ、リンが」

「え?え?鈴会長バイク乗るのですか?」

「恥ずかしいですわ」

「え、イメージでは乱暴な蘭さ・・・」

パン!

本が降ってきました。

「で、瑞樹ちゃんが乗ってきた電車に乗り込むの」

「でも、駅にはだれも居ませんでした」

「見つからないようにね!瑞樹ちゃん一目散に改札目指してたでしょ。その後でね!」

「・・・全然気付かなかったです。じゃあ引き返す電車の封筒も?」

「そ！次の駅で反対方向の電車に乗り換えるとあの電車なの。」

そんな行動力を目の前で静かにお茶している鈴さんが・・・なんて想像つかないのですが・・・。

「まあ、意外性って魅力でしょ！」

心をよまれた。しかも深い部分まで・・・。

「で、反対方向の電車で指定のボックスに座っておくのね。始発だから席の確保はわりあい簡単なの。」

まあ、こんな綺麗な人が静かに座っていたらそのボックスは避けるだろうな・・・。

「まあ、恥ずかしいですわ」

今度は鈴さんによまれた・・・。しかも自分の魅力を充分に理解している。

「早川口駅に着く直前に席を立て隣車両に移るのね。あとは一緒に」

北口改札の鈴八ってわけ。」

なんとまあ、まるでイタズラをしかける子供みたいです。

「はあ・・・、短時間のテストですが十分な行動力ですね・・・。ところで蘭さんは出てきてませんか？」

「私は、アレよ！留守番してたのよ」

「蘭さんは陸上部の練習がお有になりますので。」

最後に鈴さんが優しくかばった言葉・・・は、じつはそちらもサボっていた

蘭さんにグサツとつきささる嫌み。

しばし二人の目でのやりとりがあったらしい。

「あ、鈴八ってリンの家のお店だから！。で、昨日のとっても美味しい

シュークリームはリンお手製のウエルカムスイートなのでありましたよ！」

蘭さんの持ち上げ、よいしょ、点数かせがらしいです。

「あと基地は私の家でありますよ！」

え！そうだったのか！！、あぶなくボロ家と言いそうでした・・・。

蘭さんはいかにも元気で活発な女子であり、ショートカットの童顔なのに

おそらく爆●なのも含めて充分にモテるだろうなあ・・・であります。

性格が抗して目を見て話せますが、静かに見られたら3秒持たないかと・・・。

「新会員の件で、新入生女子2名が確保されております！」

話題を変えることでさささと流す蘭さん。

どうぞー！と入口に手をかざしたことで目を向けると、そっくりな女子2名が立っていました。

また女子が増えるのですか・・・。

しかもミニ会長系で可愛さアップした感じです。

ああ。。。目が泳ぎます。

03 新会員歓迎

<03 新会員歓迎>

伍井 春香 (いつい はるか)
伍井 夏美 (いつい なつみ)

双子だそうです。まるで人形のようにです。

「合格です」

え？今の合格宣言は会長ですか？

まだ入ってきた二人が座る動作が終了しておりませんが・・・。

「好きなこととか、やってみたいことなど聞いて良いかしら？」

ふつつ先にそれ聞くでしょー！

てか、あの入会テストはどうなったのでしょうか！？

おこがましいのですが、ぜひお聞きしたいのですが。

「この会はミステリーだと聞きました」

「私たち二人とも謎が好きです」

自分も入会テストから2日しか経過しておりません。しかし、ここが

大いに不思議空間であることは深く深く感じているのであります。

「この会はミステリー・・・」との言葉にもたいへん共感するのでありますが、そのお二人さん自体もすでに不思議さんなのであります。

謎が好き・・・ですか。

「とても良い答えだわ」

会長！なぜ僕を見ながら目だけで微笑むのでしょうか。

今、世界の不思議な出来事を研究しそうな秘密団体に名実共に変わったような気がしています。

不思議な会長を筆頭に・・・

「その通りよ！瑞樹ちゃん！」

えええ！？そんな思考までもよまれてしまうのですかー！！！！

「声に出ていますわ」

良かった！よかったああ・・・。蘭さんのことまで考えなくて。

「あの、元々（2日前まで）鉄道ミステリー研究会としていた訳って教えていただくことできたら・・・なのですが」

「ああ、先週リンが”点と線”を読んだのね。で、作ったの」
「せ……ん週……」

「私の西町幸太郎好きは20年前からよ！」
「？」

あんたいくつだ！？

「20年前の作品よんだから。」

違うでしょー！！

「でもね、リンが一昨日手に入れた本がちょっと謎方面が強いみたいで、

だんだんそちの傾向が出てきているのよね。」

・・・鈴さんの手元をちらつと見てみると
くのとらだむくの大予言>

「……………」

「大魔王が空から落ちてくるわ。世紀末に」

「会長……………。大魔王は10年以上前にクリアーできてます・
……………」

どこの古本屋で買ったんだー！！

双子姉妹の続き。

「私たち、不思議と気があうのです。」

「食べたいもの、好きなもの、気になる人」

「だから食べる時間も眠る時間も、お風呂に入る時間も一緒」

「そのあたり、無意識にそろってしまふ原理も解ったらと思うのです」

交互に話しているので、右、左、右、左と視聴覚試験を受けている気分です。

会長はうつとりしています。

ゆり？

「違うわよ。」

そうですね・・・もうつっこみません。

「明日からは基地での会合にいたしますわ」

「了解！あたしは練習ある日は遅くなるけど、どうせ自分の家だから

良いわよねー！」

「いいわ。いろいろと不思議探検しておくから」

「・・・なる早で行きます」

「ところで蘭さん、少しお聞きしたいことが有るのですが……」

「お？リンも居ないぞ」

「？」

「彼氏だろ」

「フリーですか！……ではなくて、会員募集の話で」

「厳選しているんだよ。二人で」

「え？、また先回りされましたが合っているようなので続けます。
入会合格者を選ぶ基準なのです。伍井さん方は解るような気がしますが、

僕は自分でも謎で……」

「ああ。素直、判断力、私たちに下心無し」

「え？と、下心まったく無し……では無いかもですが……」

「それは今はだろ！今無くてはこっちがさびしい」

「……少し謎です」

「しょうがないことだが、リンはあんな感じなのでファンも多い。
わたしもまんざらではない。で、下心で寄ってくる面々ばかりに
なったら思い切り楽しめないじゃないか。なのでその部分を排除
したらこうなった」

「良かったのか悪かったのか……」

まあ、最初は鉄道研究会のことでいっぱいだったから、
あんまりエロ心までまわらなかったし……。

「それにいじれそうだし、使えそうだし」

「それって、僕の評価続きですか？」

おもちゃにパシリか……

「瑞樹ちゃんにもメリットあるじゃん！女免疫つけられるし、
なにより美女は目の保養だ！もしかしたらポロリもあるかも？」

……

「モハ１０１、クハ２０１、サハ３０１……」

「なにそれ？呪文？」

「ええ、見失いかけた自分を取り戻す呪文です。ラリホーです」

どうやらこの５人が正式にミステリー研究会に所属決定のようです。

鈴会長、蘭さん、春香さん、夏美さん。……それに自分。

どうにも前者とはつりあわないのですが……、

これから平静でいられるかどうか、苦手を克服できるか……とても不安です。

04 会議は踊る

< 04 会議は踊る >

昼休み、会議は延期になったとのメールが会長から入っていた。伍井姉妹への連絡も委任されたので探しに行くことに。

どこのクラスか所属不明ながら、あれだけの逸材が目立つことは確かで、

7クラスの最初で片方を見つけるのに成功したところでは。

ヘタレな自分は、声をかけるため気持ちを集中しているところであります。

1年A組です。

「・・・伍井さん」

「・・・はい」

「今日の集会なのですが、延期になったそうです」
「はい」

「あの・・・、妹さんにも伝えていただけますでしょうか」
「今、伝わりました。」

「・・・あ、すみません。お姉さんへも・・・でしたか」
「今聞いてます」

「・・・・・・・・え・・・・と」

「私、姉の春香です」

「あ・・・・、お二人のこと、まだ解らなくて・・・・。すみません」

ハッキリ言いまして、差がまったく解りません！

妹さんに伝わった・・・・とかですが、もしかしてやはりテレパス？

「違います」

!!!!!!!!!!

ビックリしたーーーー！！！！突然耳元でささやくな！！！！

あまりのドキドキで！声がまったく出ない自分をよそに、自分を間にして、後と前とで同じトーンの会話が・・・・

「春香、研究会は無いのですね」

「そっらしいわ。教えていただきましたの。」

挟まれました。オセロなら裏返ります。

「妹さ・・・、夏美さんもこの教室でしたですか。」

「いえ、B組です」

「隣の教室・・・・。やはり離れていてもテレパスで伝わる?!」

・・・・・・・・

スミマセン夏美さん。また同じこと考えてスミマセン。

そしてなにアホ言ってるの・・・な目で見続けなくてください・・・

・
いろいろな意味で新境地に目覚めてしまいそうですので・・・

「水樹さんを見かけましたので、その後ろをついてきてたのです」

「・・・いつからでしょう?」

「「ヘタレな自分は、声をかけるため気持ちを集中している」あたりからです」

「・・・真後ろに?」

「ええ、ピッタリと」

気配なく後ろにいないでください・・・。
そして声かけましょう!おねがいします。

ヘトヘトです。

放課後です。研究会の基地にあります。てことで欄さんの部屋です。

正直、女性の部屋に入るの初めてなものですので、たいへんたいへん緊張しております。

なぜにこのような状況になったのでしょうか・・・。

駅で電車に乗ったまでは覚えてます。ヘトヘトでした。

「降りますわ」

頭の上からあのよく通る声が。

気付いたら欄さんの足が目の前にありました。

「足見て正氣に戻った？エロだな」

・・・否定しません。

「お見舞いつてうれしいんだけど、ときどきパニックは要らないから」

「刺激って重要ですよ」

紅茶をそそぎながら楽しそうに見えるのですが・・・、鈴会長。

そして、今日はパフェですか！

「リンだけだったら別に問題ないのよ。」

「そうね、いつも下着の5、6枚は落ちているわ。だいたい洗濯あがりの」

ものだから私は気にしないけれど、ごくまれにクルクル丸まったパジャマの

下とかと固まってあったりするし、その場合は使用済みなのよね。パジャマとまとめて脱ぐ必要性を考えると、まるで布団の中で脱いだのを

足で落としたようなと言えば解りやすいかもしれないわ。ではなぜその

必要があったのかしら？。その答えを私はとても言えませんが、あくまで状況の説明だから気にしないでね。だってそのままですとまるで裸になる必要が有るみたいに聞こえるわ。」

紅茶のカップを欄さんに手渡しながら、まさに絶妙なタイミングで一気にしゃべった鈴会長のおことばであります。

対して、カップを放せないことで流れ出る言葉を制止する動作に移行できないまま、目を見開いた欄さんの顔。あ、手はカップとともに震えてます。

しばしの静寂をやぶったのはやはり欄さんでした。

「だ！！！！な・・・なんてこと言っているの！！！」

ただいま両手を上げました。

ああ、カップが空をえがいて飛んでいます。今、頂点の折り返し地点です。

液体が出てまじりました。やはり空中を広がっております。なぜでしょう？

今自分のすわっている地点をつつみこむような軌道をえがいております。

ビシャッ！

またスローモーション体験をしてしまいました。

「○× してないし！！ □ だつてないし！！！！裸じゃないのよ！！！！」

欄さんの抗議はまだ続いておりますが、どうせカップ落とすのなら鈴さんがしゃべっている時にでも良かったのではないかな・・・なんて。

あ、裸つてアレですか？、やっぱりここですよ。 蘭さんのハダカなんです。

ああ、想像が湧いてきてしまいましたよ。 はやくラリホーの呪文をかけないです。

「妄想セクハラ禁止！」
バシッ！

おさまりました。 やつと状況を理解できる頭にもどりまして。
妄想素材集にコレクションいただきました。

さて、なぜ会長と自分がここに居るのかの疑問でした。

蘭さん、どうやら午前中の体育で足をいためたとのこと。
検査の結果は多分捻挫だとのこと、 大事を取って早退したとのことです。

で、お見舞いとクラスの連絡を兼ねて鈴会長が乗った電車で

ばーっとしている自分を見つけたのだそうです。

放心状態でしたので、まったく気付きませんでした。

（しかも隣のボックスだったらしい・・・）

優しい鈴木会長は、見舞いの旨と同行者の名前を蘭さんにメールして即電源オフ。到着するのに5分とかからない場所でしたので、蘭さんの働きはともけが人ではなかったのかも想像いたします。

会長・・・、けが人へのおこないが・・・S・・・？

しかし、パフェとかちゃんと3人分有ったのですけれど・・・
自分はほんとに偶然みつかったのでしょうか・・・？

先ほど身体で受け止めた紅茶も良い具合にシャツにしみ込んだ頃です。

「会の略称考えたいの」と会長。

しばし腕組んでた蘭さんが

「Mystery societyだからMSでどう!？」

「MS、MS、エムエス・・・どす」（語尾上がりの京風）

会長、年いくつだ？

「じゃあ鉄道ミステリー研究会だから、TMS!」
「いいわ。TSM。」

いや、違うでしょう!SMって。
そして鉄道の文字、復活ですか!とツツコミ即、内心うれしが
る自分です。

「3文字の方が良いと思いましたの。鉄棒のTでも良いわ」
・・・鉄棒ミステリーって。

「では、今からSMで」
2文字かよ!
「はい。TMSですね。」
「そう、TSM」

ツツコミ、疲れたのでパスして良いですか・・・?良いですよ・・・。

略称が決まったようです。
ほんと・・・、この強烈な面々で女性への免疫力もついてきたみた
いです。

美人の考えることって解らない・・・と。
自分は今後、女性と普通の会話できるのでしょうか・・・。

「ああ、そういえば」と携帯を出しつつ自分。

「今日、伍井姉妹のお二人から携帯番号とメルアド聞いておきましたので転送します」

「あら、助かるわ。これで二人に同時に送ったメールをどちらが先に見るかで遊べますわ」

「……会長……、キャラ謎です」

「まあ、私を辱めてどうするつもり？興奮してしまうわ」

「ええ、そうですね。そうでしょうね。普通興奮してしまいますよね」

「ツッコミスルー桶？でヨロシコです。」

「では蘭、お大事にね」

「お大事にです」

「なんか疲れたけど、ゴチでアリガト〜！」

後半はほんと疲れたって顔してましたです。蘭さん。

基地？部屋を後に、会長と外にでました。

「シャツ、汚してしまいましたたわね。ご免なさい」

「あ、いえ、こんなの平気です」

「丁度バイクが有るから送るわ」

「え？」

見ると見覚えある赤いバイクが駐輪場に。
自然な動作でメットを取り出して手渡されるまでじっと見てました。

「これ、ミニバイクじゃないんですか？」

黙って指さしたプレートは黄色。

ああ、小型二輪なのですね。

「乗ってください」

「え、あの、どこにつかまって・・・」

「手はこっちらに」

「・・・！！！！」

引き込まれた我が腕は、会長の細くて柔らかいウエストを一周であります。

鼻血でそうです！密着です！や、もうダメでしょう！

今、僕の五感は最大限の記録を開始してます。容量オーバーです。
会長にしがみつくコナキジイです。俺の時代がキターです！

キュルルっブオオオオン、ぐわわ・・・！！！！

「！！ギャ~~~~！！ちよ~~~~っとういり~~~~なんてアリエンデ
シヨ~~~~！！！！」

「少しだけシリンダーを広げたの。恥ずかしいわ」

聞こえませんが、意識が・・・密着なんてもうどうでも良いのです・・・。

死ぬ・・・！！放したら死ぬ・・・！！！！

恥ずかしい・・・？なにが？？いや、もうどうでも良いのでおろしてええええ・・・

家に着きました。生きてました。脳は死んでます。

あ、少しだけ紅茶と違う液体がにじみましたが・・・

顔とズボンにですが・・・、いいんです・・・、そんなこと・・・。

生きているって素晴らしい！！

05 会長引退・か？

<05 会長引退・か？>

「とうすば・・・？」

なんでもありません。意味は深くないですのでスルーで。

話は戻って、今日はあの入会試験から一週間目です。

自分ではあまりの濃さに一ヶ月ぐらいな感覚になってます。

で、蘭さんのケガも無事完治！そこでこれから初めてのフルメンバ
ーで

TMS基地へ出陣となりました。

「魔法学校へ行きましょう」

「は？会長ですか？今の」

「みくた〜い〜よお〜！」

「行き」

「ましよう」

最後の2行は合わせ技です。ひさびさ同行の春香&夏美姉妹。

先頭を歩く鈴会長の正面は学校近くの金十かねと駅。

このあたりでは一番大きいのです。

このメンバー集合だと、回りに居る一般人からの注目をあびてます。
その真ん中にいる自分は・・・、完全浮きまくり。隠れたい・・・。

「2と1/2 番線はどこかしら？」

「あの、会長……。その中途半端な数字は・・ハリポテでしょうか？」

「恥ずかしいわ」

微妙に古いのが恥ずかしいのだろうか……。？と心で思いつつ・・

「あれはロンドンのキングスクロス駅の9ー3 / 4番線だったかと・・。」

ここは日本の地方都市ですし、駅も2番線までしか無いですし・・」

「駅名」

「金十駅ですのでいっさい英国風にはなりません」

「そう、金よ」

「きん？ゴールド？」

「そのままキンと読むわ」

「きん……。キン……。キングスのキン……。ですか……」

「

「そして十」

「トではなくジユウ？」

「ではなく、字を感じて」

「……。……。十字架……。クロス……」

「はい、キンクロス駅」

「……。なんか微妙に下ネタ感です。」

「キン」

「キン」

「クロス」

「クロス」

はい、そこ、二人は黙る！

ああ、いよいよこの二人にもツツコミいれちゃったよ……。
僕の普通を返して欲しい……。

で、普通に2番線から電車で2駅。

「着いたわ」

「あゝ！ たっだいまゝ！ おやつちょうだい！！」

まあ、蘭さんは自宅だからこうだろうな。

「今日」

「の」

「おやつ」

「は」

「何か」

「な」

春夏姉妹のこれがデフォルト？ 楽なんでしょうか？
しかし、自分同様にこの二人もこなれるのが早い。普通に何年も付

きあい有る言動です。

そんな観察しつつ自分も最後に

「おじゃまします」

時間は経ちまして只今会議中。

「あ、そこ、いいかも、あ、あ、」

「お願いですので、僕の左右に座ってアヤシイ声ださないでください！

ステレオで記録しちゃって再起不能になりそうです！！」

「あ、いくいく！」

「あああ〜！キハ20、キハ25、キハ30、キハ35オ〜！」

「なにソレ？九九？」

どうしてこの二人は丸尾兄弟カートでこんな声出すかなあ？左右で・・。

後では蘭さんが背中合わせて座イスがわりにされているので、なにかと密着感がキツイ。

「これも二人の能力を確かめる方法なんだってさ〜！」

おゝい、体重かけるなゝ！！前屈が苦しくなってきたんです。うう・
・重・・

>バシッ！

軽い、ちょー軽々ッす！（涙目）

『ああー！だめー！！』

「おおー！」

>ぐぐ、ぐしや・・・

「ぎゃ＝！つるつる！つつちゃうー！！」（泣）

・・・これ、会議か？

「出来たわ」

『まってましたー！鈴会長』

「うひょー！美味しそうー！」

会長はスイーツ材料を自宅から持ってきてきたみたいで、今まで台所で作ってたようです。

『なんかスゴい……。』

皆で会長の作品に見入ってしまった。あまり詳しくない自分でも、たしかにスゴイと感じてました。

艶やかでおいしそうなフルーツと、何層にもなったクリーム、クッキー、

琥珀色は・・・キャラメル？

その多種多様な素材が、絶妙なバランスで混じりあっている。けっして醜くなく、ジューシー感もそなわったスペシャルパフェ。

「とても嬉しいわ。そんなに褒められると食べてからガツカリとかが怖くなってしまう」

「では」

あんなにうるさかった皆が、しんと静まってスプーンにすくったパフェを

見つめながらゆっくりと口の中に……。

「……………ん……………」

「……………すう……………」

「……………」

「う……………」

大きく見開いた目は自然と鈴会長を見つめる。

「嬉しいわ」

何も言わなくても通じたのか、会長の目はほんとうに嬉しそうな優しさをたたえていた。

「会長引退してパテシエ目指そうかしら」

皆、うなづく！

「でもいっぱいミステリーを楽しんでからね。それまでは引退もパテシエもおあずけ。」

ほんとに今の鈴さん、楽しそうです。

06 すべてはゼーレのために

<06 すべてはゼーレのために>

ここは渡り廊下です。食後です。

背中をフェンスに預け、この季節独特の心地よい風と日差しにまったりとしています。

昨日発売された月刊誌を読みながら、新商品紹介での提示金額と懐とのすりあわせに

残りの思考を総動員させていますので、癒し（五感）と癒し（物欲）に包まれた

幸せなひとときです。

「やはり、今回のターゲットはこの旧型国電に絞るべきかな・・・。

生産数を考えると後々手に入れるのが極めて困難になりそうだ。

・・・しかし・・・、実体採取に使う遠征装備も」

頭の中の計算機がフル稼働中。

「もうひとつ長ダムが欲しい。あのレンズさえ手に入れば長射程から新たな捕獲に開眼できそうだし・・・。」

「長たま」

「レンズ」

「・・・！っわあああ！！！！」

突然耳元での声に、ほんと口から心臓が出るマンガで通路反対側フ
エンス

まで飛び出す自分。

・
・
・
・
・

2人の女生徒が後ろに立っているのを30分ほど黙って見続けまし
た。

（実際は5秒ほどです。思考が混乱すると時間の感覚も消えてしま
います）

「・・・春夏姉妹・・・」

ようやくととりもどしつつある自分が出した声

「「はるなつしまい？」」

「・・・！？あ、いえ！、春夏さん夏美さん！」

「春夏さん、どうやら私たち二人を合わせた略称のようです」

「日曜お昼のテレビに出てきそうなのを俳名されたようですね、夏
美さん」

「私、却下したいかと思いました」

「同感ですね。少しイラッとした何かも浮上してきました」

「蹴り入れますか！」

「ちよっ、ちよっ！、すみません！ご免なさい！！春夏さん、夏美
さん！です！」

「まあ、今回は」

「聞かなかったことにしましょう」

・・・、は・・・は・・・、疲れる――。

「「はるなつ」を読んでいただきますよう」

あゝ、えっと・・・、そちらも赤いカーペットのテレビに出てき
そうですが・・・
ツツコミは死を呼び込みそうなので無しの方向で・・・。

「りよ、了解しました。・・・あの、たびたび恐れ入りますが、も
う少し

前もって気配いただけますと助かりますのですが・・・。

そして、突然両耳からささやき攻撃は日本の平均寿命にも影響でま
すので・・・

無い方向にしていただけましたら・・・。」

「そうね、「なつつはる」だと、まるでピーナッツを額に貼るみた
いでしょっし」

「聞いてます?」

「でも、春香さんが姉さん・・・なのは、ただかお母様のアレから出たのが
ちよつと先だったからなのよね。」

「でも、まぎれもなく事実だわ、妹の夏美さん」

「とりあげた看護師さんが順序間違えているかもしれないわよ」

「それはどうかしら？ 私はそのような不手際があつたなどの仮説、
信じないわ」

「そもそも、アレの中でのポジション争いでの行いは
少々スポーツマンシップに反するのでは無いかしら？」

「勝負は勝負。いち早くアレの出口につっこむことが勝利への近道
よ」

「だいたい、時間をさかのぼれば父様のソレが母様の卵にたどりつ
いた順序こそ
反映されるべきだわ」

「それは私のソレが遅れたと言われるのかしら？ セイコーのストッ
プタイマー
には記録されてないですわ」

「アコの差ですわ」

ソレのどこにアゴが有るのかは解らないですし、あなた方の記憶つて、

いつから有るのでしょうか・・・？

ああ、たしかに胎教とかで音楽や本を読んで聞かせることも有るようですから、

まったく無しとも言えないのでしょうか・・・。

そもそも、アレとかソレとか・・・、その出口って・・・、自分のように

免疫の無い奥手には妄想世界ネタとしてヘビーな部類に属しております。

フェチではなく。

「あの・・・、ほのぼのとした会話はそのあたりで終了したら・・・」

「近年まれにみる大げんかです」

ああ、ステレオで言われました。大げんかだったんですか・・・。そこまでは・・・思いも出来ませんでした・・・、てか見えないです。

「・・・でも、僕に声をかけたのは何かあったのではかと・・・？」

「・・・ああ！」

「そうでした」

言いながら春夏姉妹・・・もとい、はるなつつが自分の両となりへ。
・・・出来ればこっち向いて立たないで欲しいのですが・・・。
左右から同じ容姿二人に挟まれて落ち着きません。
とりあえず自分としては廊下側に向いておきます。

「瑞樹さんは写真をされるのでしょうか？」
左からの声で顔は左向け左。

「先ほどレンズがとの声が耳に入りまして」
右からの声で、今度は右向け右。

「撮影に慣れていらっしやるのでしたらお願いしたいことが有りまして」
左向け左！

「あまり知らない方にはちょっと話すのも難しい内容ですの」
右向け右！

「いかがでしょうか」
左向け左！

「無理にお願いではないので」
右！

「少しだけ」
左！
「考えて」

右！

「ただけまし」

左！

「たら」

「！！！！、わざとでしょう！確信犯ですよね！！楽しまれていますよ
すよね！！！！」

再び通路反対側まで飛んで姉妹の正面からの自分。

「少々」

ええ、ええ、同級生でもいじられる自分であります。

嬉しいと感じるまではいま少し経験値が欲しいところであります。

あゝ・・・、首寝違えたような気持ち悪いような・・・酔ったよ
うな・・・。

「あゝ、なにか撮りたいものがあるのでしたらお手伝いします。
会員仲間なので気兼ねなく言ってください」

いつも電車ばかりしか撮ってないのであんまり自身無いのですが・
・・・。

コンデジや携帯などよりは画質良いでしょうし、問題なさそうです。

「で、何を撮れば良いのでしょうか？」

「・・・私たちの」
「・・・恥ずかしい」
「・・・姿」
「・・・です」

「・・・え〜〜・・・、あ、月刊誌買ってました。新刊です。
予定きめなきや・・・。パラパラと・・・目には入りますが脳
まで届きません。
何？何？・・・恥ずかしい？って何だっけ？タイのカレーにはナン
だっけ？

「・・・ですよね！」
「だからぜひお願いします！」
「その時はじゃんじゃんお手伝いです！」

あゝ、右側、廊下の先の校舎内から賑やかな声が聞こえている。
死んだ思考を通り抜けて頭の中で響き渡ってます。

「だからちよつとだけでも」
「そうそう、もりあがります！」

「まさに無敵です！」

今度はあゝ、左側の校舎からの声が。

無になるって心境が周りの音を増幅しているのだろうか？

でも普通逆に何も聞こえないとかだと思っただけれども・・・。

その声の基が両目の端に確認できました。

右から白い大きなかたまり。

左から黒い大きなかたまり。

自分の立っている渡り廊下の中心部分に近づいてきます。

ああ、かたまりと見たのは集団だったんだ・・・。

しかし、どちらもスゴイ人数。ざっと十人ぐらいは居そうだな。

自分は・・・ただボクッとしている。なんだったっけ？

ああ、春夏姉妹の写真を撮るんだ。恥ずかしいな・・・ではなく、
恥ずかしい写真？

今一度恥ずかしいってナンだっけ・・・？

あ、白と黒の集団がぶつかる、合わさる、混ざるとグレーになるのかな？

などと無意識にかんがえていた自分の前で、
その集団が合わさったと同時にピタッと静止した。

あ、割れた。それぞれの集団の真ん中が開くように割れた。

あ、なにか出てきた。UFOから宇宙人が出てくるのを何かの映画で見たけど、

そんな感じか？それとも十戒のモーゼか？

ああ、宇宙人が僕の目の前に。二体。

「なにかトリップしてるのかしら？」

「拾って食ったか？」

「丁度よかったわ。今週は会合無しです」

「わたしが練習でいっぱいなんでね。私を見ての妄想セクハラも禁止だぞ。だが、

なにやら妄想もできないくらい空になってそうだから・・・今は許そう」

「また連絡するわ」

「聞こえた？」

「了解です」

これは大きな集団で見えなくなっている後ろからの春夏姉妹。

ふたたびそれぞれの集団の中心に収まった女子たちが、賑やかな声とともに校舎の中へ消えていった。

正面には先ほどと同じ位置に立つ春夏姉妹。まったく変わってない。

「あら、気付かないのね」

「以外と弱いわね」

「私たち、位置が逆さになったの」

・・・わかりませんです。同じです。

「では」

「私たちも」

「連絡」

「しますね」

「はい・・・。」

去る姉妹。・・・猿芝居・・・は語呂が似てます。思い浮かんだだけです。

突然人垣に取り囲まれ、有る意味死ぬかと思いました。

黒い集団↓どうやら陸上部男子

白い集団↓おそらく家庭科を終えた2年同級生女子。

お二人の超越した人気ぶりをあらためて実感いたしました。

ブルル・・。メール着信です。

「男の子にも人気よ。by R I N ガール」

ああ、昼休みも終わりですね。あなた純粹に日本人ですよね・・・。

今日のツッコミ終わり。

07 疑似ロボット高性能

<07 疑似ロボット高性能>

フーン！

ダダダダダ・・・！

真横を風とともに走り抜けたのはクリーム色の電車。

「ふう、今のは少し寄り過ぎたかな・・・。もうちょっと引いた方が良かったかも」

液晶で撮影したカットを確認しながら、位置を微調整。

ただいま、駅ホーム端で三脚たてたカメラで電車を撮影中。いわゆる駅撮りです。

ここは自宅からだと乗り換えを2回で2時間。学校最寄り駅からでも1時間半離れた

とある駅。

とにかく、まあ程々の遠出です。

新緑が気持ちの良いこの季節ならではの醍醐味。光線具合もまずまずで、ほんと久しぶりの癒される時間です。

新しく手に入れたレンズテストでもあり、何本かの電車をおさめてまずまず納得できたのは

11時の鐘が聞こえた頃合いでした。

「それにしてもステンレスカーが多過ぎて困るな」

「やっぱり狙うのは旧型車ね」

「そうそう、来る確率が少な・・・ク・・・？」

「狙うポイントを変えたら？もう少しターミナルに近い駅のほうが

スジにはいつているかも」

「・・・・・・会長!？」

「あら、奇遇だわ」

後ろからの声に承えてしまった自分が・・・・少しハズカシイ・・・・。
ではなくって、なんでここに?こんな所に??

今日は日曜だし?????

「丁度良い頃合いだわ。行きましょう」

「・・・・は??。ぼ・・・・僕も??」

「ごめんなさい。待ち合わせ少し遅れちゃって。いそがなくちゃね」
「え?。。え?。。ええ??」

陸上競技会ですか・・・・。運動場最寄り駅でしたね、あそこ・・・・。
待ち合わせ・・・・って、お約束してましたでしたっけ?スミマセ
ン・・・・。

すっかり忘れてたみたいで・・・・ほんとに失礼なことを・・・

「約束してないわ」

おいしい!!

「ほんと、奇遇ね」

そうでした、最初から「奇遇ね」といってました、よね!会長うう

う！！

スタンドに入ると、ぽつぽつ固まった集団が思い思いの場所に。おそらく学校ごとに

わかれているのだと納得。

この競技会は大きな大会ではなさそうです。そのかわり中学と高校とでの合同開催らしい。

まだ小学生の面影が濃厚な選手も居て、なんだか不思議です。

「やつほー！応援ご苦労〜！」

ちょうど座ろうとした場所の正面からすこぶる元気な声。

会長は少しニコツとして手で答えています。

自分はたちあがって「礼！」

蘭さんもニコニコした後、スタンド手すりの下へ消えていった。

（なんか変な踊りもしてたけれど・・・、後で聞いてみよう）

どこのトラックも同じように、スタンドとの間に半地下の通路があるようで、

たぶんそこに入っていったのだろう。

「蘭ね、大きな競技会には出ないの」

「・・・？、そうなんですか・・・。」

会話もそこで途切れた。少し横で走り幅跳びの競技中だったので、そちらを無意識に見てみる。

「やあ!!!!」
「ドス！」

ひとりの女子が跳んだ。おそらく高校生、それも上級生だと思われる。

走り始めは遠かったので解らなかったが、踏み切った手足がまるで空中を

走り抜けるように・・・、そして前に合わさった姿勢のまま少しずつ落ちる。

最後は、ほんとにその姿勢のまま、遠くへ、少しでも長くとの声が聞こえてきそう。

「ふう・・・」

自分、思わず息を止めてたみたいです。

それだけ・・・綺麗なスローモーションに見えました。

「出てきたみたい」

会長の声で顔を正面に戻すと、数人の女子がトラックの中へ。向こう側がスタート地点みたいです。少し遠くて顔がよく見えません。

「赤い上下ね」

やさしく教えるような声で、その一人に集中します。ああ、あの髪はたしかに蘭さんかもです。

「あ、カメラ」

持っていたのを忘れてました。望遠を通して見たら良く解るかもしれません。

ついでに撮影して後で渡すと喜ばれるかも。

「！」

息をのみました。ファインダーいっぱいには蘭さんの顔が見えます・・
・が、

違うんです。たしかに蘭さんなのだと思います。
でも・・・・・。

「・・・目が・・・」

そう、目。いつもの大きくクリツとした目ではありません。

細く・・・、少し瞳を落としてどこか一点をみたまま動きません。
口は少しだけ開いたまま。

ズームを少し引いて身体全体を見えます。

手はすつと下ろされたまま。胸はすこしだけ上下しているのは、みても判るくらい静かでゆっくりとした呼吸のせい。
腰から足もいつさい動きません。

カメラを通して見る自分も、呼吸をおとし、腕は胸に引き寄せた撮影スタイルのいまま固まります。

ただ顔をみるためだったのが・・・、今では一瞬のチャンスを逃さない緊張に。

「・・・・」

なにか係りの人が叫びました。

ゆっくりと動き出した蘭さん、あるポジションで腰を落として・・・動きが止まります。

「・・・・」

二つ目の声。

腰が上がり、腕もまっすぐ伸びて

・・・動いた！！

「パン！」

かすかな音が耳に届いた時には、もう身体は一直線に伸びている。

顔はまだ下向きのまま。

胸にまでとどくように折り畳まれていた方の足が、前に延びていく。長い！

頭はまだ下向きのまま、ほとんど変化なし。

カーブを回ってくると、足先まで長くて真っすぐな身体の動きがより鮮明になった。

やがて正面の直線に入ってきた。前にはもう誰もいないことで、トップだと気付く。

足先が地面を蹴っているのだろうが、とてもそう見えない。

さっき見た幅跳びのシーンが思い出された。まるで空中を走っているよう。

後ろとは、2人ほど入りそうな間が出来ている。もう間違いなくト

ツプだろう。

そう、そのままラインを抜けていった。

流している蘭さん。カーブ半周くらいしてからゆっくりと止まった。ヒザに手をあてて前屈みたいなまま息を整えている。

「やはり、今日は少し遅いわ」

タイムを見ていた会長の声で、自分もやつとカメラから顔を外した。指に力を入れてたみたいで、ちよつと硬直気味に震えている。息も忘れてたかもしれない。

「・・・？、なにか具合でも？」

「ほら、この前足を傷めてたでしょ。」

「あ、そうでした」

捻挫していた・・・のを忘れてました。

「感想は？」

「・・・あ、ああ。・・・いえ、・・・なんと言ったらよいのか・・・今は思いつかないのですが・・・。綺麗でした」

「そう。伝えたらきつと喜ぶわ」

会長の手がすつとカメラを指さします。

「撮ってたでしょ。今見れるの？」

「あ、はい。デジタルなので。画面小さいですが確認できます」

そして最初の顔アップまで戻して会長に渡し、先送りの操作を手まねで伝えた。

じつと見ていく会長。

自分も横から画面を見つつ、静かな時間がゆつくりと過ぎていく。

「目立ちたく無いんだって。小さな競技会だけ出てるみたい」

「え・・・？あ、蘭さんの話」

「それも一次予選だけ。後は辞退しちゃうのよ」

「え、ええ？なんで・・・、予選だけで本選は辞退ですか！？」

「ねえ、あんなに早いのに。出れば良いところまでいけると思うの」

「そ〜れ〜は〜！あたしもピチピチ女子高生だからでえ〜す！恋に愛に生きるからでえ〜っす！乙女の時間はとても貴重なのです〜！」

「・・・！！あああ！・・・ビックリした〜！！。蘭さん！急に耳元で声ださないでください〜！」

「あら、お疲れさま」

「えへへ〜！光ってた！？、ねえ光ってたあ〜！！？」

黙ってカメラの画面を指す会長。

「おお〜！！、なんかあたし、かつこよくねえ〜！！超マブくね〜！！！」

「・・・マブ・・・？」

「なに？違うっつの？」

「いや〜！ほんとドキドキしました！！！すんごくかつこよくて・・・、蘭さん見る目、変わりました〜！」

「でしょ〜！！！！って、あなた、今までどんな目であたし見てたのかしら？」

あ、目が座った・・・

「あ、これこれ！この画像見たらほれ直しちゃいます！！！てか、ほ

れちゃいます!!」

「んっふふ!よし!許そう!」

「でも、ほんとにすごくいいわ。これだけ引き出してしまいうカメラマンも合格だわ」

「んっふふ!よし、後で何かおごろう!」

「えへへ・・・」

「あら?」

「・・・ん?」

二人の動きが止まった。

不思議に思った自分は、会長の手の中の画面をみてみ・・・た・・・
・・・ら・・・

「やだわ」

「・・・みっずっきつちゃあゝん・・・なあゝにかなあゝ
?この写真わあ?」

あゝ・・・、ちよつとのど乾いてきました。

ああ、どんどん乾きます。なので飲み込む唾も無いのに・・・、のどがこくこくと動きます。

。。。、そうだ、ジュ、ジュースでもかってこようかな・・・。うん、そうしよう。

「大きいわあ」

「ごらあ!そこ!ー!声に出して感想を言わない!ー!」

「アップね」

「・・・!ー!。ごおおううらああ!瑞樹いい!ー!」

あ、あ、。。こっちに予先が・・・

「はい=いいいい!ー!」

だって、最後に前屈ポーズをするとは思わず……！！
たまたまシャッターをおしてしまい……、
そのポーズもこっちに向かってしていただけましたらお尻アップに
ならず……、
あ、こっち向きも少々まずいのでしょうか？ですよ？
胸の谷間とか……、では会長の感想はどっちにしたって「大きい
わぁ」に
なりますねえ……ええ。

え……、蹴られました。せめてスパイク外してからにしてくだ
さい……！
ぽつぽつってズボンに穴明いたです……。あ、足も痛いのですが・
。。。

「じゃあ、顧問に挨拶してくるから！一緒に帰ろ！」
「着替えないの？」
「帰ったらシャワー浴びるからジャージ着るだけ。」
「そう。では正面口で待つわね」
「ほいほい！」

あゝ、元気です。
僕に少しわけてもらいた……。です。

「しかし、会長もピンポイントで蘭さんの競技だけ見にきたんで

すね。よく時間よめますね。」

「ふふ、ミステリーガールね」

・・・ガールって・・・

「何かしら？」

・・・ミステリーガールで間違いありません。はい。

集合完了です。

「ちょうどお昼ね。食べてく？」

「このまま向かったほうが良いかもしれないわ」

「じゃあ、そうしよ〜！。腹へったらなんでも美味しいから〜！」

あ、なんか美味しくないもの食べそうな気になってきました。

「次の行き先は、ワールドスクエア動物森林植物公園駅ね」

どこだそれ？・・・てか、帰るのではないのでしょうか？

あ、会長がそつと肩に手を置いた。

「あなたの身体で、もっと私を喜ばしてね」

・ ・ ・ ・ ・ わざと言ってますね。その潤む目もやめてください！
呪文呪文 ・ ・ ・ 。 ああ、やっぱり今日も自分には安らぐ時は許され
ないのですね ・ ・ ・ 。

08 ひとさじの砂糖

< 08 ひとさじの砂糖 >

「あの、会長……。」

「なにかしら？」

「その携帯の画面なのですが」

「見られてしまいましたのね。いけないわ」

「……先ほどの蘭さんの……写真ですよ。僕が撮った……」
「はい。ありがたく使わせていただきます。」

あれです。あの最後の大きな……ナニの画像です。

ええ、しっかりシメられた元凶の……。

「なぜ！そんなの持っているのですかー！！！」

「デジタルカメラのデータを私の携帯へ送ったのです。普通はそのようにして手にいれるかと思いますが」

「そ、そうです。……ですが、カメラからどうやったらデータを飛ばせるんですかー！！！」

「ああ、そのことでしたら簡単です。あそこの親切な方のPCへ一度コピーしてから私の携帯へつなげただけですわ」

「親切な方って……、あの眠っているサラリーマンの手にあるパソコンか！？」

「安心して、もちろん形跡はすべて消してますので」

「……なんていいますか……、むちゃくちゃです。」

「……でも、なんでわざわざ携帯にいれるのでしょうか？」

「ああ、これ着信の画面で設定しましたの」

「わ、がああー!!!、そんな、そんなことしたら蘭さんに殺されますー!!!」

「大丈夫よ。蘭には絶対見られることないもの」

「なにいつてるんですか！会長と蘭せんぱいつて、とおおおつても親しい仲でしょう！」

「嬉しいわ」

「でなくて！だから見られる危険が渦巻いてますー!!」

会長、ふふつと目が笑いました。

「蘭からの着信に設定した画像なの」

「・・・へ？」

「説明しますと、蘭が私に電話しますね」

「・・・はい」

「で、私は蘭の大きな・・・いえ、可愛いお尻・・・ではなく、後ろ姿を見て電話に出ます」

「・・・なんか変な組み合わせですが・・・、そうですね」

「では、その時、蘭はどこにいるのかしら？」

「・・・あっ！」

「ふふふ、わかりね。で、絶対に見ることが出来ないのです」

そのネタの怪しさ・・・は別にして、ほんとうに関心してしまいました。
た。

目の前に居る人にわざわざ電話しませんから。

「あら、すっかり忘れるところでした。」

「何でしょうか？」

「その蘭から先ほど電話があったの。ああ、だから横にいたあなたに見られたのですわね」

ああ、さっそく活用されたんですね。そのお尻画像。

「目標を捕捉したみたい」

「・・・目標？」

「おゝまたゝ!!。連れてきたよゝゝ!!」

あ、その蘭さんが来ました。

後になにやら黒い服を着た女性が二人います・・・が・・・
あれ？春夏姉妹??

「ハルナツシマイ・・・」

「あ、ではなく!」はるなつと」のお二人です!」

「・・・キサマ、ヨイドキョウダナ」

「え？」

「ボルト・ナット・ヨバワリトハナ」

「・・・はるなつのお二人でえす」

「イマサラオソイデス」

「ソシテ、ヨセキノシカイカ？」

「・・・誤りますので、普通に話してください」

「デキヌ」

「ナゼナラ」

「ワタシタチハ、シッコクノマドウシ。ゲセンノモノドモ、トハ、
チガウノダ」

・・・、はい、下賤ね、僕は下賤。・・・下船したい。

「無事にお話ついたみたいですのでお食事にしましょう」

「いよゝー！！待ってましたゝー！！！」

「お待ちしてましたゝー！！！」

・・・下賤に落ちるの早いなあゝ？漆黒の魔道士さん。

会長は持っていた大きなカバンからいろいろと出し始めました。

そっいえば、今日はまた不思議な服装です。黒くてスカートは長くて、少し膨らんです。

あ、帽子もかぶってますし、雨でもないのに傘持ってるし。

で、この大きなカバンはまたアンティークな・・・。

「・・・会長、今日はまた何か？」

「ふふ、メアリーって呼んでね。メリーだと羊みたいだから」

「読みましたか・・・。メリーポピンズ」

「いいえ、見ましたの。ベータよ」

・・・ベータ・・・ってビデオか？

・・・会長、昭和の人か？

目の前に広がるのは色とりどりのランチ！

これ、会長が作ったのでしょうか？

でも充分に考えられます。だって、パフェの事実も見せつけられましたし。

「まて」

「は、は、は・・・」

「よし」

「いったただっきまー！！」

「おゝ！美味しいー！！美味しいよゝゝー！！」

「あら、うれしいわ」

「ほんと腹へったらなんでも・・・」

バキッ！

「あら、傘が開いてしまったわ」

「・・・言葉を出す前に考えます。」

「それは良い心がけだわ」

あゝ・・・、蘭さんの顔にサンドイッチが張り付いてますが・・・、
気にしないことにしましょう。

それにしても、ほんとうに美味しいです！気持ちの良い天気で、新
緑が爽やかな木々と芝生です。

電車の撮影中止でも、まったくもって文句ありません！

「ところで、春香ちゃん、夏美ちゃん。お話があつたのでは？」

「あ、はい！」

「瑞樹さんをお願いしてたことがあつたのです」

お願いって・・・？この前の渡り廊下でのアレ？でしょうか・・・。
突如思い出しました！なんだかとても緊張してきました・・・（興奮
？）

「私たちの・・・、恥ずかしい姿、撮ってほしいのです」「

「まあ、大胆なお二人なこと」

「おゝ！！脱ぐか！？脱ぐのか！！！！」

蘭さんが乱さんになった。オヤジか！？

「じゃあ、私も脱ぐ～～!!」

え、え!、えええ!!!

ここで、そんな。。。!!、ああ、手をかけた!ええ～～!!!一気に入下ろした～～!!!!!

・・・・・・

あゝ・・・・、さっきの競技場での姿に戻ったんですね。そーでした。そのまま着てました。

「興奮したか?どうだ!」

勝ち誇らないでください。

「いいぞ!おかずにしても。一回500円だ!」

「なにが一回なんですか!そしてそのお金は使用料ですか!」

「2回だとなんと800円!お得だぞ!」

「。。。は～～。。。蘭さんって、その方面のネタはセクハラとか言って怒ったと記憶してますが・・・」

「おゝ!そうだったな!心境変わった。瑞樹ちゃんなら許すぞ!」

「・・・・・・小銭稼ぎでしょうか?」

「3回だと1,000円!これはもう大サービスです!今すぐお支払いを!」

・・・・・・

「で、なんの撮影だつて?」

あ、戻るんですね。ええ、もう興奮しません、恥ずかしいとか聞いても。

「この姿よ」

「・・・ああ、コスで」

なんとなく安心しました。

「あまり知らない人にはお願いできなくて・・・」

「瑞樹さんなら安心ですし」

無害確定ですか。嬉しいような寂しいような・・・。

「あら、では私もお願いできます?」

もちろんです!

「なら、わたしも!」

あなたは先ほどカッコいいの撮りました!

「えっ・・・、ずるい!だってあれ隠し撮りじゃん!」

「違います!。誤解されるようなこと言わないでください。」

で、美味しいご飯の後で、皆さんの撮影会になりました。

回りでもそれぞれコスの撮影されている方が大勢いますので、自然と緊張もせずに。

それにしても、すごくキワドイ方も居ますが・・・なんかエロさとカッコ良さで不思議な感じです。

うーん、初めてですが、コスって芸術かも。

「あゝ！！楽しかったゝ！！」

「ほんとに。私も初めてですが良かったわ。クセになりそうですわ」

「瑞樹さん、ありがとう」

「いえ、僕も電車とかと違い、撮影が新鮮で楽しかったです！」

「でもさゝ、リンと春夏の3人ならぶと、なんかスゴイ迫力ね！黒いし」

確かに！春夏姉妹は4回ほど服チェンジしてましたが、今は元の魔道士？に

戻ってます。真ん中に会長で左右が春夏。

基本、顔も似ている作りなのでなおさらです。

「かいちよゝ、またひとつクリアーだね！」

「ふふ」

蘭さんの言葉で楽しそうな会長です。

「そろそろ帰りましょう。ここからだとして少し遠いから」

「そうですね。蘭さんも疲れたでしょうし」

「あゝ、でも充実感ゝ！今日はすっごく濃い日になったゝ！」

「わたしもです！」

みなさんでお片づけです！

「あら？私、携帯どこに置いたかしら？」

「では僕が電話して鳴らしましょうか？」

「お願いできますか？」

「あゝ、わたし今持つてるからかけるねゝ！」

．．．．

ダン・ダン・ダン・ダダダ・ダン・ダン・ダン・ダダダ．．

なんだこれ？七人の侍？．．．．

なんちゅう呼び出し音を．．．．

あれ？なんかひっかかりますが．．．．

「あゝ！あつたよゝ！。これだよねゝ！」
パカッ

「．．．おうつ！．．．、あの画面は．．．。皆で見いつている．．
」

「．．．．リン、これ、リンの携帯だよね」

「あら、そのようですわ」

「この着信の名前つてアタシで間違いない．．よね」

「あら、そのようですわ」

「「まあ、大きな．．．．」」

ああゝ、春夏ゝゝゝ！！言つな、それ以上言つな！！！！

「みいゝ、ずうゝ、きいゝ、ちゃあゝん」

「．．．．はひ！」

・・・・・・以下略。

「では、目の前でカメラから消してもらおうか」

「はい！！・・・・・・あれ？・・・・・・？？」

「まだ何か言いたいことでも？」

「いえ！いえ！！・・・・・・、画像がないんです・・・・・・」

「消して有るの？」

「いえ、まだ僕は整理してませんでしたので・・。それよりも、さ
つきの競技会のが・・、

全部無いんです。」

「・・・・え？、私の走っているアレ！？」

「・・・・・・はい・・・・・・」

「ええ~~~~~！！、なんで！！、上書きしちゃったの！？」

「いえ、そんなことしてないはず・・なのですが・・・・」

どうして？間違ったのか？・・・・

混乱中の自分です。

「あのね、私がさつき全部消しておいたの」

「。。。。、えええ~~~~~！！！！」

「会長！！！！なんで！！」

「だって、蘭が消してと言ったでしょ」

「そりや言っただけ！それはあの、お尻・・・じゃなく、最後のあの画像を！」

「ごめんさいね」

「ああ、せつかく気に入ってたのに・・・」

「でもね、ここにデータコピーしたメディアが有るわ」

「。。。。会長！！！！」

いったいいつの間に！！

「ほら、先ほどの優しい方がコピーしてくださったの」

「・・・コピーしてって・・・。かつてに人のメディアにコピーして、しかもいただいてきたんですか！！！」

「大丈夫よ、まだ封を剥がしてないのを持ってたみたい。私がマクを破いたわ」

「・・・わざとですね、会長。その言い回しの言葉、わざとでしょう。」

「出血大サービスだわ」

「・・・は・・・。そろそろ傘を開いてお空へお帰りいただきますか・・・。」

09 おぬし、百姓の出じゃな

<09 おぬし、百姓の出じゃな>

「菊千代、その本を取っていただけます？」

「……、僕ですか？」

「そうです。菊千代」

「……あ……、解りました。これ、日本を代表する名作映画の本ですね。」

ええ、あのハリウッド映画では場所設定が「荒野」になった。

はいはい！、わかりますとも。あなたはあの「いぶし銀」な俳優さんで、

自分は「世界の」な俳優ですね。たしかにはまります。僕も何度見たことか。

ほんとうにスゴイ迫力で、特に後半の雨の中の戦いなんて……、もう自分まで

その中に入ってしまう心境になってしまいます。そうですか、今週はその映画ですか……。

あ、蘭さん着メロもソレでしたので、先週にはすでに……。

おや？春・夏さんはお二人とも見てません？な反応ですね。

それはいいません。そこだけは僕も会長と同意見です。

「しかし、自分で見てもなんか恥ずかしいくらいだよ、この写真」

ここはTMS基地である蘭さんの部屋。

先日の競技会の雄姿であります。皆さんの画像をプリントして持ってまいりました。

大量でした。

ちなみに、あの、名実ともにハズカシイ蘭さんの写真・・・は入れてません。

まちがっても表に出ないように処分・・・厳重に格納いたしました。

「僕も見取れてしまいました。足の動きが伝わるような筋肉だし、しかも伸びた時には

すごく長いです。普段制服の蘭さんでは解らない力強さです」

「ほくほくほ！それが本当のセクシーと言っのだよ！瑞樹君」

「そんなに蘭をほめると、ただけ妬けちゃいますわ」

ちよつと声のトーンが落ちてますが、なにか裏ありませんか？会長。ジツと蘭さんの服を見てますし。

「どうせ・・・蘭ほど有りません」

なんだか聞こえたのですが、意味解らないので聞き流します。

「そういえば蘭さん。この写真でここ・・・なんですけど、足を指さしながらちよつと疑問を聞いてみた。

「あの、この、足のここ・・・」

「あら、内股ね」

「あ、はい・・・」

「それも悩ましい部分だわね」

「・・・ええと・・・」

「リン、なんだろうねえ、何を強調したいのだろうねえ・・・」

「まあ、いやだわ。私何もふくんでなどおりませんわ」

「うそつけ！エロエロじゃねえか！」

「まあ、とんでもありませんですわ」

「いえ！あの、ここにテーピングされていたので・・・。ケガした

のかな・・・と」

少し大きめの絆創膏みたいなのが貼って有ります。
そのことだけを言いたかったのですが・・・、
なんでだろうか？
いろいろと危険な方向に持っていかれるのは・・・。

「ああ、まあそれは・・・」

「それはきつと、大きな虫にでもさされたのですわ」

「・・・あん？何？虫って？」

「ほら、蘭ったら虫にさされたりするのが多いでしょ」

「・・・？」

「まあ、蘭もまんざらじゃないみたいですし。自ら好んでの時も多いみたいですし」

「リンちゃん？・・・なんだろ？この言い回し・・・」

「まあ、私ったら。ごめんなさいね。あまりその・・・、いろいろなことを隠しながら説明するのは慣れてないので」

「ほお、隠す？隠しているの！？」

「あら、恥ずかしいわ」

あ、虫の話になったみたいです、自分にとっては
この脱線状況から早く復帰したいだけで・・・。

鈴会長、なんだか今日の攻撃しつこいです。どうやって戻せば良いのか・・・

「「すいぶんと虫さんも欲情されていたのですね」」

「・・・、何言っているー！！！！春・夏！！！！」

「いえ、このような場所ですと」

「それなりに・・・と思ひまして」

「こ、こ、・・・」

「ほんとに、その通りですわ」

あゝ．．．、静寂な時間です。空気は．．．とても張りつめております。

「．．．へ．．．、そうなんだ！リンちゃん。そうよね、その通りかもねえ」

「ええと、僕の言いたいことは虫の話ではなくて、この絆創膏をですね．．」

「あーっ。そうであゝ。今度プールに行こうかあゝ」
「．．．は？」

蘭さん、なんで今、プールの話が？

「ちよゝうどねえ、友達からさあ、プウールのタダ券もらってあったんだよねえ。リンちゃん。」
「．．．．．」

「．．．なんか、会長、フリーズしてますが．．」

「ほらあ、きつと楽しいと思うよあゝ！いつにしようかな？、あ、今週末が良いかも。」

「そうねえ、なるべく早くいきましよう。だって期限あるだろうしいゝ」

「．．．あ、そうでしたわ。今週末は．．」

「玲子さんがいつでも遊びに連れ出してあげて！と言ってたの思い出した。」

「そう、リンちゃんが居なくても一日二日ぐらいは大丈夫だからって」

「．．．玲子さんって、たしかリンさんのお母さん？」

ちらつとだけしか見たことないのですが、すごく綺麗な大人の女性
って感じです。

さすがに鈴さんと親子。あの二人が居れば周りの目はくぎづけです
ね。

お店の、あ、鈴さんの実家の鈴八のことですが、いつもお客さんで
いっぱいなのは
そのこともあると確信してます。

ところで会長、プールだめなのでしょうか？泳げないとか？
でも会長の水着って・・・見てみたい。

「鼻」

「伸びてる」

春・夏！観察するな〜！！！！

「そうか〜！、瑞樹ちゃんも行きたいよね！そして見たいよね！！
そりゃリンちゃんの水着ったら、

超超セクシー！！大人の色香ぶんぷんだよ〜！！」

「あ、・・・・・・・・見る・・・見る・・・・・・・・見たい」

しまったー！無意識に考えが声に！！！！反撃される！！幻滅される・
・・・

「私の・・・水着」

会長？

「そう、それも大人ucciやつね！ああ、別にスク水でもいいけど、
周りにひかれちゃうよ！」

そついうのはこちらの春・夏さん方、エキスパートにお任せした方が
良いから〜！」

「まかされました」

・・・おい！

「冗談ですよ」

「気になります？」

・・・。カメラもっていこう。

会議終了。

会長、なんか先ほどのアレから悩んでいるようです。チラチラたま
にこちらを見られてますが・・・。

「土曜日はプールに集合ですね」

「10時ですね」

春・夏・姉妹はそう言うと言つと電車に乗り込んだ。

会長は一度こちらを見て手で合図してから同じ電車に。

僕は反対方向なのでホームから見送ります。

走り去つて静かになったホームで、一人考える。

「絆創膏を画像処理で目立たなくしようか聞こうと思ったただけだっ
たんですが・・・」

なぜかプールに行くことになりました。

もちろん僕にとっては願ったりかなったり！ですが、会長の顔がどこか気になって

素直にはしゃげない状況です。

「泳げないとか、水着を見られるのがハズカシイとか・・・なのかな・・・」

聞くのも少し躊躇してしまうし・・・。蘭さんは「さあ？」とか行ってるし。

でもあの攻撃はなにか怪しい・・・」

まあ、その時になつたら解るか・・・と自分に納得。

そうなるも次の妄想が沸き起こってきてしまいます。

「ああ、蘭さんってすごく悩殺ボディーっばいから少し無表情になる練習しておかなければ・・・、

きっと心よまれそうだ。春・夏も有る意味際どいコースだし。ほんとにスク水じゃないだろうな・・・」

そして会長の水着・・・は・・・、マズイなあ・・・。俺、若干「姉ちゃん」好きだし。

ほんと、今日も周りのアレコレにびくびくしている。

天気になれば日照りがコワイ、雨になれば凶作がコワイ・・・。映画の中で言ってた百姓の言葉そのままだ」

遠くに近づく電車のライトが見え始めた。

そこで僕の思案も終わって、明日の宿題、提出物の事に考えを切り替えていた。

10 白鯨とエイハブ

<10 白鯨とエイハブ>

見とれていました。並んだ女神・・・、いえ、そんな高貴な言い回しが

自分の頭に浮かぶわけもなく・・・。まあぶっちゃけ

「しびれまくりな女たちだぜ、もうたまらねえ！」

「声、出てますわ」

あゝ・・・、またです。

「まあ、素直な男子高校生の感想として許しておこう」

ありがたきしあわせです。周りからも感謝の言葉が聞こえているような・・・。

「これを着けてね」

「・・・？これは・・・、皆さんが足に着けているサポーターみたいなものですか？」

「そう。重要なアイテムなの」

「はあ・・・。」

そう、ここに並んだ女性達はみな左足のももに黒いサポーターみたいなものを着けています。

「ほら、蘭が虫の印を隠してた絆創膏。あれでは少し目立ってしま

ってかわいそうなのでね」

「……でも、なんで皆さん同じように着けているのでしょう」

「それは蘭だけでは可愛そうですし、わたしたちグループの目印にもなるからそろえようかと思ったの」

「あゝ、共通の印……みたいなのですね」

「それに、何かあつたらすぐ身元が判るから」

「……何かって……不吉な……」

「やはり救命方法はマウスTOMマウスがよろしくて？」

「気をつけます」

謎です。でも、目立つから……の割に、ぎゃくに目立ってしまった
ています。

しかも……ちょっと目線を上げるとキワドイ部分に……なので自然と見てしまいますが……。

「まあ、嫌らしい目だわ」

顔、赤くして言わないでください！！目はすいぶんと小悪魔です。

会長は白のビキニで……右横がヒモ状に布地無いデザイン。

あ、なんでしたっけ……、ストール？をさつと巻きましたので、
今はもう見えません。

「次のサービスタイムは1時間後だわ」

そうですか・・・。

蘭さんはワンピース・・・でしたっけ、上下一体のなのですが、なぜでしょう？すごく身体の凹凸が強調されて見えます。ああ、ダメです。

直視できません。

「頑張っているねえ」。だいぶ鍛練できてるんじゃない？ほら、ほらあゝ、どうだ!」

ヤメ!!!!やめてくださゝゝ!!!!持ちません。

「「・・・・・・何?」」

やあ、なんだかホツとしました。
純粋な高校生がここに居ます。じつに健康的な少女二人。

「いいのかな?」

「そんなこと思ってた?」

・・・?

両サイドに立たれた。やな予感。

「「ねえ、お兄ちゃん」」

「な・・・・なんで腕に身体を押し付けるのですかゝゝ!」」
「写真の」

「お礼です」

「今日はわたしたちを深く感じてくださいね」

あゝ、今、自分の人生で最高地点なのかもしれません！！
このまま奈落へ落ちるのか？俺？

「そう！ハッキリ言って今日はお礼だな！」

「写真を撮っていただいたお礼よ。」

「二度とないかもね」

え、今日限定・・・、残念・・・だけれど、今日を最高の日にしなければ！

「私はメアリーの格好だったから、今日、沢山撮ってあとでいただきます？」

「・・・はい！もちろんです！！全力で撮らせていただきます！！！」
「恥ずかしいわ。全力での攻めって」

あまりおおっぴらには撮影できませんが、アレコレとメンバーの「健康的な」写真が

撮れたと思います。自分的にはもう少しっこみたいのですが、抑えることが良策。

しかし・・・、思春期の青少年にはキツイ・・・。蘭さんこそ抑えて欲しい。

「……！あ、会長に睨まれている……。脳内スキャンされている？」

「ああ……。平静平静、モハクハキハ。」

「……。蘭」

「？ん？何？！？」

「……。食事にしますわ」

「あ、危険回避出来たのか？ちょっと安心だけれど……。後でお目玉・
・とかもコワイ」

「今回も！会長自らのお弁当！」

「手軽な感じでホットドックとか、シザーサラダとか！」

「とは言え、どこか一手間入っているようです。」

「会長、いつもすごく申し訳ない気持ちで……。！」

「気にしないでね。好きでしていることだから」

「いやー！リンちゃんってスゴイ！いつの間にこんな才色兼備なお嬢様になったの！？」

「まあ、おだてないでください。」

「でも、会長って」

「不思議な謎がいっぱいですね」

「ほんとに、謎だらけです。」

「蘭さんとかはなんとなく解ります。直線型なので。」

「春・夏・姉妹も謎だけど、その方面キャラかな？でわりあい可愛い」

系？

慣れてくると普通に喜怒哀楽が有るようだし。
でも會長って、実際にアダルトな時もあれば、意外な少女的な時もあります。

基本は自分を出さない謎キャラ？

「僕も思います。会ったび會長の深さが魅力的。。。と言いますか・・・」

「あら、もつと言ってよろしくてよ」

「・・・はあ。。。では、なんかお姉さんってな感じです」

「実際に学年上ですから」

「いえ、もつと違った・・・」

「・・・そんなにおばさんくさいかしら」

「・・・、そんな極論言つてません！」

「いいんじゃないの！そう見えるなら見えても！」

「「會長の落ち着きが、すごく安心・・・と思えるのかもしれない」
ん」

「嬉しいような、複雑な心境だわ」

「あゝ、あたしももう少しリンみたいに大人になれば、良い男を入れ食いだろな」

「蘭は充分じゃない。悩殺ボディーで・・・ですわ」

「ありや？今なんか微妙なこと言われた？」

「いっぱい食べてね！」

「リンだつて充分・・・ね」

「あら、もう食べないの？残念ね」

「・・・美しいです」

「嬉しいわ」

なんだか会話の間に妙な空間があります。平静でいようと。

「会長。昔からそのような感じだったのですか？」
春香の質問。

あ、なんか吹いたような？
天井に何かあるのでしょうか？会長。

「蘭さん、どうでしょう？昔の会長って？」
夏美の質問。

あゝ、食べてる食べてる……。口に入りきらないようですが……。
蘭さん。

じいーつと見入る春・夏・姉妹。なんだか逃がさないぞ風です。

「あゝ、それじゃあ、謎を暴露大会しちゃう？」

「ら、蘭！。・・・何を言われますの？謎なんてありませんもの」

「まあねゝ。なにか秘密をカミングアウト大会ゝとか！」

「なによ、秘密って」

「うゝん、そうねゝ。好きな人が居る・・・とか？。いわゆる恋バナ」

「そんなのあなたが一番有利じゃない！」

「なんでよゝ！？」

「年がら年中発情期なんだから」

「うわっ！そりゃひどすぎ！」

「事実でしょ！」

「うっ、もう！こうなったらリンの秘密もばらす！」

「・・・無いわよ！」

「・・・あのさ、リン・・・。さっきからちよつとキャラ変わってるけど？」

「・・・！ まあ、私としたことが。恥ずかしいわ」

会長のなにかが見たような・・・、聞こえたような・・・。

「で、蘭さん」

「会長の秘密」

「その1をお願いします」

容赦の無い春・夏。姉妹です。

「ききた〜い？」

「「ぜひ！」」

「蘭！」

「あれ〜？無いんでしょ〜！？秘密」

「・・・う」

「じつはね〜、リンはね〜」

「・・・」

思いつきり睨んでいます！なんかコワイ・・・。

「私より年上よ」

「・・・？え？」

「「会長、同学年ではないのですか？」」

「それは間違ってる！」

「?」「?」「?」

「ダブったの！」

「え〜!!会長が!!!!」

「そんな!会長がですか!？」

「だってたしか成績優秀とか!？」

「あゝ、成績はすごく優秀よ！」

会長、横向いて黙ってます。怒っている顔ではなさそうですが・・・、少し寂しそう。

「じつはね、リンは2年ほど学校お休みしてたんだ」

「・・・あ、休学？」

「・・・それですか」

「そっ!で、去年1年で、今年2年に進級したのよ〜！」

「・・・では、ほんとうに会長は大人の女性なのですね」

会長、顔が赤い。少し恥ずかしそうにしています。

「お体が悪かったとか？」

「たんなる家庭の事情つての」

「「そうなんですか」」

「もう、蘭ったら・・・。」

そこで、会長、あきらめたみたい。

「ご免なさいね。ほんとうは前から言おうとしてはいたのだけれど・

・・・、なんとなくタイミング逃してしまつて。」

ああ、ほんとにすまなそうに・・・。

「あまりにもみんなと楽しかったから。だって、やっぱり年が離れていると少しひいちゃうでしょ」

「会長！まったく無いです！とは言ひ切れませんが、今の僕は、もうそのような遠慮する気持ちは無いと思います。」

「わたしも同じ気持ちです。前も今も会長は会長のままだと思います。」

「ほんとに嬉しいわ。みんな、これから同じように遊んでいただけます？」

「「もちろんです！」」「」

「ね！リン気にしすぎだったでしょ！」

「ええ、そうね。すこし楽になつて、ほんとうに嬉しいわ」

「ほんと、心から入れなかったのはリンの方だと感じてたから。無理やりだけれど」

走らせてもらっちゃった！」

「わたしを思つて？」

「もちろんよー！」

「ほんとに？」

「・・・、少しカチンとしました」

「・・・」

「「ご免なさい」」

最後は二人で謝りあってます。
ほんとに仲の良い二人。

「でも、蘭さんもスゴイです！まったくのため口だから思いもしませんでした！」

「まあねー！長いつきあいだからねー」

「・・・蘭？」

「！でことで！はい、これからもTMSをよろしく！」
と言って立ち上がる蘭さん。

バツ！

「キャ！」

「サービスタイム午後の部始まりですー！」

会長のストールをはぎ取って高々と！

あああ！白いビキニが目には焼き付きますー！！

あー、もう逃げられない。このドキドキ生活から逃れられない自分。
これからもずっと、この白色を追い続けそうです。

11
醉拳

< 1 1 醉拳 >

「ちよつと聞いてゝ！ママったらひどいのよゝ！。わたしがあゝ、遅くなりそうつて電話したらあゝ、
帰るな！なんてゝ！ゝゝゝ。こんな美味しそうな美女に一晩中夜遊びさせようつてのかしらゝ。
ほんと、なに考えてゝんのかしら！ゝゝゝねえ、ちゃんと聞いてる！？」

「……ええ、聞いてます！しっかりと聞いてますよー！！」

リミッター解除です。外れました。
今の……会長です。信じられますか!?

「帰ったらトタバタうるさくて寝れないだつて！こゝんなに静かな淑女だつてえのに・・ゲフッ！。。きゃゝつ、だめゝ！！」

「聞いてちゃダメよゝゝ！！ゲツプなんてしてないから」

だれっすか！あなたは！？

「はやくく、かえってこいよ！。おれはさつきからフルスロ
ツトルだぜ！！！」

きや～～～！！、一度言ってみたかったの～～～！！」

・ ・ ・ ・ ・ 蘭さん ・ ・ ・ ・ ・ 。 ・ ・ ・ ・ ・ とりあえずアグラやめま

しょう。モロ見えます。

「何、みえちゃめいわくだつつうのかぁー!?おらー!おらおらー!!!」
プール行くから毛の手入れは完璧だーーーー!!!」

有る方々の場合、このスチは願ったりな夢のような状況だと思われ、自分もそう感じなくもないのですが……。ちょっとこの急展開とかについていけません。
女性不信になるかも……。あ、すでに元々そうでしたが……。

はあ……。
始まりは3時間前でした。

「今日のプールは久々なのもあって疲れたー!」
「そうね、いろいろと有ったことも」
「はい!」

「ねえ、ちよつとくつろごうよー!。ダベろうよー!」
「まあ、蘭さんったら。少し人恋しいのね」
「まあねー!カミングアウトみたいでちよつと恥ずかしいかったから。心が支えを欲しがってるの」
「それは私の方だわ。すっかり年ばれちゃったじゃない」
「えー、清纯派なあたしのイメージダウンの方がダメージ大きいよー!」

「わたしは今日からオバサンなのよ」

「……清纯派にオバサンって……。なんか半分ヤケになってませんか？お二人とも……」

「じゃあ、決定！。あんたたちも来るのよ！」

「もちろんです」

「……………」

「返事！」

「はい！」

それでは！調達！………とコンビニへ。

店員さん

「あの……、未成年の飲酒は……、法令で禁止さ……」

女性客

「なにかしら？」

店員さん

「……………ピツ！……………三千三百円になります。……」

女性客

「そう」

会長。あきらかに……不信です。

会長は良いですよ、会長は。見た感じもう……

「何かしら？」

「……美しすぎる大人の女性です。」

「恥ずかしいわ」

「……」

でも、会長の後で落ち尽きなくしていた面々は……
間違いなく未成年であります！そうにしか見えませんでした！！
（キッパリ！）

「「「おつかれ〜！！」」」

「おつかれさまでした……」

んごくんごくんごく……

「ぶつはあゝ！！！！うめ〜！！！」

「美味しいわ」

「「身体にしみわたります〜！」」

「……苦いです」

自分は……自信がなかったのです……ノンアルコール
です。

そのように女の子のオシャベリ会は開幕いたしました。
で、2時間後が冒頭の状態です。

皆さん。はつきり言いまして……弱いです！

「さっつて、本題に入ろうか。・・・今日はとっつても恥ずかしかったですっ！きゃっ！！！」(リン↑たぶん解らないので名前入れます)

「ほんとっ、ちょっつと惚れやすいだけなのに・・・、まるでアチコチ食べまくっているみたいに言われたっ！」(ラン)

「だれによっ・・・。ひどいわねっ」(リン)

「犯人は・・・、おまえだー！！！！ダー！！！！」(ラン)

「イタタタ！跳び蹴りしないでくださいっ！そして僕ではないですよっ！」

「なにお！あたしのパンツを覗いておいて、まだ言い逃れするのか！！」(ラン)

バキッ！

「グゲッ！・・・見せたんじゃないですか！」

「なぜ！なぜ私ではないけないのかしら。ここにこうしてちゃんと履いているのに」(リン)

「か・・・、会長まで！ちょっとストップ！ストップですっ！」

「だれが会長ですか！私には「花柄ブラ・じゅうはち朗」とゆう名前があるのです。もうじき「じゅうく朗」だがな。ハッハッハ」(リン)

「なんですか？それ？花柄ブラって・・・で、ああああ、ランさん！ブラ外さないでくださいっ！！！」

「安心せい！みねうちじゃ」(ラン)

グビッ！(ラン飲む)

「なによ！ランのブラばかり見て！ちょっつと大きいからってい

い気になりおつてえ・・・」(リン)
グビビツ(リン飲む)

ああ、ああああ。なぜ僕はここにいるのだろう!?
今更ですが、タイトルですが、言います!言わせてください!

「ブラなどで、ひとの大きさはかることなど出来ぬわ!ヒヨッコ
ガ!」

「そうじゃ。チチの大きさは解る!されど、鍛練された魔の力こそ、
すべてをあらわにするのじゃ!」

・・・ああ、春・夏・・・、おまえたちも居たのか。静かだった
から帰ったのかと思つてたが・・・。
ダメだ、完全に目がすわっている。いつもの1割ほどだぞ。

・・・なんか・・・怖いぞ・・・。

「そうじゃ!」

「ならば・・・」

「「われらもあらわになろうぞ!」」

「・・・、脱ぐなーーーー!!!!・・・って、水着かよ・・・。
ゲツ!スク水!」

「愚か者め!」

「まだまだだな」

「・・・はい、まだまだ修業がたりません。」

「さうって、本題に入ろうかあ」(ラン)

「あゝ！それ、さつき私が言っただけ！」(リン)

「瑞樹よ！おぬしの恥ずかしい話がまだだったの。」(ラン)

「言っただけ言っただけ！！！」(リン)

「ええい！うるさいわい！何度もイクイク言うでない！」(ラン)

・・・違います。言う言うです・・・。

で、恥ずかしい話って・・・、強制なのですか！？

「あたりまえじゃ！」

「でも・・・、僕は何も有りませんので・・・。先にこちらのお二方から・・・とか」

「馬鹿者！！！こちらにおわすお方をどなたと心得る。泣く子も黙るスク水姫じゃ！」

すでに恥ずかしいではないか！！！」(ラン)

え、その展開有りですか！恥ずかしいかもしれませんが、それって今恥ずかしい格好なんですよね。

「有りだわ。今からモズヲを歌うから、さらに恥ずかしいわ」(リン)

「モズラッちゃ、モズラッ。どうんがん、かさくやあん。いんどんむう。」

るすどんつりッどあ、はんぱ、はんぱむやあん・・・・・・。」「

歌ってるよ。こいつらほんとに魔道士なのか？何歳だ！？

しかし・・・歌詞の意味わかんね！！・・・ほっとう。

「さあ、楽になりなさい」(リン)

「おかあさんを安心させてやるんだ」(ラン)

この状況を聞いたら泣きますよ！ぜったい。

「恋バナだそ！こ、い、ば、な！」(ラン)

「そうよ、濃い話よ」(リン)

あ、ベタなスベリ、感謝です。

「初恋はどんなだったのだ！」(ラン)

「そうよ、むらしたら構造よ」(・・・スルー桶？)

「う・・・、初恋ですか・・・。よく解らないのですが。」

「ほおほお！」

「会長、なんか嬉しそうですね？酔い醒めましたか？」

「さ、続きじゃ！」

「・・・まだ酔ってますね。いいですけど。」

たぶんあのことかと思うのですが・・・

「ほおほお！」

「・・・。小学校5年生だったかと」

「・・・ひいふうみい？五年生？・・・じゃあ私は中二じゃない！」

(リン)

「知りません！そんなこと！」

「同じクラスですごく明るい女の子がいたんです。なんか好きになっちゃって・・・。」

で、ラブレター初めて書いたんです。」

「お～～！初レター！！キタ～～！！」（ラン）

「・・・どうだったの？」（リン）

「それが・・・、結果的にはまあフラれたのだと思います。」

「あ～～、残念」（ラン）

「あら～～、まあ～～！」（リン）

「なんか・・・、嬉しそうですね？」

「気にしないでね！蜜の味とかではなくてよ」（リン）

「そうそう！気にスナナ！思いますってなんだ？」（ラン）

「それが・・・、僕に返事を言うてくる前に・・・、クラス中に手紙見せ回って・・・何言ってるのアンタ状態でしたので。」

それで・・・、それ以来ちよつと女の子が苦手になりました・・・。」

「あ、あ～～・・・。。。ゴメン！」

「は？蘭さんに出してませんか？」

「いや・・・、ちよつと・・・、同じようなことしたことがあるカモで」

「・・・。」

あんた鬼か！

「ゴメン！ほんとにゴメン！！。ガキだったんだよ、傷つくことに思いがかなかった」

「いえ、僕が直接蘭さんからつけたわけが無いので。それに、今の蘭さんは全然違うし」

「それが初恋なのかしら？」

「うーん、良く解らないんです。」

「ちなみに、なんて名前だった？その子」

「たしか、きな子ちゃん」

「よし、スルーだ。端役だ。その他大勢だ」

「次よ。その後は女の子がダメなのよね。では、もっと小さな頃とか」

「なんか、鼻息荒いですが……。次……。そうですね……。幼稚園の時に好きだった子がいたような……。？」

「そんなのよく覚えてるねー！」

「ええ、その子にパンツ下ろされて象の耳書かれましたので……」

「

「……………あ……。そうなの」

「……………あ……。ゴメン！」

「……………？またかい！！！」

「いや、ほら、幼かったから……」

あんだ、ほんとに悪魔だ！

「で、名前は？」

「ええと・・・、貞子」

「・・・いいぞ！端役その2だ」

「次は？・・・無いの？」

「それだけ？？？つまらない！！」

「しかたないでしょう！！モテないんですから！電車好きの男の子と話を通じますか！」

「なるほど」

「おい！その二人！急に加わって納得しない！！」

「あ、そういえば近くに住んでた女の子に、電車を見につれていつでもらってました！」

「なんだ、良い関係の子がいるじゃないか！」

「え、だって初恋・・・てか、あこがれてみたいで。よく解りませんけど。金魚のフンみたいに
ついて回ってました。突然引越しちゃって、母ちゃんもよく解らないっていったし。」

「名前！」

「・・・はあ、ムツねえです」

「・・・ビミョーだな」

「なるほどね。まあだいたいそんな所か！瑞樹の戦歴は！」

「戦歴って・・・、結局ふられっぱなしで」

「で、今もって女が苦手ってか？」

「だいぶこの短期間で苦手は解消されつつありますが、別のなにかが・・・」

「何か？」

「・・・・・・・・ええ・・・と、・・・・・・・・恐怖・・・とか、本性・・・・・・・・とか？」

「・・・・・・・・おゝ？何か・・・？、それはあたしたちの話なのか？」

「・・・・・・・・いえ」

「だよなゝ！こんなに可愛がつているんだからなゝ！」

「・・・・・・・・その可愛がるつてのが・・・」

「なんだろゝ、そのつぶやき。じゃあ、いろいろと女をおしえてあげるかあゝ？」

「柔らかいぞゝ！きもちいいぞゝ！！たべちゃうぞおゝ！！！！」

「・・・・・・・・」

「「お願い！卵を返して！」」

「！！！！、びびったゝゝ！！！！！！、お願いですゝ！！！！突然両耳にささやかないくださいゝゝ！！！！春・夏・さんゝ！」

今日は・・・・・・・・、かえれそうにありません・・・・。
会長？・・・・・・・・なんか寝ちゃっている？
薄目開けて・・・・・・・・

12 狼になりたい

<12 狼になりたい>

「おはようございます」

「……？あれ？」

「仲がよろしいですわ」

「……あ……会長の声ですが、なんか真つ暗……？
なんだ、布？布団？そうか、掛け布団をめくって……」

「……あ……おはようございます。」

「良く眠れたようで、なによりです」

「はあ……、でも首を少し寝違えたようで。あまり動かせない……
の……？」

「……？ここどこだ？……電灯、たんす……、自分の部屋
じゃない……？」

「ええ……」

「ああっ！ウツ！！ツツ、イタタ……！！」

「あら、急に動いたら寝違えひどくなってしまうですよ」

「か……会長！どうしてここに！……え、ではなく、なぜ僕は

「ここで寝て・・・」

・・・ああ。

少しずつですが、昨夜の狂宴思い出してきました。

「そのお顔、ややほうけてますが、皆さんをお起こしただけです？」

「は、はい！・・・ん？動けないけど・・・？？な、な！！！」

右と左に柔らかい物体・・・。春香と夏美・・・。

「え、ええゝ！！僕は・・・、一緒に寝てた？？？」

「それはもう抱きあつて。ほんと、仲がよろしくて」

・・・会長・・・。目が・・・コワイです。

手に朝日が反射するもの持ってますね。包丁持ってますね。
・・・

「あの、ぼく・・・、その記憶があまり・・・、ほんとにずっと深く寝ていたかと」

「まあ、寝ていてあんな・・・をされてたのですか？」

「あんな・・・？？え？」

「それはもう、大きな声をお出しになって・・・」

俺は、いったい何をしていたのか？？？？記憶を無くすととんでもないことを

してしまうのだろうか・・・。

「え・・・あ・・・あの」

「私、眠れませんでした。あのような・・・、その・・・、声が耳から放れなくて」

「・・・僕、とんでもないことを・・・。春香さんや夏美さんに・・・」

「お起きになられたら、すぐに謝ったほうがよろしいわ」

「ほんとに！なんておわびしたら・・・」

「これからは気をつけますでよろしいのでは？」

「・・・これから？」

「ええ、静かにねるようにしますと」

「・・・それって・・・」

「いびきがうるさくて、みなさん寝苦しそうでした」

「・・・気をつけます。でも自分では何も出来ません。もう、帰っていいでしょうか・・・」

「では、お願いいたし・・・」

「ああ、おはようございます。お兄さま」

「良く眠れました？お兄さま」

「起きた。。。え・・・？お兄さま？」

「「はい！」」

「何で？」

「今日の」

「気分です」

「・・・ですか。。。あの・・・手、放していただけますか？」

「「なぜ？」」

「あゝ、そろそろ起きてトイレに行こうかな。と」

「「まあ！」」

「それは気付きませんでした」

「私がお連れいたします」

「いや、いいから。それにその・・・、スク水で腕かかえこまない
てください」

「「なぜ？」」

「いえ・・・、あの、トイレに・・・」

「「まあ！」」

「きつとあれよ！あれだわ夏美」

「そうですわ！朝だからですわ、春香」

「・・・・・・・・」

「あら、まあゝ、そんな・・・、恥ずかしいわ・・・」

「会長、布団に入らないでください」

「「あ、おはようございます、お母様」」

「・・・・・・・・」

「今日の気分です」

・・・会長、手を・・・その包丁を上げないでください。

「・・・おはようございます。お姉さま」

「まあ、お二人ともお起きになられたのですね。おはよう」

「では、そろそろ手を放して・・・」

「なぜ？」

・・・

3人顔を洗って台所です。

「瑞樹ちゃん！おっはよう！！」

「あ、蘭さん、おはようございます！早いですね。」

「おっ！お腹減ったから目が覚めた！」

・・・野人

「何？」

「いえ」

「春！夏！おはよう！」

「蘭さんおはようございます！」

「あれ、この食事は・・・、もしかして鈴会長が？」

「そうだよー！リンの心のもったお味噌汁だぞー！」

「「「おおー！！」「」」

さっそく！「「「いただきますー！！」「」」

「「「「ごちそうさまでしたー！！！」」」

「ふいー、美味しかったですー！」

「私もですー！」

「僕も！朝からタップリいただきましたー！」

「おそまつさま」

ほんと、なんて完璧な会長なのでしょう。

容姿端麗、学業優秀、良妻賢母・・・はまだですが、間違いなくマ
ル決です！

ちょっと性格が・・・アレですが・・・。

・・・あゝ、まだ包丁持ってたのですか。テーブルに隠れててきづきませんでした。

はい！まったくもって容姿端麗・学業優秀・歩く姿は百合の花であります！！

マル決です！！！！

「今日は日曜日ですね。どういたします？」

「そうだな・・・、あたしは競技会も終わったし、昨日はタツプリ遊んだし。

ちよつと勉強しとくかな。」

「ああ、そういえばもうすぐテストですね。僕も不安なので帰って勉強します」

「「私も！」」

「では、ここで一緒にすることにしましょう。いろいろと教えてあげられますわ」

「え、良いのですか！？」

「そうかゝ！そりゃいいかもなゝ！あたしもリンの真似したほうが点取れるし！」

「「嬉しいです！」」

「はい！決まり！」

「では、さっそく！・・・の前に。春・夏さん、着替えてください」

「えゝ、楽なのに・・・」

「家の中だからいいでしょ」

「僕が良くないです。・・・気がちります」

「では、蘭さは・・・」

「よろしいのでしょうか？」

「・・・？なんででしょう？」

「「ノーブラ、ノーパンです」」

「・・・・・・・・着けてください。お願いいたします。」

「・・・・・・・・気付きました・・・・・・・・。
トイレいつでもいいですか・・・・・・・・。」

13 太陽がいつぱい

<13 太陽がいつぱい>

「ん〜！、はい！お待たせ〜！」

「あ、ありがとうございます」

「な〜にかしこまっているの〜！、おかわりも有るからね〜」

「あの、会長・・・」

「なにかしら？」

「・・・蘭さん、なにか変なのですが」

「あら、おきづきになってしまったのね」

「・・・僕はどれだけニブい設定になってるんでしょう・・・」

「1キロ太ったわ」

「・・・知りません。」

「いただきますよう」

あ〜、お好み焼きですね。蘭さんが作ってるんですね。

今日の集会は、なぜか上機嫌でのフルサポート。

とっても怖いのは気のせいでしょうか・・・。

「。ね、とっても□。×なことが有ったみたいですよ」

「会長、食べるかしやべるかどうかでお願いいたします。なにか大事なものを

失っているような気がいたしますので」

「これもあなたのおかげですわ」

「え、僕が何か？」

「ええ。正確にはあなたの写真」

「・・・？、あの競技場とかコスプレとか、プールとか？のでしょうか」

「正解だわ。あら、こちらにはエビがはいってないのね」

「・・・僕のをどうぞ」

「まあ、いただくわ」

食べながら話す会長を待つてますと、複合された言葉の選別がたいへんそうですので、

ざっと取りまとめました。

以前撮影した蘭さんの写真は、プリントを渡しつつ、お気に入りを持ち帰へとばしておきました。

それをサッカー部のイケメン君に「使ってね」と渡したら、みごと釣り上げてしまったとか・・・。

なので本日は超ご機嫌さんなのです。

いったい何に使ってねなのだから・・・。そもそも、どの写真を渡したのやら・・・。

イケメン君は、かなり深く針を飲み込んだようで、もう逃げる事が出来ない魚状態。

蘭さんにとってはまな板の上の鯉？

なんだか・・・、恐ろしい魔女？

「ほんとに・・・、蘭ったら恋多き女よね。どれだけモテれば気が済むのでしょうか」

・・・会長。泣いてる男の数では負けてないとの噂有りますが・

・・。

「あら、私は一途よ」

・・・・何に？

証人Aの証言

「なんでも、会長の下駄箱にはポストが併設されているとか。毎日届けられるラブレターで靴が取り出せなくならないためだそうです。あ、私は謎の一年生です。春香とか、下賤な名前ではありません」

証人Bの証言

「そのラブレターは、会長自ら採点した後、執筆者に返されるとか。半期に一度、順位発表され、赤点の場合は名前を公表されるとか。いえ、私は夏美なんて下等な名前ではありません。闇の魔道士・・としか答えられないのです」

一途ですか。そうですね。ラブレター書く方も命がけです。一度試しに僕も出してみようかな？なんて少しでも思ったこと後悔してます。きかなかったことにしてください。もう二度とそのようなこと考えません。

「残念だわ。特別に耳元で朗読の後、じっくりと採点してあげたのに」

口のハシが少し上がってます。あ、舌なめずり……。

数日後、会長がなにかのリストを僕に。

「あのね、どうしてもって言われて。お願いできます?」

「は?」

リストは何人か女子生徒の名前が。

学年もクラスもさまざまのようです。

「この娘たちの写真を撮ってあげてくれません」

「なんですか?それ。」

「ほら、蘭の恋路のお話。あれ結構有名になっちゃったのね。で、恋する乙女がワラをもつかむ思いで自分も撮影してほしいって。」

「……?は?。それって僕ですか?」

「もちろんよ。あなた以外に不思議な力をだせるカメラマン居ませんわよ」

「………会長、……嬉しそうですが」

「私は天空から蜘蛛の糸をたらしているの。無償の奉仕ね」

「………会長は無償でしょうが、こちらは肉体労働ですよね。」

そして、蜘蛛の糸つて……、その娘たちは血の池や針の山をさまよっているのか？
会うの怖い……。

数日後。

「はい、では好きな服を着てください。見せたい姿とか」

少女A「私は私よ関係ないわよ！特別じゃないわよ。どこにだって居るから！」

えゝ、意味わかりません。でも、その着ぐるみは違うかも……

少女B「では、さつそく……」

「……！ちよ、ちよつと……」

なんですかー！！ほとんど透け透けじゃないですかー！

少女C「あなたのことなんて、全然気にしてないんだから！たまたまこんなシャツがあっただけなんだから！」

……ええ、そうですね。たまたま露店見たら、本命の人をプリントしたシャツがあっただけですね。

でも、その人つて、普通の高校生ですよ。芸能人とかじゃないんですよ。

少年D「ああ、早く、早く彼に写真を送りたいわ」

……どんなの撮ってもスパムメールでしょ。しなつてするな！口を半開きにするな……！！

先生E「次で決めるの。いい！もう後が無いの！このチャンス逃し

たらアラフォー決定なの！完璧なの夜露死苦！」

「……ゴッドファーザーのラッパが遠くで鳴ったような……。ああ、なんかダメだったら僕も成績「フォォー」されそう……。」

「一条君、お疲れさま。」

「あ、会長！一緒につきあっていただきましてありがとうございます。お疲れさまです。」

「あら、私からお願いしたのですもの。当然ですわ」

会長と一緒に駅への帰り道です。

「ねえ、もしかまだ元気があったら、私の写真も撮っていただけないかしら」

「？ええ、いいですよ。むしろお願いできましたら……な気持ちがあります」

「……、いろいろな悪夢を、最上級な被写体で消し去りたいので！」

「嬉しいわ。この垣根にカメラ置いたら三脚がわりになるかしら？」

「あ、そうですね。もう日も暮れかかっているし、その方がブレないで良さそうです」

「後も見晴らしが良さそうで嬉しいわ」

会長の提案どおり、垣根を借りて制服姿の会長の全身を。

そういえば今まで撮った会長は、どれもすごく奇麗だったけど、女子高生らしい

姿は未だだったかも。やっぱり絵になるな〜！

「いきますよ〜！」

何枚か撮り終えた時。

「いち・瑞樹くんも一緒にどう？」

「え・・・！いいんですか！？」

「もちろんですわ！こちらに来て」

うふふ〜！！会長と二人だけで記念撮影！！

これはすごいプレミアムプレゼントだ〜！！！！お宝だ！！！！

カシャ！

「もう一度。もう少し寄っていた方が自然だと思いますわ」

「あ、なんか緊張しちゃって・・・。」

カシャ！

「もう少し力をぬかれたら？」

「あ・・・、はい！」

「もう一度ね」

カシャ！

「瑞樹くん、なんだか赤いけれど恥ずかしいのかしら」

「え、．．．なんか、ちょっと嬉しくて。」

「あら、可愛い。では最後にもう一度ね」

．．．．．なんか、可愛いって言われて、ちょっとスネてしまった．．ら

．．c h u !

．．．カシャ！

「！！．．．」

「ほんのお礼ね！これはみんなにはナイショにね。」

．．．．．マジッすか！今、ほほに当たりました！？柔らかいにかが！！！！

「さあ、いそいで帰りましょう。早く画像を送らないとギリギリなお方もいらっしやいましたし」

「．．．．．は．．．．．あ！」

．．．．．先生だ。

それから帰っているいろいろと手配して（特に先生へは超特急で画像送りました！）。

数日後にプリントを皆さんに届けました。
そして会長にも。

「．．．．．ほんとうに、ありがとう．．．．．私ね、普通の女子高生

姿の写真を持ってなかったの。
でも、自分でこうして見れて。今すごく嬉しいわ」

「会長。僕も……、奇麗な会長との写真いただけましたし。それに……あの……」

「フフ、ナイショよ」

あの最後の写真。少し下に見た夕焼けの街を背景に立つ二人。男の子はちよつとスネ顔だけれど目が驚いて。女の子は、まさにその男の子の頬に口を寄せたカット。

なんて、僕は幸せなのだろう。

会長からの贈り物をしっかりと記録、記憶。

夕焼け……、夕陽……の、太陽がいつぱいに。

そして、ああ、最高の幸せも胸いつぱいに……。

さて、これはなぜか別の視線から。

「君、あそこで座っている男子生徒を呼んできてくれるか」

「あ、はい」

「そうだな、体育館裏の焼却炉前で待っていると」

「は……はい」

一人の生徒が指示されたことを男子生徒に伝えた。
なにかすごく幸せそうな顔で立ち上がった男子生徒は、
自然な感じで体育館方向へ。

指示した人物は、その後ろをゆつくりとした足取りで歩いていった。手にはバツ印を入れられたあげく、固くまかれた月刊ぜえくすい！。

誰もいなくなった廊下には、

カード会社から律義に送られてくる誕生日お祝いカードが一枚むなしく落ちていた。

14 青い三角定規

< 14 青い三角定規 >

最近、「先生E」はよくTMS基地、蘭さんの部屋に顔をだす。

「もう、お局扱いするなっちゅの！、ひどいでしょ！」

「別に、そのような感じには見えませんけれど・・・」

「態度よ態度！私が意見言つと、だれも反対しないですぐに通そうとするし」。

もう、触らぬなんとかが見え見えなのよ！！。まあしょうがないけどね。アラフォー女確定だからね。」

「そんな、先生全然若々しいから40代なんて見えませんよ！」

「・・・・・・35よ」

「・・・・・・え？」

・・・・汗、汗汗汗

アラフォーって40代のことではないのですか???

そうですね・・・・、40歳前後・・・、主に35～44までですか。
ああ、地雷ふんでしまった・・・。

なぜに先生がこの蘭さんの部屋にいるのかといいますと・・・、先日、体育館裏に呼び出されて・・・、ええ、怖かったです。はつきり言いましてボコボコにされるかと思いましたです。なんか・・・、言葉の端はしにヤン語が見え隠れしてましたので・・・。

結局、だれにも言えない悔しい思いを・・・、まあ失敗談を2時間ほど

聞かされ続けただけでしたが・・・。

その間、壁やら地面やらに投げつけられていた「月刊ぜえくすい」はボロボロ。

最後には横に引き裂かれてました。

きつと部屋には、電話帳を引き裂いてもらった白いギターが有るに違いない・・・。

で、まだ話たりなかったようで、様子を見に来た会長がこちらに場所かえてと提案。

なぜかその後もちよいちよい遊びにくるようになりました。自分をさらけだせる環境が気に入ったようで・・・。

「あゝ、あづいゝゝゝ、アイス食べたいゝゝゝ！」

「あの、先生・・・、二宮先生・・・、大の字にならないください、スカートがまくれてますので・・・」

「えゝい！アラフォーはもう汚物か！！」

「だれもそんなこと言ってませんです！！、見えちゃっているのがマズイかと」

「マズイ？不味い？美味しそうじゃない??・・・だれが賞味期限

切れだー！！！」

「。。。。先生、蘭さんと気があいそうですね」

「二宮先生、フルーツあんみつですよ」

「おおー！八神さんきゅー！！！！おいしそー！！」

ああ、おやつで起きましたね。子供ですか。

「「二宮先生」」

「んんー！なあにー！伍井っちーズ！」

「あとで少し、」

「教えていただきたいことが」

「えー、勉強はイヤよー」

あんだ、教師・・・

「「いえ、大人のたしなみなど」」

「ふうーん、まあ、いろいろと知りたいお年ごろだしね。」

でも、こっちの二人に聞いたら良いんじゃない？。いろいろと知っ
ていそうだし。」

先生、もちろん、鈴さん蘭さんをさしています。

ふたりはじつに涼しい顔してあんみつを食べております。

「「ごくごく正常なたしなみをなので」」

あゝ、そうですねゝ、あの二人は少々、正常とはちがうかもですねゝ。

あゝ、目が・・・、下向いて食べているお二方の目が春・夏・を見ている気がしますゝ。

それともなんか漂う殺気みたいなものでしょうか・・・。

にしても、先生が正常・・・かどうかは少々疑問に・・・。

「いえ、一般生活の方ではなく、床上手の」

・・・そうですか。床上手って、・・・大戦前ですか、あんたらは？

「あらゝ、勤勉ねえゝ」

・・・教えるなよゝ！アラフォー教師ゝ。

と、言いつつ、しばらく真面目に勉強させていただきました！

さすがベテラン教師の指導による課外授業。

重要ポイントを的確に指摘されますので皆の進み方もすさまじいです。

「はいっ！だいぶ集中したわねゝ。今日はこれまでにしておきましよう」

「先生、お疲れさまでした。こちらにささやかながらお礼も兼ねま

したご用意を」

「おお、こりゃ〜！気が利いてるねえ〜！八神、おまえはほんとに良くできた妻だ〜！」

プシッ！

「・・・お礼の気持ちは僕もおおいに有りますが・・・、な〜んか怖いのですが・・・。」

「ん〜〜！！上手い〜！！」

「私たちはジューズとケーキで骨休め〜！」

「あ〜、今日帰ったら、さっきの所をざっと復習すると、すごく効果的だからね〜！」

「「は〜い！！！」」

「んじゃ！第二部の課外授業に入るか〜！？」

「・・・、さっそく目がすわっています。」

「あ〜、では、僕はシャワー浴びたいとかなので、そろそろ・・・」

「おっ？まさかこのアタシのアドバイスが聞けないってのか？」

「あ、いえ・・・、あまり男の入る話ではなさそうで・・・」

「どこに男が居る？」

「・・・あんだ、・・・今、生徒に深い傷をおわせた自覚有り？」

「風呂なら後で一緒に入ってあげるから〜」

おい！・・・教育者！

「で、相談とか言ってたわね。おふたりさん！」

蘭さん、さっそく楽しそうに……

「あゝ、三木さんには聞いても無駄だからね」

「……？なんで？私のアドバイスじゃ役にたたないっての？」

「あつたりまえでしょー！ミキミキは論外。苦勞せずに欲しいモノ手にいれるから。」

蘭さんの上から下までジロツとスキャン。

ああ、先生本気ですね。ねたんでますね……。

……会長、なぜ横でうなづいてるのでしょうか。貴女も同罪かと思
いますか……。

「少し大きいからって……」

……それ、末代までのネタミでしょうか。

「「じつは、私たち……」」

「おとこの人が苦手なのです」

「正確には苦手だったになりつつありますが……」

「へー？なんかイヤなことでもあったの？」

「勿体ないよねー。こんなに可愛いのにねえー！」

先生と蘭さん。

蘭さんは知ってた感じですね。そういえば最初に入会者で連れてきたのも蘭さんでしたし。

「今は少し平気になられた・・・と？」

「はい」

「この会に入りまして、少しの間ですが皆さんと・・・、瑞樹さんなどと普通にはなせるまでには」

「え？僕と普通に？・・・でもあまり最初の頃と変化したようには感じてませんが」

「最初の頃は・・・、その・・・、緊張してました」

「話したりする時は、素直に自分を出してなくて」

「キャラを作って・・・、架空の物語で役を演じているような」

「心から気を許せて話せてませんでした」

「「不自然な言動や行動、許してください」」

「・・・、えゝ、あまり差が解りませんが、本人たちが言っているので

きつとそうなんでしょうね・・・。今も大いに不自然ですが・・・。

「ふうん・・・。そう告白するってことは、今現在心から許された仲間・・・になったなのね？」

「「はい！ほんとうに楽しいです！」」

んゝ！皆嬉しそう！もちろん僕も嬉しいです。

気の抜けない……ですが、ほんとうに気を許して楽しめる仲間です！

そして異性です。……。

そう……。僕も同じなんですネ。

この皆さんのおかげで、話すことも見ることも怖くて出来なかった女の人。

それが今では……。冗談も言いあえるし、隠すこともないですし。

あとは……。一つだけ出来ないこと……。この人たちを深く好きになる……。そのことだけが怖いです。それだけは……。自分をまもるために……。

「それで、先生にお聞きしたいことが」

「ああ、最初に言ってたことね。何？」

「もし……。好きな人が出来たら、どうすればよいのでしょうか？」

「

……。

皆さん、止まっています。

……。あー、やっぱり、僕はその、女の子の真剣な恋のお話にはお呼びでないかと……

どうしよう……。気にはなるけど……。抜け出たい……。

「それは、だれかに恋している……。と？」

「それが・・・」

「よく解らないのです。」

「いままでこのような気持ちになったことが無くて」

「いつも見ていたい・・・とか、話をしたいとか・・・」

「ただ考えてしまうのです。想像してしまうのです」

「それは・・・、ふたりとも同じ?」

「はい!。同じです」

あゝ、そこまで思われる男って、うらやましい・・・。

同じ教室なのかな?でも二人クラス違うし・・・、先輩とか?

・・・やはりこの二人って、思考がリンクしているんだな・・・。
それにしても、会長が喜びそう・・・なんて思ってしまった。なんて不謹慎な・・・。

会長・・・?蘭さんと目を合わせて黙っちゃってるけど。

「まあ・・・この場合、私からやるべき行動を断言はできないわね。
うゝん、ちょっと冷たい言い方だけれど、あこがれってのと同時に進
行みたいなの
感じがするわね。」

恋じゃない・・・とは言わないわ。だけど、少しずつ恐怖症が無くな
ってきた

反動・・・も入っているのよ。たぶん。」

そこで蘭を見る先生。

「先生やリンの言う通り、あたしにはその気持ちを解析できないと思う。」

意識する前に行動してたから・・・前までは。

でも・・・考えてしまうつて所、今は・・・少しだけ解るかも・・・かな？」

そう言った蘭さん、少し下に向けた顔でリンさんに目を向ける。

じつと聞き入っていた会長。しばらく難しい顔をしてましたが・・・

「ふゝ。これだけは仕方がないことですわね。止めるわけにもいきませんから」

「はゝ・・・」

女性陣、みなさん大きくため息です。

スミマセン、やはり僕にはまったく読めてません！
女の子の恋バナって・・・奥が深いんですね・・・。

「あゝ、私ももう少し若ければ参戦したろくに・・・」

「先生、どうぞ勘弁おねがいします」「女性陣一同。

・・・奥が深いんですね・・・。

15 羊たちの沈黙

<15 羊たちの沈黙>

「まあ、皆さん、いろいろとお疲れさま」

「玲子ママさん、こんちです」！

「ママさん、こんにちは」

「玲子さん、こんにちは」

「ゆっくりしていつてね」

期末テスト最終日。無事終了して解放された日の午後、鈴八です。

玲子さん、は、鈴会長のお母さん。そして鈴八洋菓子店のマスターです。

TMSは、ちよくちよくこのお店でも会議をいたします。ぶっちゃけ、お茶しに来るのですが。

会長の名前は「八神 鈴」。

このお店の名前はたぶん会長からきているのかな？となっとくします。

洋菓子店ですがカフェでもあり、普段は玲子さんとアルバイトの女性一人で切り盛りしています。

学校が終わる夕方は満席になることも多く、よく会長も手伝いをしているみたい。

また、いろいろあるスイーツは鈴会長考案のものも多いらしく、仕込みなども

自ら行っているとか・・・。いったいいつ勉強や僕たちと遊ぶ時間を作るのやら・・・。

この美人親子はとんでもスーパーウーマンです。

あ、玲子さんですが、なぜか僕のことを最初から「瑞樹ちゃん」ととても親しげに呼んでいたみたいです。

そして、僕も「玲子さん」と呼ぶように強要されております。

「男の子におばさんとか、お母さんなんて言われると一気に老け込むからイヤ」

だそうで・・・。

「リンは、将来のこと考えてる？」

「まだきちん決めては無いんです。でも、たぶん・・・」

・・・たぶん・・・の後は、このお店で働きたいのかなと想像です。

会長は成績も優秀で、昨年は学年５番だったそうです。

優秀で美人、今では次期生徒会長の噂も出ていますとか。

（これは、僕らが会長と呼んでますので、現生徒会長と勘違いしている生徒もいるらしいです。）

僕が見ても、すごく頑張っていると思います。

もしかしたら自分の力を試してみたい・・・とかも気持ちに有るのでしょうか。

外の世界で・・・、この駅前だけでなく、もっと広い世界で・・・。
まだ高校2年生ですから決め込むまでもう少しは時間ありそうです。
(年齢は19歳・・・はありますが)

店が混んできましたので会長はさっそく手つだいに。
こちらも席を空けるため会長の自室へ移動です。

・・・初めてです。緊張です。

「ここが」

「会長のお部屋」

「そう！まあ気兼ねなく入ってね〜！」

案内した蘭さんは、まったく自宅みたいなノリです。

まあ、いつもは逆に蘭さんの部屋を占領されてますので、持ちつ持たれつでしょうか。

「でね〜、ここが下着ね、で、ここがベットね。これパジャマ。どこから見たい？」

・・・仕返しですね。明らかに。

「すごい有るよ〜！私もビックリよ〜！」

「え・・・スゴイの・・・とは？」

ああ、久々妄想が・・・

「スゴイのとは何かしら？ 私にも見せていただけます。」

「・・・あ・・・、すごい・・・成績表？」

会長、お茶とケーキを持って蘭さんの後に・・・なぜフォークを握っていらっしゃるのでしょうか・・・。

「では皆さん、ごゆっくりおくつろぎくださいね。少し席をはずしますが・・・あまり騒いではいけませんよ」

あゝ、蘭さんを見て言ってますね。同感ですね。怖いのですのね。

会長の部屋は、生活に最低限必要なものだけ・・・に見えます。

よくある可愛い小物や飾り物もなく、衣類のクローゼットと勉強机以外、参考書や本が目立ちます。

女性に必要な姿見も全身確認出来る鏡が一枚だけ。

少し拍子抜けかも？

でも、食玩のおまけだと思われる電車の模型が？
僕も持ってますが、ここに有るには異質ではないかと。
会を作るときに読んだ本かなにかの影響かも？

それにしましても、一切無駄の無い片づき方です。

「会長は、数年前にここへ引越してきたのですよね」

「んゝ、そうだね」

「前はどこに住んでらしたのでしょうか？」

「・・・あゝ、・・・ちゃんと聞いたことないかも。玲子さんが離婚した後だと思うけど。」

そう、母一人娘一人なのです。

「アルバムとかお決まりのアイテム無さそうですね。」

「少し会長の謎が解りそうだったのですが」

春・夏・！残念そうに家捜しするな！

「そう言えば蘭さん、あのサッカー部の彼とのデートとか、予定大丈夫なのですか？」

「んゝ・・・。別れたゝ！」

「え、ええゝ？、まだひと月ほどですよね・・・」

「そうなんだけど、なあゝんかイマイチ燃えなくて。最近面倒くさくなってしまうのが多くて。もう年かなゝ!?」

「・・・17でもう燃えない・・・って・・・」

「こっちは未だにその取っ掛かりすら経験できてないのですが。」

「こっちでバカやってる方が楽しいしね。身体がうずいたら瑞樹ちゃんに消火してもらおうかなゝ」

「こっちは丸焼けになりそうです！」

「なるほど」

「これが会長のスゴイのですか」

「確かに・・・激しいですわ」

「・・・?おい!春夏ゝ!!なに広げているんだゝ!!!」

「そゝ、ソレ!どうして使うかはゝ、ご想像にお任せね」

「・・・この人たちは聞いてなかったのか?命は大切にしたほうが・・・」

「この使い方も、ぜひ教えていただきたいわ」

「おそらく二宮先生が詳しいでしょう」

元に戻しつつ蘭さん

「そうそう、もうじき夏休みだねー！みんなの予定は？」

「私たちは」

「少しアルバイトが有りますが」

「それ以外は特には」

「アルバイトですか。接客とかですか？」

「まあ、そう言えなくもないです」

「期間限定ですが」

「なんか、良いかもですね！人と接することが多い環境でしたら、トラウマ克服も近そうですね。」

「春・夏・は一時期バイト有り〜っと。瑞樹ちゃんは〜？」

「僕は少し撮影旅行を。夏季限定の切符が出ますので少し遠くまで」

「みなさん、充実しそうですね〜、いいですね〜。あたしとは違うですね〜」

「蘭さんは何も予定ナシですか？」

「去年はいろいろと忙しい夏だったんだけど、今年はなんもナシ〜。あゝあ、寂しい女子高校生だわ〜」

「……サッカー部の人と別れなければ良かったのに……」

「えっいつ！過去は捨て去るの！！　だっかっらっ、アタシもみんなと一緒にいろいろすることにしましたっ！！」

「・・・？は？、一緒って・・・アルバイトとか撮影旅行とか？」

「はい！それっ！」

「それっって、そんな勝手なこと出来ないのでは？」

旅行はさておき、春・夏・のはお仕事ですから採用されなければ・・・

「

「大丈夫ですよ」

「むしろ蘭先輩が来てくだされば喜ばれるかと」

「お盆の頃ですので準備も間に合います」

「それに、会長や瑞樹さんも参加されてはいかがでしょう？」

「さっそく後ほど確認してご連絡いたします」

「決定っ！今年はいちだんと楽しめそうっ！！夏樹ちゃんの旅行はいつ？」

「いつって・・・、七月後半の一週間ほどですが・・・、あの・・・、女性はちよつと無理かと。」

「なんで、だれか一緒とか？女の子？」

「いえ、一人ですが・・・、決まった宿に泊まらない予定です」

「なにそれ？キャンプ？」

「駅寝です。切符も普通列車しか乗れないので目的地まで時間かかります」

「なんかスゴいねー！たしかにちよつとハードそうだけど、でも面白そう。」

・・・しばらくブツブツ考えている蘭さん。

「じゃあ！瑞樹ちゃんの旅の途中でどこか1日合流とかしない！」

「ああ、それでしたら大丈夫かと思います。僕もなんか嬉しいですし」

「場所とか良く解らないから計画お任せね！よい所見つけたら日時連絡よろ！」

「解りました。希望とかありますか？」

「夏！と言えばやっぱり海ー！！。ポロリもあるかもー！？」

・・・おちついて旅を楽しめないかも・・・

「あら楽しそうねえ、夏休みの計画かしら？」

ああ、会長。お手伝い一段落ですか。

「リン〜！楽しいイベント盛りだくさんだからね！期待してね〜！」

会長、嬉しそう！

「ところで、蘭が出したのかしら？」

クローゼットを指さしてます。・・・まさか・・・

「え〜・・・、なんのことかしらあ・・・？」

「タタみ方で解るの」

「・・・・・・・・・・」

「あとでゆっくりお話ししようね。・・・一条くん、何か見ました？」

「いえ、いえ、まったく見ておりません！！！！紫色の布とかも知りません！！！！」

「まあ、良かったわ。後で・・・ゆっくりお話ししようね」

<<出したのは春・夏・だろ！>>

蘭さんと僕の心の声。

いやいや、蘭さんは共犯でしょ〜。

その春夏姉妹は見つけた漫画に顔をうずめている。完全に逃げですよね。

ああ、ピヨン吉ですか。ひろしですか。京子ちゃんは好きなタイプです。

面白いですが、40年前の少年漫画がなぜ今ここに有るのでしょうか？いや、それよりもピクリとも動かないのオカシイデショ！アヤシイでしょ！！

「お二人も一緒にお話しましょう」

「……はい」

16 北北西に進路をとれ

<16 北北西に進路をとれ>

「日帰り〜!?なんでそんなツマライ。せめて一泊はするでしょ〜!普通」

それほど遠くない海水浴場を考えていたのですが、即却下のあげく温泉付きも条件にくわわり・・・。

「じゃあ宿はこっちで決めるから安心して旅立ってね〜!」

結局連絡が来たのは旅行5日目。切符の残りも2日分だけしかなくなった時でした。

しかも・・・

「今居る場所からものすごく遠い駅です。一度帰ってもたいして変わらないかも。」

蘭さん・・・、地図・・・見れるようになってください。

「普通列車ばかりだから、マジ今から向かってギリギリだ・・・。」

夏休みに合わせて、JRが発売する「青春18切符」

これは特急とか急行などには乗れないのですが、一日乗り放題の切

符が7枚ついてる回数券みたいなものです。

そのため通常より格安で、僕みたいな貧乏学生の撮影旅行にはうってつけです。

宿に泊まることもせずに、夜は駅の待合室などで始発まで寝て移動するのですが、

泊まらないとはいえ、温泉のある駅で下りてお風呂めぐりしてますので、

予想外にツヤツヤした健康体だったりです。

移動だけでヘトヘトになりつつ、ようやくと集合時間に間に合いました。

「おー！こつちだぞー！！」

「すみません、お待たせしました。あれ？蘭さんお一人ですか？」

「ああ、他のみんなはお土産見に行ってるよ」

「お土産って……、まだ来たばかりでしょう」

「じゃあさっそく海行こうー！」

「待たなくてよいのですか？」

「ああ、言ってるから大丈夫だいじょうぶ！」

ここは東北のとある県。目の前には日本海が広がってます。さすがに遠くまできたため、広々とした砂浜も人が多くなく気持ち良さそうです。

「パラソル借りてくるから、こちら辺で待ってて」と言っ
て蘭さんは数軒有る海の家へ歩いて行きました。

は、昨夜はちゃんと寝れなかったから少しボ、っとしてます。
心地よい風で、、、眠気が、、、

「待っていたわ」

「、、、!!!!、びっ、、、びっくりした、、、、!!!!」
春・夏・姉妹、、、、です。

あああ、起きました。ハッキリと起きました。

二人はすでに水着です。前にもプールで見ましたが、今回の
はまた違う、、、少し

露出が多くなってます。なんでしょう、、、娘の成長にとまどう父
、、、で、

こんな複雑な気持ちなのでしょうか。

ああ、スク水も見だし、この数ヶ月でずいぶん大きく育って、、、
、、

「なにか、変な方向にはしっているみたいですね」
「そうね、一度ケリ入れたら戻るかもしれません」

いえ、その、お気持ちだけで結構です。

ああ、会長もいらしたですか！

「も？・・・。私は付録なのですね。お二人のように若くはないですもの・・・、しかたがないことですね」

「・・・会長、すごく大人の魅力が！前に見たときより、いちだんとエ・・・セクシーなお姿です。」

「あら、恥ずかしいわ」

「私たちも感想を聞きたいわ」

「おゝ、大人の魅力あるか？」

・・・？

「玲子さん！先生！！？」

これは・・・、予想外なキャスティングです！

「子供たちだけでだと心配なので来ちゃいました！」

「そうだ、暇だからではないぞ！」

「そういうことで、大所帯になっちゃいました！」

子供の引率・・・は、遊ぶ気満々の子供・ですね。

しかし、目立つ目立つ・・・

アラフォー宣言している二宮先生ですが、見た感じ25ぐらい。実のところスタイルも抜群。

なぜ戦歴が敗退ばかりなのだか・・・は、おそらく・・・
「性格」

玲子さんもしかりで、女子高生のお母さん・・・にはとても見えません。

で、いつもの彼女たち・・・の6人と・・・地味な男。

何かここだけ浮いてます。その中の僕はもっとも場違いに浮いてます。

「何かしこまってるの？瑞樹ちゃんも早く服脱いで泳ぐよー！」

「私たちが脱がせてさしあげましょうか？」

「まあ、モテモテねえ」

「まゝっただくだ！一生分のラッキーをここで使ってしまうかもな。成績落とすなよー！」

「ほんとに、今日は私が撫でてあげること出来ないわ」

座っている僕の回りを取り囲む女性陣。

ますます顔を上げられない。攻められているわけでもないのに、滝のような汗です。

ほんとに、今日だけで幸運使い切りそうです。

この海水浴、温泉旅行での出来事は、しばし後ほどお話します。
ええ、疲れましたので話せる精神状態になりましたら。

17 8月のラブソディー

<17 8月のラブソディー>

暑い……

「これが蘭さんのです」

「なんかスゴイの用意したね。これ腕とかゴテゴテ付いてるのにボディー部分の布少なくてね？」

「大きく動きますと角が刺さりますので要注意です」

眠い……

「このレオタード着てから上着を付けていきます。」

「あら、すいぶんと切れ込みが深いですわ。ここの部分はレオタードが見えてますわね」

「思った通り、会長は背も有ってスタイルが引き立ちます」

エロい……

「私、なんだか化粧濃くない？これじゃ顔解らないわ」

「先生はそのほうが良いかと思ひまして、ダークサイドキャラにしました。」

「あ……、まあバイトがバレると不味いかもだしな」

……

「瑞樹さん、はじまってしまうとカメラの人たちに囲まれてしまいます。」

「今のうちに1カットお願いできましたら・・・」

「あ、了解です。では皆さん、ブースの前で並んでください。いきますよ」

カシャッ

これは春・夏・姉妹の言っていたアルバイト。

そして、ここは真夏のお台場なのです。そう、夏コミ。

まさにお台場最大のイベントで、3日間での入場者はいったいぜんたいどれくらいになるのか・・・

僕には皆目見当つきません。

とある喫茶店が、店の宣伝かねて出店してます。オリジナルグッズの販売などもあります。

ところが、スタッフ自体が自分で出店してたり、お祭りを楽しみたい・・・、まあ

充分わかる理由で人員不足となってしまうのです。

ですので、この日だけの臨時スタッフ兼宣伝員アルバイトであります。

どおりですぐアルバイトOKとなったわけです。

一応写真選考だったらしいのですが・・・

（お願いしても来て欲しいだったとか）

男の僕はあまり必要なさそうかと思ったのですが、販売員＆人足担当・・・です。
裏方ですね。

<<会場しました！>>

会場に入る前、ちらつと外見したらすさまじい数が並んでました。いったいどこまで続いているのやら・・・。
その全員が入るのか？と少々怖いです。

「お願いします〜！握手してください〜」

「写真いいすか〜」

「こちらにも！」

「いつ入りなんですか！今度いかせていただきますので」
・・・

「でも、通常のコスとはずいぶん違うのかと思われませんが・・・」

「そこは良いみたいです。」

「なによりインパクトが重要とのことですよ」

「先生は急な参加表明でしたが、よく大丈夫でしたね。その、年齢的にも・・・」

「ああ、海水浴場での写メ撮りまして」

「見られた店長さんが、是非とのもことで」

「．．．なんでも良いんだな。」

「けっこう琴線に触れたみたいです」

「店長さん、少しMみたいです」

ああ、最初お会いしたあのメガネの人ですね。

たしかに．．．、二宮先生の後で．．．少しうつろになってます。

わ、会長の周り、何人が正座して会長をおがんですが．．．
女神降臨とか言ってる．．．

「．．．．蘭さん．．．、あの、少し危ないです」

「．．．ん？なに？」

「その．．．．見えそうで．．．」

「ほお、よく見ているな、見たい？」

「．．．．いえ、あ、．．．みたいです、見られたくはないです」
「よしよし、ヨイ子だ」

先生．．．．、その飲み物、酒じゃないですよ．．．。ここは禁酒ですからね！

「気分を盛り上げるためよ！顔みてもメイクで解らないから大丈夫」
「．．．．息と態度でもるバレです．．．。」

姉妹は．．．．さすがに慣れているな。

ポーズ決めている。ほんとに男性恐怖症なのか？

「今は人間である春香ではない」

「夏美は俗世界での仮の姿だ」

そうですか……。決まっています。

「なんか、露出度少ないような？」

「あら、それはもっと肌を見たいと？」

「私たちの魔の魅力にとらわれてしまったのね」

何といえばよいのか、全身を透けている布の帯で巻かれた感じのコースです。

なんかのアニメ？それともゲーム？

「いや、あっちの面々に用意したのに比べて……と思ったので」

もちろん、先の3人のことです。

「「たまたまですわ」」

たまたまねえ……。そうなのでしょうが、なんか少しウラがありそうです。

たとえば向こうの3人をいけにえにしているとか。まあそれぞれ特筆の

スタイルですから見栄えも光っていますが。

僕でもそう思うわけで、もしもそれが事実だった場合は彼女たちにも理解されている確率も高そうです。

「・・・たまたまですわ」

そう願っております。

あ、少し場内が寒くなったような・・・。

「今日はお疲れさまでした〜！」（春・夏）

TMS基地、蘭さんの部屋まで戻ってきました。

「ほんとうは、来週あそこに行きたかったのですが・・・」
鉄道模型のイベントが有りますので・・・
その元気残ってない。

「ほんとうに新鮮で楽しかったですわ」（鈴）

「なんだかあまり記憶ないわ〜」（二宮）

「先生がダウンしたので、車で送っていただいたのですよ」

「あたしの格好って、結局なんなの？ 来る人に決まった変な言葉
かけられて」（蘭）

「あの、皆さん、お疲れになったかと思いますので、そろそろ着替え
えた方が・・・」

「……ええ、まだコスのままです。車で帰ってきたので良かったのですが。」

「だってさ、脱ぎ方解んなくて。」（蘭）

「これ壊したら申し訳ないのですわ」（鈴）

「でもシャワーあびたいわ、このメイクが辛い」（二宮）

「じゃあ、いつそ皆で入っちゃう？」（蘭）

「そうしよう！春・夏・脱がせておくれ」（二宮）

「あ、ああ、ちょっと待ってください、僕帰ります！」

「何いつてるのー！これから打ち上げでしょ！飲むわよー！」（二宮）

「そうですわ、もう咽カラカラです」（鈴）

「会長、手のそれ、ノンアルコールじゃないですよ、いつの間に……。そしてまた、あの日と同じに……。」

「じゃあ私たちがシャワー入っている間に買い出しお願いねー！」（蘭）

「え、僕が？」

「じゃなきゃ、皆で引き連れて買い出しいくわっよ！」（蘭）

「……………行ってきますので、早くすませておいてください……………」

あああ、未成年の僕に調達できるだろうか……………
こうなるのだったら……………、玲子さんにも残っていただくべきだった……………。

「早く寝ないとお肌に良くないのよ」

……………僕は……………、精神に良くないです。

18 決断（春香の回想）（前書き）

今回は春香視線でのお話です。
そして少しシリアスです

18 決断（春香の回想）

< 18 決断（春香の回想） >

「おれが戻してあげるよ」

男の子はそう言って走っていった。

無意識にだと思う。いつのまにか手に持っていた本は、さっきまで立ち読みしていたものだった。

「なっちゃん、返しに行こう。きっと許してくれるよ」

「でも、立ち読みをすごく怒ってた。きっと信じてくれないよ」

どうしたらよいものか、公園のベンチで目をうるませながら二人でただうなだれていた。

そこへ横から聞いてたのか、男の子が本を自分たちから取り上げて最初の言葉を言ったのだった。

しばらくすると公園へ男の子が戻ってきて
「ちゃんともどしといたから！安心だよ」

ほんとうに嬉しかった。

男の子は自分たちとは違う小学校みたいだった。でも学年は同じ。なんとなくその後も公園で会ったりすると、一緒に遊ぶようになった。

有るとき、いつのまにか私の後ろに立っていた男の子。なんにも言わずにスカートに手をかけてまくりあげていた。

「いや！」

手を払いのけて拒否をした。なんでいきなりそのようなことをしたのか
頭の中で混乱している。

「見たいんだ。」

「そんなのいや、ハズカシイ！」

「・・・・・・・・いっちゃうよ」

「え？」

「本盗んだこと」

とても信じられない言葉が聞こえた。いつもの明るい笑い顔が、いまはとても怖い笑いに見える。なぜ、そんなこと今更言ってくるのか。

「少しだけ見たいんだ。目を瞑ってたらいから・・・」

。お父さんやお母さんに知られたくない。学校の先生や友達にも・・・
実際はそんなこと出来ないのだと思うが、その時は考えられなかった。
だまって目を、顔を手で隠した。・・・早く、帰りたい。

後で知っただけけれど、夏美にも同じことをしたらしい。
怖いので、その後公園には行かなくなった。

そんなことも忘れていたある日、道であの男の子が立っていた。

見た途端、私も夏美もしばらく動けなくなった。
思い出したように、来た道に戻ろうとした後ろから
「いいものがあるんだ」
と、男の子が声をかけてきた。

なにか手に持つてさしだしている。遠くからでも解った。
それは・・・あの忌まわしい記憶。
そう、ハズカシイ姿の自分、そして夏美。

「また、見せてくれたらこれは閉まっておくよ。」
いつのまに・・・。
夏美が震えている。私も。

男の子は、忘れた頃に現れた。

要求はいつも同じ。それは中学に入ってもますますエスカレートしていった。

思春期。とてもハズカシイ。悔しい。

夏美と一緒に、いつも震えていた。どうしてこんなことになってしまったのか・・・。

中二になっても現れた男の子は、もう昔のような子供ではなくなっていた。

次に会ったら・・・、きっとただではすまされない。

人に会わないよう、なるべく違う道を選んだ学校からの帰り道。どちらともなくただ泣き出して、

どこかの

マンションの階段に座り込んでしまった。

気がつくと一人の女の子が目の前に立っていた。自分たちと同じ制服。

女の子は3年生だった。やさしくいろいろと気にしてくれたことで、我慢して隠して、いままで言えなかった忌まわしい出来事を話していた。

その3年の女の子はじっと聞いていた。話し終わって黙り込んでしまった私の耳に

「ゆるせねえ」と聞こえた。

次の日から、その3年生と一緒に登下校することになった。
名前は

「三木 蘭、ランちゃんって呼んでね」と。
歩いている時は、明るく、すこしふざけているいろいろな話題をいっぱいにしゃべっていた。

3年の三木先輩。

いろいろと噂は耳に入っていた。とても素行が良くない内容ばかりだったが、目の前の女の子はどこから見ても普通の女子中学生にしか見えない。私たちともなぜか相性が良かった。

蘭さんは「親友に似ているんだよ、二人とも」と言っていた。

あの男の子は現れなくなった。それは蘭さんが卒業して、また二人だけになっても変わらなかった。

私たちは、少しずつ男の子のことを忘れていった。

高校に進学した。また会いたかったこともあり、蘭さんの学校を選んだ。

「どう？ 順調！？」

「はい、」

「その後は問題もなく」

「良かったねー！気分をかえて彼氏でも作りなさいねー」

「……………」

「どしたの？」

「あの、まだ……………」

「男の人は苦手で……………」

「ふーん、…………じゃあ、一緒にサークルしようか!？」

連れていかれたのは「鉄道ミステリー研究会。」

まったく解らないのですが、魅力的な先輩と、すこし地味な男の子。そして三木先輩がいるので、なんにも考えずに入会することになった。

すごく楽しい日がはじまった。いままで他の人とこんなに過ごしたことなかった。

唯一の男子会員である瑞樹くん。地味だけれど誠実で、だんだんと緊張しないで

話せるように。そして少し悪戯もしかけるくらいに。瑞樹くんにはちよつと可愛そうだったかも……。

ある日、思い切って瑞樹くんをお願いすることにした。

自分たちの写真を撮ってもらいたいと。

写真を撮られること。あの忌まわしい記憶がいつも拒絶で出してし

まう。

瑞樹くんだったら、そして会の先輩方だったらその壁を取り除いてくれるかもしれない。

そして、願ったとおりに。

男の人に対する怖い気持ちもだいぶ無くなってきた。その頃には、なぜかいつも瑞樹君を気にしていた。夏美も同じ。私には解ってしまう。

夏休みも残り2日になった。

突然だった。目の前に、あの男の子が笑って立っていた。

「引っ越してきたんだ。こんな近くになるなんて奇遇だね。」

見ると引っ越しの最中みたいで、トラックから荷物を運んでいる男の人たちが見えた。

背中に「便利屋」と入っている。

私たちは逃げた。またあの忌まわしい記憶が……。

どこだろう。いつのまにか大木の影に隠れるようにしていた自分たち。

「春香。もう……前みたいには戻りたくない」

「わたしも、同じ。なにか考えなきゃ」

私たちは一つ方法を考えた。忌まわしい記憶は、あの男の子が持っている写真。

その写真さえ無くなれば、私たちも、もう怖がることもない。

戻るとトラックの荷物はおおかた下ろされたようで、あとは壁際に数点の荷物が。

私と夏美は見つけた。そこにPCと機材、CDなどの記録メディア。

飛び出してつかみあげ、後ろを見ずに走り出した。

手に抱えた機材。たぶんハードディスク。そしてCD。

PCはとても持てない。だが、おそらくそんな記録は外にあるはず。カケだった。

怒鳴り声が聞こえた。足音もだんだん近くなってくる。

たぶん・・・ダメだ。もうつかまるかもしれない。おしまいだなのだ。

楽しい、充実した高校生活。・・・もう・・・

「やめてください!」

白い何かが目の端に飛び込んできた。なんだか解らない。

「早く!走って!」

その白いものが私たちに叫んだ。

解らない。でも、言われた通り、私と夏美はできる限り走った。

19 過去

<19 過去>

「お願いします。彼女たちに危害を加えないでください!」

「なんだ! お前!!」

「いきなり飛びかかってきやがって」

追いかけてきたのは3人。

追われていたのは春香と夏美。

たまたま見た僕は、訳も判らないまま3人の前にとびこんでした。

けっしてケンカが強いわけではありません。ハッキリ言いまして弱いです。

ですが、姉妹が必死に逃げている。それだけで、なんとか助けたいとの気持ちだけで。

「ふざけるな! あいつら盗み働いてんだぞ!」

「捕まえてブツ取り返さなきゃ」

「僕が・・・僕が話します。なので・・・」

「おい、お前あいつらと面識あるんか?」

「ならとつと呼び戻せ!」

「盗みやつといて逃がすわけねえだろ!」

結局、春香と夏美を取りのがしてしまった3人の怒りは、こちらに集中します。

腕をつかまれて近くの公園まで引きずられて・・・。

これは・・・、とても話せる感じでもなさそう・・・。
僕も・・・怖くて・・・、本当に今にも涙でそうです。

「瑞樹ちゃん!!」

バシッ!

「・・・!うわ!、なんだ」

「このアマ!なにしゃがる!」

「ふざけんなあ!おらあ!」

飛び込んできたのは・・・、
「か、会長!?!」

バシッ!

「痛えー!クソッ!」

バシッ!

「うおっと」

何?何か振り回して・・・。かばん・・・?

バシッ!

「そらあああよつと」

ガツ・・・！

「キャツっ！」

「ほい、つつかまえたつと」

「！！はなせー！さわるんじゃねえ！！！」

「アホかお前」

「何飛び込んできたかと思えば、ずいぶんと綺麗なねえちゃんじゃねえか！」

「お！ほんとだ、こりゃ美味しいねえ、少し楽しくなってきたぜ」

「！！やめろー！あたしに触んなー！！！」

動け・・・俺！、自分！、動け動け動けー！！！！

「会長に！！触んなー！！！！！」

ガツッ！

「いっつつつてえー！！！」

「このガキい！！！」

手に持ったカメラごと会長を押さえている男の顔に思い切り殴りかかった！

体制は変な感じに傾いてるし、そのため思ったほどのダメージを与えるどころか

伸び切った身体に横の男から痛烈な蹴り上げを食らって・・・

「ぶうご・・・あ、・・・う・う・・・」

息も出来なく転がってしまう自分。ほんとうに情けない・・・となぜか冷静な頭でさげすんでしまう。

ただ、手を放された会長は、かろうじて男たちから逃げれたみたい。
。。良かった。。

「ふざけんな！痛えじゃねえかこのガキがぁ！」

あ、カメラを拾い上げた男がその手を振り上げた・・。今度はきつちり入りそう。ただし僕に・・。

「！！瑞樹ちゃん！！いや！やめてえ！！」

「おらあ！！！！！！」

7
 •
 •
 •
 8

「……！」

なんか迫力ある声が聞こえた……。のだと思う。あんまりハッキリしない。

たぶん少しのあいだだったと思う。ゆっくりと息を吸うことができたと感じた。

そして土の臭い。口にも入っている。目が片方おかしい。声が・・、

だれかが話してる。

順番にいろいろな感覚が伝わってきた。痛い。

そう、五感が失われた時間は、たぶん少しの間だ。

「あ！」

「テツさん！」

「なぜ・・・ここに・・・！」

「・・・ふー、止まったか。ギリだったな」

「「「「「「「「」」」」」」」」

「いや、止まってくれた良かったぜ」

「テツさん・・・」

「おまえら、いいかげんトサカだったからこいつらハンパにしめないだろ？」

「・・・まあ・・・」

「そしたらオレ悩んじゃいそうで・・・、なんせだいじな舎弟達と可愛い妹の痛い事実つくられちゃな」

自分はまだ倒れたまま。だけど、頭にはしつかりと声が届いている。
妹？

ここに該当する人物は・・・会長？

「テツさん、すみません、オレらまだよく解んなくて・・・」

「テツさんの声でだいぶダウンしましたが、頭の整理が・・・」

「あゝ・・・、解んないか？、まあなあ、オレもいまいち納得出来

てないんだけどな。

ほら、も一度その女の子見てみな」

言われて皆、会長を見る。しばらく見続ける・・・。

「妹・・・？」

誰かの口が動いた瞬間、3人とも身体ごと会長に向き直って。

「スっち」

「スツチなのか!？」

「おまえ、スツチ!？」

「はい、正解あゝい!」

と、テツと呼ばれた男が一言。

「「「・・・あ・・・」」」

「オレの苦悩も解った・・・かな？」

「あ!はい!!申し訳有りませんでした!!!」

「おい、誤るのはオレじゃねえだろ」

顔を上げる三人!

二人がすぐにこっちへ駆けよってかかえあげられた。

「あ痛!」

「あ、・・・悪かった・・・。オレらが軽はずみだった」

「スツチの知り合いに・・・」

そのまま言葉に詰まっているよう。

残りの一人は会長のカバンを拾って丁寧に汚れをはたいてから・・・
直接手渡している。

「「「ほんとうに・・・、申し訳ないことをしました!!」「」」

「・・・テツちゃん・・・」

「久しぶり。スッチ」

「・・・。。。。ありがとう」

「スッチ・・・、まだまだ足りない、こんな程度じゃ」

「。。。。。。、それ、言わない」

「。。。。そうだな、スマン。」

そのテツと呼ばれている男が、今度はこっちに歩いてきた。

「すまなかつたな。許してくれとは言える状態ではないようだが、
出来れば穏便に解決

してほしいのだけれど、どうだろう？」

「あ。。。。いえ。。。。。僕は・・・会長が辛いことになってなければ
良いので。。。」

逆にこちらから助けていただいたお礼を言わなければ・・・」

「それは違う。あんたをこんなにボコツたのはオレらだし。ただ、
その手出したこいつらもオレの大事な仲間なんだ。

だから・・・、あんまり・・・な」

「あの・・・、でしたらほんとに僕は気にしませんので。・・・テツ・
さん」

「。。。。、そか。アリガトな。」

「おい！見た通りだ。ケジメ入れろ」

「「「申し訳ありませんでした！！」」」

三人並んで深々とした礼。それを受ける会長と自分も・・・礼。

「しっかし・・・スッチがアレ持ってたらお前らの方がキツかったぞ！」

「「「・・・ほんとです・・・」」」

今一度、礼をしてから三人は出ていった。

「会長・・・大丈夫ですか？」

「私より瑞樹ちゃんが」

と、手で顔をそっとさすられる。

「・・・だ、大丈夫です。それに・・・近すぎてちょっと緊張します・・・」

会長、少し寂しそうに手を引く。

でもそのまま顔は僕の胸に押し当てられた。

「・・・ちよつとだけ・・・このまま」

「・・・！！」

「少年、大丈夫か？」

と問いかけられたのも意識が混乱中の頭に入りません！？

「・・・、ダメみたいだな。名前聞いても良いか？」

「は・・・はひ！ みみみみずつき・・・、いつ一条瑞樹！」

「了解つと。後になってスマンが、俺は「哲。便利屋のテツ」。また後日ちゃんとワビするわ。」

そう言つて、そのテツ・・・と名乗った男はくるつと背中を向けて出ていった。

「瑞樹です・・・」

もう一度、もう居ない出口に向かって小さくつぶやいた時、胸に押し付けられた会長の口が少しだけ動いた気がした。

「みずきちゃん・・・」

20 スクラム

< 20 スクラム >

正直、いろいろ混乱しているのですが、今現在一番の混乱は自分の胸に押し付けられた頭。

ここからは顔が見えないのです。フツと持ち上がったら別人！なんてオチがいかに現実だろうなあ・・・と

思えてきた頃。長い押さえ込みが外れてすつと離れていく感覚。

あ、やっぱ今柔道の組み手だったんだ。そうだ。そうに違いない！なんせこの自分の胸にじよじよじよ女性が・・・、しかもあの会長がしがみつくわけが無いものなあ・・・。

現実にもどらなくちゃ！

離れた影はやっぱじよじよじよせい？でもうつむいたままなので髪がかぶって・・・、

やっぱ顔見えない。あ、これって貞子か？貞子なのか！！テレビ無いけど・・・貞子か！！?????

「さだ子・・・」

あつ！しゃべった！！さだ子って！！！！おわわあわ・・・

「じゃない！」

バシッ！

ああ・・・、落ち着きました。あ、会長！お疲れさまです。

てか、今のツッコミって蘭さんのパートでしょう！会長キラチが

うでしょう!!

「私が・・」

「色々」

「思う」

「気持ちを」

あゝゝゝ、春夏姉妹キター!??って、やっぱり会長のネタで無いです。

「!!!!無にするな!!!!!!」

きい^^^^ん。。

耳つかまれて思い切り叫ばれた・・・。

「・・会長。服が少し汚れてます。あ、このハンカチどうぞ使ってください。」

「ありがとう」

ああ、僕は爽やかな好青年。ラララ空も海も山も風も僕にとっては美しい背景さ。

.....

えゝ、たった今、戻りました。長い旅でした。

「リンさん、送ります。」

「・・・ありがとう」

歩いてます。会長と二人です。

揺れる髪と背中を見てます。とても小さいです。

「あの、少しお聞きしても良いでしょうか・・・」

「・・・そうね・・・。やはり・・・ここまでね・・・」

「あの？」

「話すわ。ただ少しだけ・・・気持ち整理させて。」

自分と会長、駅前まで戻ってきましたが、そこでベンチへ座るところにしました。

なんだかとても落ち着きの無い会長の姿を見ていたのですが、ここにはいけないような気がして、飲み物を買いに自販機へ・・・。

戻るまでの時間はほんの数分だったと思います。でも会長の顔はいつもの鈴会長に戻ってました。

「瑞樹・・・くんが聞きたいことっていっぱいでしょう」

「……あ、それはそうなんですが……あまり立ち入ったことまではお聞きしないほうが思ってますので……」

「……優しいね……。」

会長の目が少し和やかになりました。

たぶん、気持ちの整理と一緒に、どこか決意をしてたと思います。それが自分の言葉で少し楽になったのかも……。

「私が瑞樹くんより3歳年上なのは知ってるわね」

「ああ、はい。前にあったカミングアウト大会の時に……」

「でも、学年は1年上……」

「……。」

「空白の2年……、いえ、ほんととはもっと長いんだけど、その明いた私の時間が、今日会った彼らとの時間なの」

「……。」

「私、片親でしょ。良くありがちだけど、思春期にいろいろと……。でね、彼らと知り合ったのね」

「みんな若かったから……。身体だけ出来つつある子供だったから、今よりも押さえがきかなかった。」

「そんなことだから罰あたったのかも。有るとき、他のグループとイザコザおこしてしまったの。」

私たち女ではなく男同士で。それでさっきの三人がつかまっちゃったのね。」

「相手は多かったわ。10数人ほど。丁度テツ・・・、あの後で仲裁してくれた彼も居なくて。彼、わたしのあこがれだった。ケンカも、あなたも感じたと思うけど、ほんとに強い。私にとってはあこがれでも、彼には妹だった。大事にしてくれた。」

思い出していたのだろうか。誰もいない改札を見つめながら少しの間、静かな時間が過ぎる。

「女がどうにも出来ないことは解っていた。でも、私は・・・どうしても何とかして助けたかった。」

飛び込んで暴れれば・・・、少しのチャンスがあればみんな逃げる事ができるかも」

「そして・・・その通りに飛び込んだの。ほんとうに若かった。他にも方法はあったかもしれないのに、その時はそれしか無いと信じてた」

「・・・つかまったわ。無理ないことだわ。・・・それで・・・その・・・」

「会長！・・・僕は・・・、僕もまだ子供です。だけど・・・、会長は、鈴さんはそのまま僕の鈴さんです！」

震えていた。会長の手が、そして肩が・・・。
その手を知らない間に握っていた。

「・・・彼がね・・・、テツ君が言ってた・・・まだまだ足りないのは、私へのツグナイ・・・と思い込んでるのね。だけど、違う。そんなこと、私要らないの。・・・だって、違うのよ、もう」

「スツチ・・・って、なんだか可愛いですよね」

突然横から言われた名前にビックリしていると思います。涙が潤んでいる目が、とても大きな目が僕の顔を見たので。

「スツチの鈴さん、そしてリンの鈴さん。どれもみな素敵な女性です！」

だれが言っているの？と訴えていると思われる目が、未だに自分から離れません。いや、ここは自分でも思うので、それは正解な反応ですね。ほんとに女の子免疫無いはずなので。

そして、今一度聞いてみたい、ずっと疑問に思っていたことを実行するのは今では感じてます。

あ、僕が好き？とかの話では無いので・・・残念ながら・・・。
・・・でも、そっちも気にならないなんて言えませんが。むしろソレを確認したいのですが・・・、どうしても「僕」の思い過ぎに思える・・・、いや思い込んで抑えているので。もう、傷つきたくないですし・・・。

「信じられない・・・。瑞樹ちゃんがそんな言葉かけてくれるなんて・・・。女慣れしているわね」

「え？僕が女なれ？・・・そのイメージは無しの方でお願いします・・・。ただただ明るくない未来になりそうなので・・・。」

少し戻ったかな？会長。やっぱりその方が良いです！

「でも、お話だけお聞きしてますと、まるで別の人の物語みたいで
すけど・・・」

「そうね。別人よね。」

そう言つて、少し嬉しそうに笑つた会長。

「あのね、それにはちょっとした理由があるのだけれど・・・」

見た感じ少し悩んでいます。

「さっきの続きになつてしまふのだけれど・・・私とあの三人が
ちよつとやな状態に
なつてしまつている時に、どこからか本が飛んできたの」

「え・・・？」

「もうボロボロだったから正義の味方には遅いのだけれど・・・、
そのことがきっかけで
その悪夢から開放されたのは確かなの」

「私、もう泣き叫んでたからハッキリとは聞こえなかったけれど・・・
・・・、どうやらその本を投げた人が警察に知らせるとか大きな声で
叫んでたわ」

「・・・」

「無意識だったのね……。精神崩壊みたいな私はずっと投げられた本をかかえていたわ。そして……。少しずつ、投げた男の子の顔を思い出したわ」

「……。それって……」

会長は静かに手を動かしてカバンを開けて……

「あなたね。あの時助けてくれた男の子……。そして、これがその時の本ね」

差し出された本を見た僕は、あの2年前の恐怖を思い出していた。そう、毎月買っている月刊誌。あの日も買ってきたばかりのソレに目を通すため、少しゆっくり出来そうな場所を探していた。

そう、だから聞こえたのだ。あの悲鳴。

泣いているのに、回りの男達は笑っていた。怖かった……。まさか目の前でこんなこと見るなんて……。

どちらもヤンキーに見えたし、もともとケンカする力も度胸もない自分にとって、ここは

見ないことにして逃げるのが一番良い選択だと思った。

でも、その悲鳴の音が耳から脳へ、そしてなぜか「助けるんだ！」と思わせる強い声が思い浮かんだ。

そのことずっと謎だった。その時だけの感情だった。

僕はまだ携帯も持ってなく、そのため助けをよぶことも出来ない中学生。

手に持っているのは……。本。

投げた。それは男達のだれかに当たった！

怒声が聞こえたけれど、恐怖が取り巻いている僕には解らない言葉

だ。

ただ「警察に連絡した」と叫んでから思いっきり走った！
走って、走って……一切振り向かずに。

21 きつと解ってたこと

<21 きつと解ってたこと>

「思い当たるのね」

「……あの時の……」

「そう、私が泣き叫んでた女の子」

また悲しそうな目になってしまった。いや、この自分がそうさせたのだろうと思う。

話を聞きたい……などと言わなければ、こんなにも辛そうな会長にはならなかったはず。

「ちゃんと逃げれた？それだけがずっと心配だったの」

「……はい。全力で……」

「……良かった。」

その後の数日は街中あるくのもビクビクだったのです……とは言えなかった。

会長は僕に渡した雑誌にゆっくりと目を下げていった。

「この本には、それ以外にも助けられたのよ」

「え？……」

ただの趣味誌の本が、会長のためになった？

「いろいろなことを思い出させてくれたの。それがあったから今の私になれた」

「・・・思い出したこと？」

「・・・そうね、残念だけれども、今となつては言えない最後の秘密ね。それくらいは良いでしょ？」

「でもね、そう・・・私が2年のブランクの後、高校に行くことにしたのは、たしかにこの本のおかげ」

「全然関係なさそうですけど」

未だ整理できてない頭とは関係なく、自然にでた疑問の言葉です。

「あなたに・・・、ちゃんとした普通の高校生として会いたかったの」

「・・・僕ですか？・・・。だって、あの事件の時に遠くから本を投げただけなのに？」

「そうね。ちよつとだけしか顔見れてないし、記憶だって曖昧だしね」

なぜ？ほんとうにそれだけのために??

「じつはね、その言えない秘密も関係しているのだけれども・・・。だからそこは聞かないでね」

うなづきます。そんな・・・辛い告白でした会長に、それ以上のことなど・・・。

「ん・・・、こっちは良いかな！？、一条君だし。」

一条君・・・。久しぶりに会長らしく呼んでもらいました。

「あのね、事件の後でいろいろと助けてくれたのが蘭なの」

「蘭さん？幼なじみだったのですか？」

「えゝゝゝと、おなじ仲間だったの」

「ゝゝゝ？、仲間ってゝゝゝ、あのヤンキー仲間！？」

「仲の良い後輩で女友だち」

ひゃゝゝゝ！！！！？思いもしないことであります！蘭さんも全然解らない！！

会長、自分のスカートの裾をたくしあげます。

なゝゝゝなにしてるのですか！いきなりゝゝゝ！！

見えます。もう見えちゃいます。

あゝゝゝゝゝ。混乱で静止した思考に蜂ゝゝゝ。いや、蜂の絵。
会長の左内ももに蜂がとまっているようなゝゝゝ。

「虫よ。ゝゝ蜂。前に蘭の絆創膏の話し、覚えているかしら」

そうだゝゝゝ、競技会の時の写真。

蘭さんの内ももに絆創膏が貼ってあって、それを画像処理しようかと話そうとした。

会長は虫に刺された跡と言ってた。プールでもサポーターしてたのはゝゝゝ。

その虫を隠すためゝゝ。

「春香と夏美は部外者よ。プールではそろえてもらっただけ。喋ったことはナイシヨね！」

「も、もちろんです！」

「でも顔に出そうねゝゝ。また怒られちゃう」

なんか少し嬉しそうなのはゝゝ何故？

「で、蘭に相談と言うか、どうして良いか解らないと話したらね、
「なら女子高生になる！」だって。

彼女、当時中学三年生になったばかりだったの。この事件は彼女に
もかなりショックだったみたいで、
できれば普通に高校生になろうかと考え始めてたのね」

「さぼってたけれど、私も一応中学卒業してたし、その気になれば
まだまだ高校生の年だし。

それから二人で一生懸命に勉強したわ！。うちの高校ってそこそこ
良いランクでしょ。

それくらいの所にいかなければ、本当に高校生になった私ではない。
。そして、あなたと会うことにも

自信が持てない・・・。」

「そんな・・・僕に会うこと・・・なんかもその理由に入るので
すか？」

「もちろんよ！。だってあなた、ヤンキーが会いたっていつでも
怖いだけでしょ」

「・・・はい」

「今の私だから安心して会えたと思うの。だから・・・私の作戦
は大成功なの」

また・・・自分の知らないことが・・・もういっぱいすぎて熱が
でそうです。

あ、なんか恥ずかしくてすでに発熱中です。

「でもあなたも同じ高校にくるなんて、大成功どころではなかった
かもね」

「・・・なぜ、僕が入るのを知ったのですか？」

「入学式の日、もしかしたら・・・と思って見てたのよ！。そう

したら・・・見覚えの有るあなたを見つけたわ」

「・・・・僕は今、夢をみているのかもしれないね。あまりにも僕にとって都合の良い話です・・・・」

「私も夢みたいで飛び上がりそうだった」

やっぱり夢なんですね。今のこの状況は・・・・。

「そこからまた蘭と相談したの。なんとかあなと自然に遊び合える関係がはじまるように。」

そうしたら、またうまくまとまったわ」

「・・・・、それって・・・・鉄、TMSのことでしょうか・・・・？」

「嬉しかったわ！窓から覗いてくれたあなたをみた時」

ワナ・・・・だったのですね・・・・。鉄道の文字って。

「そうね、なんせあんな本を持ち歩いているのだから、きっと釣れると確信はしてたわ」

ああ、みごとなり鈴会長！あらゆることで完敗です。そして・・・・とでも・・・・尊敬です。

話も長くなってだいぶ時間が遅いです。このまままた変なトラブルにまきこまれないように今日は帰ることにしました。

いろいろと会長を知りました。ほんとすごいです。悲しいことを話してくれました。ますます好意を大きくしてしまいます。

でも、もうひとつだけ・・・・最後に残った僕の疑問。

たしかめるのは今日が良い・・・とあらためて思ってます。

「じゃあ、また学校でね。こんな私でも・・・、今まで通りに接してもらえる？」

「もちろんです！いえ、それ以上に僕は会長が大好きになりました！」

「・・・、嬉しいわ。とっても・・・。ではまた明日ね、一条君」

「またあしたね！ムツねえ！」

歩き出そうとした会長は、ふっと足を止めて不思議そうな目を向けてます。

「あの・・・なんか言っただかしら？」

少し動揺してます。いえ、なにか怖いものを見つけたような顔をしています。

「あしたも遊ぼうね！・・・ムツねえ」

「・・・ムツ・・・ね・・・え・・・」

涙が、目から沢山の涙が一気にあふれ出して・・・あつという間に顔中泣き顔・・・。

そう、この顔が「ムツ姉」の泣き顔です。

最初に見たリン会長。今日見たスツチ。事件の時の泣き叫ぶ女の子の声。

そう、だから、きつと解ってたんだ。あの日とつぜん居なくなつたムツねえだと。

いつも引き止める心の声は・・・・・・ムツねえ大好き！。

22 度胸だめし、肝試し

<22 度胸だめし、肝試し>

「いきさつはスッチとランに聞いてケリつけといたから」

校門でいきなりテツさんに話しかけられた。

「しかし、瑞樹ってあの時本投げたって男だったんだ。アイツラにも重ねてワビいれさせないとな」

「え、とんでもないです！僕は何も！」

「おーい、テツ！これ持っていつてくれ」

「ああ。」

二宮先生！

「あれ？瑞樹ちゃん、テツとお知り合い？」

「なんだ、アネキの生徒？」

「そうよー！可愛い教え子よー！いろいろとね。」

「あー、そりゃかわいそうだ。ヤベーと思ったら構わず逃げろよ、食われるぞ」

「ほおー、いいドキョウだ。姉ちゃん大好き！て離れなかった弟君」

ああ…。二宮先生とテツさんはご兄弟だったんですね。

「……じゃ、またな！」

「ところで瑞樹ちゃん！先生からお・ね・が・い・が有るの」
「・・・・・・なんでしょう」

「また、写真撮って欲しいかな・・・なんちゃって！」

「・・・あの、この前の海とかのは・・・先生の魅力が良くあらわれているかと・・・」

「ああ、あれも良いんだけど、今度のはちよつと違う感じで・・・」

たとえばボンテージ？」

「・・・ついに来たか・・・最強のコスが・・・」

「瑞樹ちゃん、声出てるね」

「よっ！お茶いくぞ！」

「蘭さん！」

「じゃねー！連絡するからねー、お礼はタツプリと・・・ね」

「行きましょう・・・蘭さん」

「あ？・・・ああ」

お茶！は、いつも通り鈴八。なので駅へ蘭さんと歩いてます。
そつえば会長とかとは二人で歩くけど、蘭さんとは無かったかも？

「嬉しいか？」

「・・・ええ」

「よし。ヨイ子だ！」

僕以外の会員がミステリーです。

「春と夏な、なにも聞かないであげてくれ。」

「え・・・はい」

「そのうち、必要と思ったら自分から言っからさ」

なんか真面目な蘭さんって、大人だ。

「身体はもつと大人よ」

「・・・知ってます」

「さては見たな」

「・・・いろいろと見せられました」

「・・・瑞樹くんのエッチ」

「！！やめてくれ！！耐えられない！！」

この悪魔・・・。。まさに悪魔。

「リンからいろいろと聞いたの？」

「・・・はい」

「・・・そっか」

「で、どう？」

「・・・？どう？」

「見方が変わった？」

「・・・それは無いとは言えません。」

「・・・そつか。そうだよね」

「鈴さんがムツねえと解ってしまいましたので」

「・・・？よく解らん」

「え、・・・あの、・・・大好きなムツねえにまた会えました」

「・・・？それは、大好きなムツねえがヤンキーだったことで幻滅したってこと？」

「いえ！そんなこと思いもしません！ただ、会えたことで嬉しくて！」

「へえ・・・、以外。普通は引くのに・・・」

「そんなこと思いもしません！会長のリンさんで、大好きなムツねえです。あこがれです」

「ふうん・・・」

またしばらく静かにあるいていく二人。

もうじき駅前につきます。と、突然前を歩いていた蘭さんが立ち止まって振り返りました。

「リンが好き？」

突然の質問に声が出ません。

・・・正直に言えば大好きなのだと思います。
でも・・・、これを言ったら・・・全てが終わってしまいそうです。

じつと目を見る蘭さん。

どうしよう・・・。なんて答えれば・・・。

「あたしは好き？」

・・・！

また突然な質問。蘭さんが好き？
自分の気持ちはどうなのだろう。・・・そう、きっと僕は蘭さんの
ことも好きだ。

でも、なぜ？どうして・・・？

「あたしは・・・」

と言って蘭さん、また前を向いてしまった。

「瑞樹ちゃんのこと、・・・好きよ！」

・・・え？

・・・何？・・・僕のこと・・・？好き？

蘭さん、顔だけこっちに向けて

「ごめんね。あたし、ちょっとズルいことしちゃった。」

？？何がズルいのでしょうか？

だれに言っているのでしょうか？？

もう何が何だか混乱中です。

「さっ！行こ！」

鈴八です。付きました。

会長が上を手でさしてます。多分部屋へ・・・と。

会長の部屋。二度目ですね。

そこには春夏姉妹がすでにおりました。

「「遅い！」」

え・・・機嫌悪そう・・・。

随分待ったのかな・・・。それともなんか、悪いことしたっけ？
女の娘は・・・ほんとに解りません。

ああ、今日は戸惑うばかりです。

「瑞樹君」

「ありがとう」

「？」

座りかけていた所にいきなり言われました。
怒ってたかと思ってましたが・・・お礼の言葉・・・？

二人を見ますと・・・・・・・・？なぜ？目を背けられた？？？

「「ちっ」」

あの・・・・・・・・、今の舌打ちですよ？たしかにしましたよね？？
僕・・・・・・・・何かいけないことでも・・・・・・・・？
さっきのありがとうって、聞き間違いだったのかな・・・・。

「あゝ、ついにここまで・・・・・・・・。」

蘭さん、意味が？

「あれ、ほら天下の王道。ツンまでたどり着いたですね」

まったく意味が・・・・・・・・？

「いらつしゃい。用は済まされました？」

「あ、はい。テツさんと会いましたが・・・・・・・・一言だけでした」

「あら、そう」

「あと、二宮先生が来まして・・・・・・・・、ご兄弟だったの知らなくてビツクリでした」

「似ていますでしょ」

「・・・・・・・・ある意味」

「今日はティラミスを作ってみましたの。みなさんの感想を聞かせ

てね」

「「「はい！」」」

・・・こんなときだけ素直だ・・・

「「何？」」

「いえ・・・」

「一条君のために、”心を”こめましたわ！」心を”味わってくだ
さいね」

「・・・会長、少々謎なのですが。なんか含みがあるような・・・

」

「まあ、恥ずかしいわ」

なんか怖いぞ・・・、皆が。食べながらこつちを睨んでいるような
・・・。

「では、これより瑞樹ちゃんへ感謝を伝えましょう決定戦をはじめ
ます。」

・・・？何ですか？それ？

プルルっ・・・

「あら、メールだわ」

「会長、その画面は・・・夏コミでの先生・・・」

「恥ずかしいわ。少々ポロリを記録いたしましたの」

「・・・???どこです???」

「それが、メイクで見えませんの。いやですわ、けっしてお年のせい
いで

色素が濃いわけではなくてよ。」

「・・・あの人なら聞こえてそうです。

<あたしも混ぜろ。そして濃くねえ!>

「まあ・・・」

「・・・まあ・・・では無いかと。

・・・混ぜろ?

「では、これから始めますわね。被告人は前へ」

「被告人って・・・。そして前って、テーブルです」

「言ってみただけですわ」

「あ、その、少し事情をお聞かせ願えましたら・・・?」

「もちろんですわ」

「これから、だれが瑞樹くんの初めてをいただきますか決定戦を行います」

「?・・・」

「エントリーは5名」

「???・・・」

「決めるのは瑞樹君」

「・・・あの、なんのことでしょう?」

「あなたの初体験にきまってますわ」

「・・・すみません、少し混乱してますので帰らせていただいても・
」

「なにをいってますの。主役のあなたがいなければ話が進みません
わ」

「・・・、ワナだ、きつと夢だ・・・。現実ならば、絶対になに裏があ
る。

そして、それは99%の確率で不幸になる。

この人たちの思考がまったく解らない!!!!

「ご理解いただけましたようで・・・」

まゝったくご理解してませんゝゝ!!

カチャッ

「まあ、みなさん、いらっしゃい。鈴さん、わたしも入れておい
てくださいね」

ボタン

・・・今のは何だ?玲子さんは何言ってるんだ?

「ちっ」

「「ちっ」」

「ちっ」

今、四方から舌打ちしませんでした？
皆さん、なぜ顔背けるのです？？

「そのような訳で、瑞樹君、選んでくださいね」

「・・・ですから、これオチないでしょ！無理でしょ！..」

「まあ、恥ずかしいわ」

「誰を選ぶのかしら」

「瑞樹ちゃん、覚えてる？私からの言葉！」

「「あつ！..」」

「蘭さん、なにかしましたね」

「ここまでの間に、なにかズルしたでしょう！」

「まあ、蘭ったらいいけない娘だわ。」

「あの！なんなんですか！この進行！」

「先ほどからご説明した通りですわ。あ、二宮先生とマ・玲子さんは、この熊と猫ですので、まさかと思いますが、選ばれるなら手に取ってくださいね。」

「・・・会長の趣味ですか？このシャケくわえた熊と小判もった猫・」

「さあ、選んでくださいね。もちろん私はいつでもよいですわ」

「「あゝ」」

「ちよつとリン、ずるくない、そんな抱きつき反則でしょ」

「ただ選ぶのにお手間をかけていただくのとも思ひまして。

それに、なにやらウラで仕込んだ蘭さんに言われるのは心外ですわ」

「瑞樹ちゃんにムツねえって言われて泣いちゃったんだって？」

「は？蘭さん、なんで知ってるんですか！」

「「とまりました」」

「リンが止まった。今のうちに」

「みなさん！一体全体、なんなのですかー！！」

「しょうがないですね。今一度ご説明いたします」

「なんて言うか・・・、あたしたちさ、瑞樹ちゃんのおかげでいろいろと助かったんだよね」

「？え、助けたなんてそんなつもりは――」

「それで」

「お礼をしたいと思ひまして」

「ええ？お礼？・・・ますますとんでもないです！」

「少しはしたないかもしれませんが、キスなどと思ひまして」

「……………は？」

キツ…キス…???なんで？

「……………冗談ですよ？……………会長？」

「その…、わたくしもそのようなこと押しつけてはと思ったのですが…、成り行き上、引くに引けないと言いますか……………」

蘭が……………」

「あれ…？だから皆はいいって言ったじゃない。私個人の気持ちとしてだから」

「蘭せんぱい！そのような勝手な言い分、手放して承諾できません！」

「そうですわ！蘭の意味不明な言動がすべて悪いのですわ」

「……………あ……………だからさっき僕に言った”好きよ”なのですか……………」

「あ、瑞樹ちゃん！ダメ！」

「……………蘭……………そのような仕込みを……………」

「蘭先輩……………。瑞樹さんを誘惑……………」

「でもさ…、あれでしょ！、瑞樹ちゃんしたことないでしょ。始めてよー！」

それも選り取り見取りの美女よー！！」

「……………回答を拒否の方向で……………」

「絶対ですわ」

「きつと違い有りませんわ」

「あら、そう言うあなた方もされたことないのでは？」

「全然平気です！！」

「それよりも、会長」

「あら、何ですの、春香さん」

「先ほどこのようなものを発見いたしまして・・・」

「まあ、恥ずかしいわ」

「「・・・！！なにいっ！！」」

「会長、するいです！いつのまにこんなこと！！」

「・・・会長と僕との写真。」

「まあ、恥ずかしいですわ」

「リン、脱落！！」

「でも、あれはほんのちょっと頼に」

「失格っ！」

「そうは言いますが、蘭さんもグイグイ押し付けてたですわ。酔ってた時」

「「蘭先輩！脱落っ！。フライングもしたし、失格っ！！」」

「え、えっ！！記憶なければ無効だっ！」

「そちらのご姉妹は抱きついて寝てましたですわ」

「はい脱落！」

「「キスではありません！」」

「皆さん、脱落とのことで、とりあえずこのゲームは終わりでしょう？」

キスの奪い合いですか。すごいフラグたちましたよ。

あゝ……、絶対面白がっている。この人たち。

ええ、それくらいでは動じなくなった自分が悲しいです。

え、あすからの昼飯がかかっている？学食？ああ、そうですね、キスできると副賞でただ飯もいただけるんですね。

……

一瞬、なんの初体験かと思いましたよ。

「あら、そちらがよろしければいつでも」

会長、もうフルオープンですか？何も抑えることなくまりましたか？

「ほほほ、なんせ全部お話しましたし、もうバッチコイ！ですわ」

……ほんとに……あのムツねえ？

「いいのか？こんな美味しいこと逃して。最大のモテ期だったかもだぞ？」

「……それに付きましては、後悔しているかもです。」

「ところでさあ、ここに居るのが脱落なら、あとは熊とネコしか残っていないけど？……する？」

「・・・・・・・・すみません、しない方向で」

「濃厚な大人のキスなのに・・・・。」

「・・・・・・・・いつから見てました？玲子さん・・・・。」

23 なぜ僕はここにいるのだろう？（鈴）（前書き）

第一話を、鈴の視点からです。

23 なぜ僕はここにいるのだろう？（鈴）

<23 なぜ僕はここにいるのだろうか？（鈴）>

いったいいつまで待たせるのかしら。午後はクラブ見学会。ならすぐにでもここに来ても良いはずなのに……。

来るのは知らない男子ばかり。は、当たり前か。

モデルですか？写真ですか？って質問何？

モデルクラブとか書いてないでしょ！

違うのかな？言っている意味。

でも、そのたびにミステリーの説明してお引き取り

願ってますが、もしもそのタイミングで見られてしまいましたら台無しです。

この教室だって、勝手に使っているのだからクレームが付いたら追い出されてしまいますわ。

それに……、蘭ったら、ちょっと偵察とか行つて、どこで道草してるのだから。

もし今来てしまったらどうするつもりなの……。

それにしても……、この学校に入ってくるなんて……。

神様、ほんとうに感謝いたします。

……でも、もうすぐ予定の電車が来てしまいます。

ああ、このまま計画がダメになってしまったらどうしましょう。

さつきから独り言ばかりだわ。知らない人が見たら気持ち悪いと思われてしまいます。

・・・あら、また誰かきましたわ・・・。

あ・・・、瑞樹ちゃん！。目を丸くして覗いている。
懐かしい顔。成長しても面影は充分あります。

ほんとに、やっとまた会えました。でも来るの遅いわよ・・・。

・・・ではなく、落ち着いて。冷静に。深呼吸・・・は声に出さないで。

「入会希望？」

わ、何度もうなずいてる。ビックリしているのね。

え、もしかしてバレたの？まさか、ネタばれ？？

いえいえ、そんなことないわ。

・・・まさか、昔力ツ上げたとか？？

え・・・イヤよ！そんなの！！イヤ！！！！

はっ！

あぶなく叫ぶところでしたわ。

大丈夫。きつと私のこと気付いてないわ。あ、急がなければ。

まずはこの封筒を渡して・・・。

「時間ぎりぎりなので急いでね」

そして、さりげなく歩いて・・・、歩いて・・・歩いて・・・、曲が
る・・・。

それ！　だあああっしゅうつつ！！！！

まったくー！！蘭ったら、やっぱりに合わなかったじゃない！！！！

もう、こうなったら一度帰ってバイク使おう。

……あ……、免停だった……。けど。

いや、このさい四の五の言ってられせんわ！

あの子ももうじき電車に乗りますから……。

えっと、二駅電車だと5、6分。バイクでも同じくらい。

掲示板に書き込んで、それから入れ違いに電車に乗らなくちゃだから……。

ほんつとギリギリだわ！

さあ！行くわよ！！

あ、制服のスカートのままだった！！、えい、モロ見えて文句無いだろー！

サービスタップリだクソ野郎！！……ではなく、あまり見ないでくださるかしら。

は……、どうしてもコイツにまたがると気持ちが変わっちゃう。

普段は特訓したかいがあって私らしい上品な言葉が身に付いてきたのですが。

やはりこの姿はしばらく見られないようにしなければ。

もし見られても口を開かなければ大丈夫かしら……。

あ、

いけない！行き過ぎた！！まじヤベー！！

つここ……、バイパスにはいつちゃってるよー！Ｕターンゾーンまで……

うわ……！！全然ないじゃない！マジ……！！

...--U'9TCTU'NFU'9TCTU'NF

えゝ・ゝ・ゝ、もうヤケだゝ！この脇の斜面下りるぞーって
うわゝゝゝゝ！！！！はねたゝゝゝゝ！！！！飛んでゝゝゝゝ！！！！

イデエ
~~~~~  
!!!!

着地したらケツにグツサリ食い込みやがった……。

くそ、この可愛いヒップがデカ尻になったらどうするんだバカヤロ  
ー！！！！

・ ・ ・ ではなく、 ああ、 痛いすわ ・ ・ ・ じゃねえ！！

時間無いんだ、急ぐんだ――！！！！

つと！

あ、電車が向かってくるの見える！このまま駐輪場に滑り込み〜！！！！

よし、ボードボード。あつた！

ちよつとマジックないじゃない!!!

くそー！！！！あつ、持ってた。偉い！私！！！！

力キ力キつと

よし、丁度電車が入ってきた。

ええと……スイカスイカ……スイカは夏の風物詩でピ！

あつ、乗ってる乗ってる。下りた・・、あつ止まるな！早く向こう  
 に行つて！

ドアしまっちゃう!!!

とお……！！！！と

<プシューボタンっ>

ひゃー！アブね．．．ではなく、危なかったですわ．．．と。

<お客様に申し上げます。ドアが閉まりかけてからの乗車はた・い・  
へ・ん・危険です。>

ちっ、．．．ソレ、私よね。他に乗った人、居ないものね。  
．．．．．気をつけますわ。

は、これであのボードを見つけてくれましたら。

．．．見つけるわよね。．．．きつと。．．．．．どうかしら．．  
．．。

ああ、神様．．．、お願いします。どうかあのボードを見てくだ  
さい！

じゃなく、瑞樹ちゃんが見るようにしてください。

あ、駅に付いた。

え、と、一度下りて。

で、またスイカスイカ、スイカは夏の、ピッ。

この電車に乗ります！で、2号車の、8の、D．．．．．  
なにこれ、だれ？こんなところで弁当くったやつ。  
ちゃんと片づけてよね。もう、これも、それも．．．．．

．．．おばあさんに褒められてしまった。えへへ．．．。

さ、とつ！あ、発車だ！

一息つける？

あ、そうだ。神様お願い！見て！．．．  
じゃなくって！瑞樹くん！私を見て！！

・・・や、今見られたらヤバいじゃん。バレるじゃん。

掲示板掲示板掲示板・・・あれ？駅のあの板って・・・  
伝言板じゃない！何言ってるの私・・・、恥ずかしい！！

・・・いい、だれも居ないし。あ、見てました？何でもないので。

ええ、ほんとに平気ですから。

隣のおばあさんに心配されちゃった。

あ、もうすぐ着くわ！いるかな、どこから乗るかな？

・・・いたー！！、キター！！！！

ああ、後から乗りそう。じゃあ隠れて前に・・・って

あああ、まだ封筒置いてない！！マズイ！！、

エイッ！イスの上に落ちた？どう？アッ、ドアあいちゃった！！

隠れなくちゃ！！！！

どこに？？？、

あ、すみません、おばあさんその席空いてます？

そうですね、ちよつとの間良いですか？え、他にいっぱい空いてる？

ええ、そうですね、ちよつと事情が・・・。

え？

聞こえない？すみません！大声出せなくて・・・。

ああ、ちよつと隠れたくて・・・。

え？、

ええ、

あの人から見えないように・・・。

え、

あ、

違います、ストーカーじゃないです。

その少し、顔合わせたくなって・・・。

・・・

違います！フラレたからとかじゃ無いです！！

・・・

おまんじゅうも要らないです。

ああ、やっと着いた。二駅でボロボロ・・・。

ああ、よしよし、そのまま鈴八へ直行！

そうそう、入ってね！

よし！じゃあ私は裏口かつ！うお！つと！

なに、すぐに出てこないでよ！

ええ！いつ！このまま入っちゃえ！！！

ママ！！！！パス！！！！つ！！ヨッシャあ！！！！あ・・・ああん、失礼しますね、ホホホ。

間に合った！

ハイッ！ストゥップ！

見てる見てる！ああ、ほんとに瑞樹くんだわ。  
あっと、次は

「行くわよ」

よし！じゃあ、レッツゴー三匹つと。  
スタ、スタ、スタ・

着いてきてるかな？

フフ！来てる来てる！

後姿を見てるな！なんか恥ずかしいかも・

ここはサービスしてお尻ふっちゃおうかな。

え、上見てるの？魅力ない？

それとも・・ロボットみたいと思われてる？？？

・・慣れないことやめとこ。

さあて、教室に帰ってきました！

ここで、クルツと！

おほほ！目がそのまんま瑞樹ちゃんだ！

「合格だわ」

決まった！私、今すぐ大人！？

あ、そういえば、さっき手に持ってる箱、グルグル回しちゃったけど大丈夫かな？

とりあえずだしちゃおっと。

これ、昨日私が瑞樹ちゃんのために作ったんだから。ちゃんと味わって食べてよね〜！

紅茶はこのカップに〜。

・・・う、少し腰痛めたかな？やっぱバイクで落ちたときにケツしこたま打ち込んだから・・・？

なにか言ってる？

イテテ・・・、ちよつと、今答えられない・・・。

「座ってから（イテ！）ね。」

ケツ痛〜！ちよつと待ってね、痛み収まるから・・・。

ふ〜、落ち着いた。

「今日から研究会のメンバーよ」

あ、また質問。

そんなことより、早く食べてみて！手作りプレミアムシュークリーム！

・・・もう！全然手を出さない！無言で念じて・・・

あ、目をそらされた。なになに〜！私を見れないっての！！

もう、早く食べて〜！

こうなったらお皿おしちゃうんだから！

は〜、まあ後でもいいか。とりあえず名乗っておこうと！

「私、八神 鈴」

で、いよいよ名前を言ってくれろ！

あれ？続きこない？自己紹介に気付いてないの？

「会長よ」

あ、気付いた。・・・え？

何何々???

蘭っ！・・・、はっ・・・。

え？、蘭の第一印象が牛だった。モロじゃない！瑞樹ちゃん上手い！

あらら、瑞樹ちゃんセクハラという言葉で混乱してる。

あゝらら・・・。

ん？やっぱりそこか。・・・胸か。

男って・・・同じなのね。

私は蘭より年上なのに・・・。もう延びる余地ナシね・・・。

そうよ、二人で作った会なの。そ・れ・も・、あなたを引き込むためにねっ！

だから、この鉄道の文字は、ワナなのよ！

やっ、ひっかったっ！！完璧っ！！

はっ大成功だわ。

しかし、ほんとに疲れた・・・って

なにシュークリーム2個目に手を出してるの！蘭！

瑞樹ちゃんのためにつくったんだから。

うふふ！旧姓、六田のムツねえですよ～！  
3つも離れているのに、いまから同じ高校の先輩後輩ですよ～！  
よろしくね～！瑞樹ちゃん！

## 24 鶴の恩返し

< 24 鶴の恩返し >

秋です。学園祭です。

ちらつとは思ったんです。あの方々が静かにしていただけるのか・・・と。

ああ、うかつでした。もっと前もって阻止の手はずを考えておくべきでした。

我がTMSも参加することに。

学校関係のクラブでは無いのになぜ？なのですが・・・

どうやら会長をはじめとした女性陣が生徒会とかけあったとか・・・。

噂では、その後しばらく生徒会長の早退が続いたとか・・・。

半月前のことです。

「劇をしようと思いますの。解りやすく、人数も可能な演目ですわ」「それが「鶴の恩返し」ですか・・・」

たしかに、その条件には一致してます。しかし、練習時間的に難しいのでは・・・。

「みなさんも物語は理解されているはずですので、あとは各自衣装を用意するだけですわ」

「え？、練習・・・、稽古はしないのですか？」

「いえ、一度いたしますわ。」

・・・一度・・・ですか。

当日、休んでも良いでしょうか……。いや、その後が想像できない  
恐ろしさですので・・・

転校とかでなければ・・・。

「ここからが本題なのですが、これから役を決めようかと思いき  
いの」

・・・、皆、止まりました。・・・空気が・・・張りつめています。

<お見苦しい場面のため、早送り>

熾烈な争いの後、一通り決定しました。僕はおじいさんです。まあ、  
そんなところです。

学園祭当日です。一度だけ・・・の通し稽古が終わりました。  
今9時です。ええ、泊まりましたよ。

だって・・・、舞台セット作り始めたのが昨日なんです！

「あの・・・、この台本なのですが・・・」

「「なにかしら？」」

「…………。4ページしか無いのですが…………。  
あの、5分もかからないで終わってしまうのですが…………。」

「ここは役者さんをたてたのですわ」

「みなさん天性の表現力に期待してますわ」

「…………。その場でなんとかしりろ…………ですか。」

春・夏・姉妹は脚本と演出です。

「…………、ご機嫌がよろしくない？」

「いえ、すこぶる良いですわ。主役では無いですが。」

「まったく問題ないですわ。鶴になれませんが。」

「……………。それで、台本なのですが——」

「「なにかしら？」」

…………自称、機嫌のよろしいらしい春・夏・さんです。  
…………三二会長です。

「じゃあ、私たちが着替えてくるからね〜！」

女子4人はそう言って別室に…………。

…………脚本、演出も着替えるの？

まあいいや、僕もここで着替えて・・・。

あれ、こんなだっけ？え？なんでラメ入ってるの？

この前作ったのと違うー！！

このデカイ蝶ネクタイ、おじいさんにいらないでしょ！

そう言えば、先日会長に預けたのだけれど・・・。。まさか・・・

「刺激って大事ですわ」

・・・まだ居ましたか、会長。

「ここは衣装の内側に、この養成ギブスを」

魔球を投げる場面教えてください。蘭さん。

開演１０時。学園祭と同時にスタートって・・・、少しは時間ずらすでしょうって・・・

「とつとと終わらせて遊ぶためだな・・・」

外は・・・！

スゴイ！なんで？・・・宣伝もしてないのに、もう並んでる人がいます。

「撮影は禁止ですわよ」

「踊り子さんへのおさわりも禁止」

春・夏……。あんたら、舞台で何させるん？

会長、蘭さん。

その着てるガウンは？・・・アントニオ猪才木？

「脱ぐのはステージまでお預け！」

「刺激って大事ですわ」

ほんとに「鶴の恩返し」ですよ。間違いないですよ。

・・・春香、なぜ照明をピンクにしてる？

「雰囲気作りですわ」

夏美、何並べてるの・・・？

海の時とかの写真・・・。

・・・プロマイドにして売るな！うわ！！先生のも有るよ！！

「以外と好評よ」

・・・こいつら・・・、何の演出してんだ。

「あなたはこちらをお願い」

・・・握手券。一回¥500・・・って・・・。

後で呼び出しくらつぞ！

<「ブー」まもなく「ブー」開演いたします。「ブー」ごゆっくり  
お楽しみ「ブー」ください>

ブーって声かよ！

。。。って、俺まだ用意してねえ！

あ、ちゃんと音流してる。・・・

<寒く雪の降る峠、おじさんが家路をいそいでおりました>

あ、出番か・・・

「さむいのお、はやく帰ってばあさんと夕げにしたいのお・・・お  
や？なんじゃ？

おお、可愛そうに。狸のワナにかかってしまったのじゃな・・・つ  
て・・・」

何だ！このモジモジ君みたいな全身タイツ女！！・・・蘭さん？  
??

なんすか、その頭についてる赤いの・・・え？とさか？  
それじゃニワトリでしょ！。あんたほんとは鶴でしょ！

それにちよっと・・・、マズイでしょう！、ラインがバッチリで  
すー！！

「なんで〜！ウケてるよ！」

ウケでなく、みんな興奮してるんです！！！！

「ええつと・・・ほら、助けたから。たつしやでな〜！・・・、はやく引ッ込んでください！！他のに着替えてください！！！」

<おじいさんは家に戻り、鶴を助けたことをおばあさんに話しました>

「ばあさん、かえりましたよ」

「まあまあ、寒かったですわね。暖かいミルクティーをご用意しますわよ」

「ミルクティーって・・・え？・・・、かいちょ・・・ばあさんや、なんだか華やかな衣装なようだが」

「まあ、恥ずかしいですわ」

「・・・いやいやいや、少し・・・てか、すごく話に合わない激しさかと・・・」

「ここをこうしますと、ほら、光りますのよ」

「・・・ねずみの遊園地ですか！パレードの上の人ですか！」

「パフェもありますわ」

「・・・あの、ばあさん・・・」

「まあ、こんなに若々しい乙女にはあさんなんて。ひどいですわ。あなたより”1学年”先輩。”1学年”せ・ん・ぱ・い・なだけですよ」

「・・・はい。もう言いません」

<その時、戸口を叩く音が。とんとんとん>

「・・・とんとん・・・って、また声で・・・。はいはい、いま開けますよ」

ガタタッ

「こんにちはー！」

「うわー！！！！・・・なんすか！その格好ー！！」  
「鶴でーす！」

「・・・蘭さん・・・、浅草のカーニバルですか！」

「だって着替えるって瑞樹ちゃんが」

「言いました。言いましたが・・・、このシーンは人間でしょう！  
鳥ではないでしょう！」

「あ・・・・・・、鳥人間よ！」

「・・・どうぞ飛んでください。」

「はー、・・・芝居しよ。・・・あ・・・あのどちらですかの？」

「だから、鶴でーす！」

「・・・いいですから。もう、入ってください。あ、ブーツは脱いでくださいね」

「まあ、いらっしやい。ほんとうは私の役だった鶴の人」  
「鶴でーす」

「もういいですから・・・。で、何しに来たんですたっけ？」

「恩返しです」

「あゝ、そうですね。ええ、もう進めますね。まあ、とりあえず僕の娘ってことで桶ですね」

<おじいさんから受けた恩を返すため、M78星雲からやってきた・でなく鶴。

この日から娘としてここで暮らすことになりました>

「ねえ、ちよつち奥借りていい？」

「何ですか、鶴や。」

「ひ・み・つ・！ 覗いちゃダメよ！」

「・・・自身ありません」

バシッ！

「・・・イツツ、これ、ばあさんや。広辞苑はちよつとやりすぎじやろう・・・」

「まあ、こんな所に。危ないので片づけておきますわ。そして姉さんですわ」

「鶴・・・は障子の奥か。」

「・・・おい、バックライト消せ！！、音楽かけるな！！1  
1pmか！」

「あなたも好きねえ」

「かとちゃんか！」

<三日三晩の後、鶴は1反の反物を持って出てまいりました>

「おお、なんて綺麗な反物じゃ。ほれ、ば・・・姉さんも見てみなさい」

「まあ、私のように美しいですわ」

「・・・あたしの方が若・・・」

バシッ！

「まあ、こんな所に家庭の医学が。危ないので”同級生”の私が片づけておきますわ。」

「。。。姉さんも夏休みでだいぶ成長したようじゃのう。わしも気をつけねばのう。」

「うう、ヒロインに向かってひどい・・・。」

「それよりも、鶴や、なんだか少し・・・飾りが無くなって・・・てか、

だんだん露出多くなっているのじゃが、どうしたのじゃ」

「若いからしょうがないのよ」

「・・・意味解らないのじゃが・・・。

おうっと！！なんか客席から飛んできたぞ！？

これは・・・月刊ぜえくしい・・・。なにやら寒気がするのじゃが・・・。」

< 鶴はやさしいおじいさんと・・・おねえさんのために、また奥の部屋へ入っていった >

「ば・・・ねえさんや、わしわ心配じゃ。」

鶴がまた・・・とんでもない格好で出てくるのではないかと・・・

「ほんとうに、心配ですわ。少し胸が大きいからって、いい気になるですわよ」

「・・・いや、そうでなくて・・・。ねんさんが障子の向こうを見てくれんかの」

「いやですわ、あんな胸」

「劇が進まんで・・・お願いじゃ。・・・わしが見るのはちょっと怖いので・・・」

「10年後はたれまくりですわ」

「・・・あまりあぶないことは言うでないぞ。どこから月刊ぜえくすいが飛んでくるかわかんからの」

「・・・しかたがないので、わしが覗くふりで・・・」

「わ！まだはいてない！見るな！！！」

「・・・後が怖い・・・。履いてないって・・・なにしてるんだ？」

「見たわね・・・。」

「あなた、約束を破ったわね」

「・・・なんで春・夏・姉妹？」

「私たちは暗黒の魔道士。あなたの邪悪な心に取りついたわ」

「邪悪って・・・。あの・・・、鶴は？」

「もうだれにも止められないのです。この世界は、私たちのもの」

「今更くやんでも遅いわ。あの時に主役を私にすれば魔界から開放してあげたでしょう」

「さあ、思い知るがいい！オノレの愚かさを」

「待ちなさい！」

「何者」

「私は、月にかわっておしおきのセーラー・・・」

「会長・・・、光ってますね。LEDですね。エコですね」

「・・・ムーンよ！」

「見てたんだな・・・」

「これ以上、私の邪魔はさせないわよー！」

「あー、蘭さん。鶴の衣装でないですね。今度は何？」

「600万ドルのバイオニック・・・」

「あんたも年、ごまかしてるでしょ」

「・・・じえにーだ!」

「・・・・・・・・・・それ、ワンダーウーマンでしょ」

「さ、今ならこのお宝写真、お安くしますよ!」

「ほら、脱ぎたての全身タイツ付き」

「おお、お兄さん、粋がいいねえ、ズバツと大人買いかい!」

「おうさ!それならこのブーツも着けよう!」

「おい魔道士!客席でアヤシイもの売るな。」

「さ、皆さん、生活指導教師が来る前に逃げましょうね!。」

「「また来年!ばいばいきくん!」」

会長、なんか慣れてますね。逃げるタイミング。

通し稽古したのはなんだったんでしょうね。

なんすか?あの魔道士って・・・。

バイオニック・・・って。

え、まだスク水着てない?

ああ、そうですね、

おばあさんが月に帰る時に着てもらいましょう。

違う？

ああ、そうですか。先生にでしたか・・。  
それはすごく重い話でしたね。

え、サンバの衣装も売る？

ああ、どうぞどうぞ。ついでに中身も。

取り扱いには注意を入れといてください。P.L法にひっかかります。

あゝ、このまま帰っていいでしょうか？

ダメ？

ですよ〜。

おじいさんではなく、帰るのは鶴ですからね〜。

25 度胸だめし、肝試し（夏美）（前書き）

今回は双子姉妹の妹、夏美の心視点です。

## 25 度胸だめし、肝試し（夏美）

< 25 度胸だめし、肝試し（夏美） >

そう、もうダメかと思いました。

捕まっています。全ての忌まわしい秘密が、そしてこの幸せな生活が願わない方向に戻ってしまう・・・。

飛び込んできた白い色は・・・瑞樹くん。

幻を見ているようでした。

会長に呼ばれました。そして、はじめて私たちは走るのをやめて、何が起きているのか考えることが出来たのです。

口から出た最初の言葉

「瑞樹くんが！！——— お願いです！・・・瑞樹君を助けてください！」

会長は指さした方向を見ました。と、そのまま飛び出して・・・。

戻ってきた会長と瑞樹くんはとても痛々しい感じでした。

そして・・・、会長の顔に涙の跡が・・・。

「二人とも。大丈夫よ。心配しないで、今日はおうちへお帰りなさい。」

とても優しい言葉です。ただ、いつもの会長とは違って、悲しそうな顔をされてました。

会長の言われてた通り、私たちは忌まわしい記録を取り去ることができました。

これもすべて会長のおかげです。

そして、それが出来たのは・・・瑞樹くんのおかげ。

少し前、先生にお聞きした気持ち。これはやっぱりトラウマの反動では無いと思います。

瑞樹くん、瑞樹くん、瑞樹くん！

もう離れないんです。

二人で確認しました。春香も同じです。

こんな時は、嬉しいのと困惑とが混ざり合って困ります。

だって、同じ気持ちのライバルがこんなにも身近に居るのですから・・・。

・・・。いえ、もっと大きなライバルが居るのを知ってます。

鈴会長。・・・そして、おそらく蘭さんも・・・。

なんで、女である私がみても魅力的な先輩方が、

あんなに目立たなく、地味な人のことを……。とても、私たちが入れる隙間は見えません。

おかしい話です。この4人とも、うすうす気付きあっているみたいです。

そして、自分が前に出れないと思いつているのです。

だから……。今の関係を無くさないように、壊さないように気持ちを伝えない。

瑞樹さんは、そのことを薄々気がついているとは思いますが、信じていないようにしているみたい……。

4人の女の子が自分に好意を持っているなんてと。

ほんとに……。おかしい話です。

あの日、蘭先輩がお礼をしようと言いだしました。

とても良いことだとすぐに賛成しましたが、まさか……。キスするなんて。

そのことは、もしかしたらこの微妙な関係が崩れてしまうかもしれません。

しかし、あることに気付いたのです。

蘭せんぱいも、当然その危うさを思わないはずありません。では、なぜ？

一つだけ、答えを見つけました。

それは・・・、鈴会長を・・・、鈴会長のために行おうとしているのだと。

子供の頃、とても辛かった時にそばにいてくれた年下の幼なじみ。そして、大人になりかけの不安定な場所から、並々ならぬ努力の力を導いてくれた幼なじみ。

私たち以上に辛い目に有っている時、助け出してくれた幼なじみ。年下の幼なじみは、鈴先輩にとって全てになっているはず。

それなのに、自分からは決して言い出せない。求められないと決めつけている。

あまりにも見えすぎた痛々しい心を開放したいのだと。

そう、蘭さんの決断は、鈴会長が自分を取り戻すために言い出したことなのだ。

私たちに異存はありませんでした。

蘭さんが自分を抑えてまでやり遂げたいのでしたら、私たちも、その蘭さんの気持ちのためにするだけです。

蘭さんの作戦。

強引な理由でキスすることにしたのですから、鈴会長も黙って見ていないはず。

自分からキスしたい。告白したい。との気持ちを増幅させることに。

瑞樹くんも同じく、どうしても自信が持てないのでしたら、それ以上で巻き込んで

しまえば、本能で走り出してくれるでしょう。

だから・・・、私たちは、ただ一人に考える時間を作らせないことにしたのです。

ええ、最初からうまく二人がキスするとは思ってませんでした。

少し意識しあう気持ちが大きくなったでしょうか？そのことが重要なのです。

瑞樹くんが他のだれかとキスしたかもしれません。

きっとその相手は、もう二度とないだろう思い出をてに入れたでしょうね。

ちよつとだけ、神様がくれた幸運かもですね。

他のだれかがキス・・・の場合は、鈴会長の抑えている気持ちが揺れはじめていたはずですよ。

いきなりでなくて良いです。じつくりと、前にすすんでいかれましたら。

心からそう願ってます。

それにしても、蘭さん。

わたしたちと同じで、初恋・・・だと思います。

ほんとうに・・・好きになったんです。たぶん初めて。

親友の幸せを見たら・・・泣いてしまいかも——ですね。

## 26 恐怖の報酬

< 26 恐怖の報酬 >

「まあ、海の幸がこんなに」

「さすが採れたて新鮮が自慢の宿ですわ」

「刺し身に焼き物にいたれりつくせりです！」

「まあ、あたしがちよつと本気をだせばこんなもんちよろいぜ！」  
先生を見直したかね、諸君

「先生に話をもちかけて大正解でした！」

夏休み、七月の終わりの話をやつと落ち着いて言える精神になりました。

海水浴&温泉の旅で訪れた東北のとある海。老舗の旅館であります。  
小さいながらも風情の有り、静かに癒しを求める人々の隠れた人気  
スポットとして

けっこう有名らしいのですが、なんと、二宮先生の実家！  
そのような訳で格安お泊まりにありつけたみたいです！

なお、この情報は合流するまで一切知りませんでした。  
まあ、いつものことです。気にしません。

「ただな、只今アチコチ改修中だな、ちよつと不便かもしれないけど、我慢してな」

「とんでもないです！我慢どころか恐縮しっぱなしです！」

なんでも不備な部分の指摘をされたそうで、このかき入れ時に臨時休業中。

だから身内のこの団体以外、宿泊ナシだそうです。

少し安心。ぜったい何事もなく過ごせない方々ですから旅館のイメージに傷つけそうでしたので……。

「今日は両親しか居ないし、最低限のこと以外は自分たちですてくれ。布団とか」

「先生は旅館の後を継ぐなどされないのでしょうか？」

「うーん、……ツブしてしまいそうでな……」

「………なんだか解ります。」

「弟も居るけど、そっちもその気が無いみたいで……、いつかは私が婿取りしなくちゃなんだけど、……時間はまだタップリ有るし！」

「………先生、時間はすでにマイナス突入なのは……かと思われませんが。」

「若いの捕まえたら安泰だからな！」

「………自分は働く気、ないのですね……」

婿さん〃やとわれ旅館主人としか思ってない？  
なんか、そのあたりに敗戦の原因があるような。

「瑞樹ちゃん、どう？」

「……いろいろな状況から、非常に答えづらいです」

「おおっ！いつそのこと若い男限定の旅館にして、良い素材を手に入れるか！」

「……自分の欲望でツブすな。間違いないな」

「先生！まあ、ここはどうぞ！」

「悪いな！風呂あがりのビールは最高だぜ！あ、玲子ママも飲もうぜ！」

「あまり強くは無いので、少しだけ」

「……しかし……」

良くある若い性を引き込むビデオ出てきそうなくらい、フェロモン全開のお姉さん二人。

たった一人の男なんて気にしない……かのごとく、無防備な態度は勘弁して欲しいです。

思春期なのです。不安定な年なのです。妄想魔神が暴れまくりです。

「「「ごちそうさまー！！」」」

「「たべましたわ」」

「腹っぱいだー！！もう何も食えねえー！」

「こんなに食べたたら太ってしまいます。もう若くないのですから蓄積しちゃうし」

「ママは欲望に素直な人ですわ」

「ほんとに、美味しかったです！」

「いや、喜んでくれて両親も喜ぶよ！」

「じゃあ、僕はお風呂に行こうかと思えますので」

「あっそうか、さっき入れてないものナ！皆で行く？」

「・・・勘弁してください。倒れてしまいます」

改装中なので、お風呂ですが今は一つしか利用できないとのこと。  
女性陣が食事前に入っていました。

なので、自分はこれからです。なんか・・・、同じお湯に入るの、  
少しドキドキします。

「毛、探すなよ」

「そこまでフェチではありません」

露天風呂です！波の音と月が心地よいです。ほんとにゆったりと・・・。

なんだか・・・、だんだん眠くなってしまいます。

そういえば昨夜もろくに寝れなかったし、今日は海で疲れたし・・・

・・・

あれ？なんか声が・・・

気がついたら部屋で寝かされてます。

「・・・！えっ？」

「ああ、気がついた！」

「お、起きたか。」

「びつくりいたしましたわ。遅いので様子を見ましたら、お湯の中で完全に寝てましたですの」

「ええ、あ、スミマセン〜!!。ほんとに疲れてたみたいで……。ご迷惑おかけしました」

「いえいえ、しょうがないですわね」

玲子さんが笑って……。やっぱりお母さんですね。なんだか自分の子供に向かつての感じです。

……。え、皆さん、静かにトランプしてますね。  
……。静かですね。会話ナシですね。

我に返った時から気にしていることが有るのですが……。聞きたいけど聞きづらい。

「あの……。僕を運んでいただいたのは……」

「ああ、皆で運んだんだ!。やっぱり意識無い男って重いから大変だったよ〜!」

「ほんとうに。初めてしりましたわ」

皆で……。全員で?

「はい」

「あの、お風呂でしたよね。僕」  
「はい」

「塗れたまま寝かした・・・でも無さそうですね。」  
「はい」

「・・・裸でしたですね」  
「はい」

「・・・僕を起こそうとは・・・？」  
「・・・」

「全員で？」  
「はい」

「・・・何か・・・見ました？」

「まあ、恥ずかしいわ」  
「えへへへ！」

「私は教師だからな。恥ずかしがること無いぞ！」  
「お母さんですのよ。恥ずかしくないですよ」  
「・・・」

「身体も・・・拭いていただいたんですね」

「まあ、おほほ」  
「うふふふ！」

「教師だからな、触られても気にしなくて良いからな

「おかあさんですもの。大丈夫ですよ」

「……………」

「……なにか……感想は……」

「まあ、言えせんわ」

「立派だ！」

「教師だからな、生徒の安全を確認したたけだから気にするな」

「おかあさんですもの、成長は嬉しいものです」

「……………あんなになるのですね」

「……！だ……！！何した……！！」

「……………ぜつたいに面白がつている！完璧だ！

起こすどころか、皆を呼び集めたに決まっている……！！

「……………ああ、お母さん、僕はどんどん違う道を進んでいるので  
は無いでしょうか。」

女性を見る目が……………違う道へ……………。

「あの……………、寝てもいいですか」

「寝よう。疲れたから寝よう……………。」

「これから面白いのに……！！第2回暴露大会するのに……！！」

「寝かせていただきます……！！」

「瑞樹ちゃんはこの部屋使ってね」

案内されたのは離れの一部屋です。

「私たちと一緒にハズカシイのかしら」

「なにもしないのに〜!」

「そうですね、皆さん寝るまではなにもできません」

「・・・添い寝」

・・・最後の玲子さんの言葉、とても意味不明です。  
しかし、なぜ皆さんもゾロゾロ着いてくるのでしょうか？

「場所確認しないと、いざって時に困るじゃん!」

「・・・いざって、どんな時でしょう・・・」

「ま、いざって時ね!」

・・・

「ここは元々私の部屋だから、気にせず使ってくれ。」

「・・・、先生・・・。布団」

「ああ、私はベッドが苦手だな。いつのまにか落ちちゃうんだ」

「・・・いえ、そうではなく・・・布団が2組有りますが・・・」  
「だから私の部屋だって」

「・・・まさか、先生も並んどと?」

「いくらなんでも一緒の布団にでは解りやすすぎだろ」

「まあ、それでは先生もこちらで」

「……ずるい！」

「あら、もう一組お願いしようかしら……」

「……私たち小さいからひと組みでも可能」

「……ほかに部屋は？」

「無い」

「お願いします！僕に安らかな眠りを！」

「ああ、だから一緒に寝ようと思うのだが、イヤか？」

「安らかに出来ないかと。しかも布団の隙間もまったくないです」

「そうか、一人で寝るか？大丈夫か？」

「こどもではありません！」

「でもな……」

先生、窓のカーテンを開けます。

「慣れないとけっこうキツイぞ」

え、……。沢山の石の柱や木の棒が影になってみえますね。

ああ、そうですか。ここは墓地なのですか。

離れのウラは墓地でしたか。あ、なにか光るものが見えたような……

・。

うゝん、良くは解りませんが、柱の間に少し暗くなつた人影みたいなものが動いている気がします。

いやゝ、僕にこんな見える力あるのですねゝ！知りませんでした。冷房も無いのに涼しいです。少し震えてます。

「このあたりは土葬がデフォルトだ。嵐の後などはよく土から出る」

「・・・あの・・・先生」

「どうする？」

「・・・どうしましょう・・・」

「「闇の怨念が満ちているわ」」

「ママ・・・、私・・・少し怖い」

「あら、これはずいぶんとハッキリしたエリアですわ。鈴さんも苦手でしたものね。」

「だれかに抱きつきたい・・・」

「しょうがないなあゝ、私はもう慣れてるから一緒に寝ようと思っただけど・・・。」

皆で一緒に良い？」

「「「はい」「」「」」

結局・・・皆で一緒に寝ることにしました。  
ええ、男とか女とかどうでも良いかも。

・・・、ええい、しがみつくな！春夏！

・・・蘭さん！押し付けないうください！！・・・え？玲子さんでしたか

すみません・・・ではなく！！

「男の子って可愛いわ。私もそろそろ再婚を考えても・・・」

「玲子さん、男の子供がほしいのですか？男の人ですか・・・」

腕に・・・会長が・・・

すみません、しおらしく震えながらしがみつかないでいただけますか！

「守ってね・・・」

そのギャップに僕の脳がこわれてしまいそうです。

暑い・・・重い・・・

あ、いいですから、大丈夫ですから！先生！脱がさないでください！！

先生も脱がないでください！！！！

「瑞樹ちゃん、永久就職・・・どう」

「先生のご期待にそえなく、残念です・・・」

・・・てか、なんでこの狭く小さな布団で一緒に寝るんですか！！！！

皆で大部屋で寝れば良い話でしょ！墓地も無いし！！！！

え、戻るの怖い？・・・おしっこ？？

・・・どうぞ行ってください。蘭さん。

今日も安らかな眠りとは縁がなさそうです。

あゝ、取り憑かれた気分です。

早く・・・朝になって欲しい。

## 27 点と線

< 27 点と線 >

「私たちのクラスを見に行きましょう」

「ああ、ランパブだっけ？」

「……あんだ？ランパブ知っているのか??？」

鶴の恩返しかもしれない演劇が終わって自由の身になりました。  
できればここで開放されたかったのですが、どうやら会長が校内  
を案内したいみたいです。

「普通の高校生活してると思いませんか？」

「嬉しそうねー！リン！」

春夏の二人が前。会長、僕、蘭さんが後。

歩いていく前方にいる人は自然と左右によけいきます。

まるでどこかの病院での院長回診みたい。

こうやってメンバー全員での校内闊歩は初かもしれません。

ああ、僕のクラスメートもビックリしてますね。ほとんど校内でこ  
の会は知られてないはずですので、

「おまえ？この美人軍団に何混ざってるの？」でしょうね。

「……離脱したい。」

「着きましたわ」

「少し入っていいこう！」

会長と蘭さんのクラスはコスプレカフェですね。

けっしてランジェリーパブではありませんですね。

「残念かしら？」

「・・・少々」

えー、皆でコーヒー飲んでます。メイドさんやヒツジさん、大正八イカラさん、巫女さんなど、各種取りそろえられた感じですが、こちらの面々が揃って座っている席の方が明らかに目立つちゃってます。

「私も衣装のままくれば良かったかもー！即手伝える」

「あら、もじもじ君では違う趣向かと思われますわ」

・・・確かに。

「私のもじもじ君、みたかったかしら？」

・・・見たら一生無駄にしません。

そんな学園祭も終わり、会長の狂態も校内中知れ渡ったかと少し心配でしたが、

まったく八神伝説は不滅で、あいもかわらずマドンナの立ち位置を続けているようです。

今日も朝から下駄箱に有った手紙について、いろいろと返事を書いてるみたい。

蘭さん情報では、一応礼儀正しく返事するのが会長のポリシーだそうです。

文面は同じだそうですが・・・。

手紙の差し出し人は、皆さんその返信を家宝にしているとか・・・。

そして僕も一時噂にはなりましたが、すぐに元の普通の男子高校生としての生活になってきました。

はずなのですが・・・。

「これは・・・・・・・・」

帰ろうと下駄箱を開けた所には一通の封筒が。

「・・・・なにか、恨みでもかかってしまったのだろうか・・・・。」

正直な第一印象です。

あて名に自分の名があります。いかにも女性っぽいカラー文字です。そこに至っても、まだ不幸な予感しかしません。

とりあえず靴を履き替え、今日も招集がかかってますTMS基地へ向かいながら読もうと

封筒をポケットにしまいました。

この前、誤ってある女生徒のノートを持ち帰ってしまったことだろうか……。

いや、あれは翌日返したし、その時は何も怒った感じはしなかったはず。

それともたまたま廊下に落ちてた別の女生徒のジャージを届けたことだろうか？……。

まさか、僕が盗んで……とか思われている？

でもその後何も変な目で見られている気配もなさそうだし……。どれもこれも普通のこと、今の自分にはとても怖いことに思えてきました。

うん、ここは覚悟を決めて中を読んでみよう。

遊歩道の木陰になったベンチに座って、先ほどの封筒を開けてみました。

<今日の4時、栗山駅前公園の噴水まで来ていただけませんでしたしうか。お待ちしてます>

呼び出しです。学校ではなく、離れた公園。いったい誰が、何のために……。

栗山駅とはここから5つ目、自宅最寄り駅です。ただし自宅は少し離れてますのでいつも自転車での駅へ出てます。

「利用しているのを知ってるのかな……」

「そうと考えるのが自然ですね」

「学校では無い場所指定は、顔見知りに見られたく無いかと」

「……！！春夏姉妹！！」

「まだ呼び方を訂正していただけないようですわ」

「もう少し可愛らしく読んでいただきたいのですが」

「僕も同じく……また気配なしでビックリいただきました」

ほんとに！この二人は……

「それで、どうされるのでしょうか？」

「4時と言いましたら、もうあまり余裕無いかと思いますが」

「……ああ、忘れてました。……てか

「見てたのでしょうか……」

「「ええ」」

まったく……、いつから居たのやら……。

「下駄箱でしばらく固まっていた時からです」

「いろいろと自分の行いを悔やんでましたですね」

「……また、声に出てました？」

「「はい」」

ほんと、気をつけよう。

「それで、その呼び出しを受けられるのですか？」

「返事は合ってから決められるのでしょうか？」

「・・・一応、理由も知りたいですし、返事もその自分がなにをしたかによってと思いますが・・・」

「・・・なにかあまりかみ合ってませんね」

「ええ、自分がその場になにをしに行くかが理解できてないかもです」

「なにを・・・って、それが解れば対処したり、お詫びの言葉などを考えられますよ」

「・・・にぶいわ」

「・・・鈍感」

「？　いつたいこの二人は何を言っているんだ？」

「・・・。まあ、そうでしょうけど。頭の回転は早くないです。」

「すみません、解りませんが一応こちらを確認してきますので、会議に遅れる旨を

会長に伝えておいてください。」

「解りました」

「会長に報告しておきます」

とりあえず、指定時間に遅れそうなので駅へ向かうことにしました。二人は・・・そのまま携帯で連絡をしているみたいです。

栗山駅は新しく開発された住宅街のために出来ました。駅回りもまだ育ってない街です。

待ち合わせをしたいと思います、丁度よい施設も少ないですので、駅前公園の噴水前は妥当な選択ではあります。

その公園に着いたのは指定時間より15分前でした。

・・・なんだか、以前にも同じようなことがありましたが・・・。

ええ、TMS入会テストで散々振り回されました。

どうも封筒での指示されることが多い気がいたします。

ざっと周りを見ましてもそれらしい人影は見えません。

とはいえ、いつ現れるか解りませんので、一応きちんとした態度でベンチに座って待つことにしました。

なにか誤ることが発生しました時に、誠意ある態度はとても重要になるはずですので。

「そういえば、雑誌の発売日、今日ぐらいだったような・・・。本屋に寄ってくるのを忘れてしまった。」

田舎町だから、書店入荷する数も少ないし、逃すと遠出して買いに

いなくちゃならないけど・・・  
明日まで残ってるかな・・・」

ええ、誠意ある態度なんて5分持たないんです。すぐに別の思考に走ってしまうんです。

ぼんやり座り、地面あたりを見ながらアレコレ思考が・・・。

ああ、女の人の足だ。奇麗な歩き方だな。きっと性格も上品で良いんだろうな。

あれ、なんかこっちに歩いてきているような・・・。

顔を上げて少し見てました。確実にこっちを見ながら近づいてきます。

真剣なのか怒っているのか・・・、にこりともしませんので顔見知りでは無さそうですが、

それでもこっちを一直線に見てます。

目の前で止まりました。なんでだろ？なんか聞きたいことでも？

・・・あ、

そうだ！呼び出されたんだ！！

この人？・・・この制服は同じ高校の人で・・・同学年かな・・・？  
この人に自分はなにかしたのだろうか？？

・・・思い出せない・・・。

でも呼び出されるくらいだから・・・。

どうしよう。。。先に誤ろうか・・・。

「私、E組の四谷 美香と言います。」

「・・・はい！・・・僕はC組の一条 瑞樹です」

「・・・自己紹介・・・」

また静かになってしまった・・・。

四谷・・・四谷・・・、やっぱり知らない・・・。  
とにかく、まず・・・誤ろうか・・・。

「単刀直入にお聞きします！」

「！はい！」

「好きな人・・・、居ますか！？」

「・・・????」

え、なぜ僕は初対面の人に好きな人の質問されるのだ？  
これ、なにかのゲーム???それとも調査??

「曖昧ではなく、ハッキリとお願いします！」

「！！・・・」

有無いわさない勢い！！どうしよう！！好きな人？

ええ?・・・ムツねえ・・・鈴会長?・・・蘭さん?・・・春夏姉妹??  
その人たちのこと好きか?との質問でしょうか!?

ああ、周りの女性と言えば、玲子さんや二宮先生も最近よく合います。

お二人も含めて”好きか?”でしたら、皆さん”好き・・・”に入りますし・・・。

「お願いします！」

「!!は・・・はい!。居ます!!」

怖い!なんだか解らないけど、解らないとか答えられないとか、拒否できない迫力が怖い!

とにかく、なんか言わなくちゃ!と、思わず「居ます」と言ってしまった。

・・・でも、自分は誰を好きと思って言っただろう・・・。自分でも解らない。

想いながら出た言葉でないし・・・。

「・・・・・・・・解りました!ありがとうございます!」

「あ・・・、いえ」

四谷さんは、歩いて来た方向へ行ってしまいました。

・・・・・・・・ええと、・・・今のはなんで僕、責められてたのでしょうか・・・・・・・・。

・・・解りません。

気がついたら・・・1時間ベンチに座ってほうけてました。

なんで・・・、僕は責められてたのかの原因がどうしても思いつかなくて・・・。

・・・春夏姉妹なら、なんか簡単に謎を解き明かしそうです。

明日、もう一度四谷さんに聞いてみようかな。



## 28 判決

< 28 判決 >

静かです。誰も居ないのでしょうか？  
開いてるので入ってみようか・・・。

「遅くなりました〜！」

もう一度声かけましたが、やっぱり静かです。  
部屋の電気は灯っているけど・・・、なにかあったのかな？

「あの〜・・・え!!！」

皆さん居るではないですか!!  
ですが、黙って僕を凝視して・・・。

「・・・あの・・・」

「まずは・・・」

「そこに座ってください」

「・・・は・・・はい」

なんだか今日は有無いわせない指示が多すぎです。  
とりあえず言われた通りに・・・正座。

「では、お聞きしましょう。」

「この時間までの状況をです」

あの、春夏さん？・・・。門限を過ぎた理由を聞く親御さんのような口調です。

「お話されたことについての報告をお待ちしています」

「事の内容によっては、私も覚悟しますので」

。。。なんか、皆さん目が怖いです。

「えと・・・、よく解らないのですが・・・、僕に好きな人が居るか調査しているみたいで・・・」

「・・・やっぱり」

「・・・瑞樹ちゃんに、そんなイベントきましたか」

「・・・」

「・・・あの、皆さん・・・？」

「・・・それで!？」

「え?・・・それで？」

「「答えは?」」

「あ、・・・はい。居ますと答えたのですが」

「「「・・・えええ~~~~!!!!!!」」」

「うわ!!!!いきなりなんですか!!!!」

ビックリしました!思い切り頭突き食らうかと思う勢いで4人が飛んできました。

「だれ?!だれのこと!それ!!」

「今更だまってませんですわよね!」

「断言しちゃうくらい当然な気持ちなの?!!」

「いいから言いなさい!」

「・・・え、言うつて・・・何を」

「「「好きな人」」」

「・・・思い浮かんだのは会長・・・」

「!!!!やった!!!!」

「「「う・・・」」」

「とか蘭さん・・・」

「「「・・・???」」」

「とか春香さん夏美さんとか・・・」

「「「・・・」」」

「あ、あと玲子さんと二宮先生もとか」  
「「「・・・・・・は~~~~」」」

「・・・・瑞樹ちゃん・・・・」  
「私たちは・・・」

「とお~~~~つても悲しいです!」  
「・・・・ぬか喜び・・・返せ」

「・・・・今度は恨まれているような目です。  
やっぱりマスカッタのしょうか・・・」

「とりあえず、居るっていったわけね」  
「あ、はい。」

「それで、お相手の方は?」  
「えっと、解りました・・・と言われて帰っていかれました」

「・・・・それだけ?」  
「はい」

「くいちがつてる?よね」  
「ええ、おそらく」  
「完全にですね」

「「「は~~~~」」」

「瑞樹ちゃんは、なんで呼び出されたか解ったの？」

「それが、さっぱりで・・・」

「だよね」

「鈍さに怒りを覚えますわ」

・会長、怒ってますのでしょうか  
「ハッキリと」

怖い！！マジに怖いです。目がすわってます。

「あのね、下駄箱に異性からの封筒入ってたらしい」

「ラブレターですね」

「普通は」

「・・・」

「はあ・・・、そうなんですか」

「そうですね」

「見たことないので、今度誰かにみせてもらって勉強します」

「・・・、解ってる？」

「スミマセン、あまりよく解らないので・・・」

「瑞樹ちゃんへのラブレターですわよ」

「僕ですか・・・。僕へのラブレターですか。そうでしたか・・・」

「・・・・・・・・えええええ〜〜〜〜!!!!!!」

「あゝ、今解ったんだ」

「僕へのラブレター!?!?だれが!!!!!!」

「あんた!逢ってきたんでしょ!!」

「え!?!いつですか!!!!」

「さっき呼び出されて、話してきたんでしょ!!」

「。。。。あ!!!!!!、あの公園で?」

「ダメだゝ。ほんと、この鈍さに私たちは苦勞しているわけだ・・・」

「

「でも!え、ラブレターって・・・。どうしましう!?!?」

「どうするも・・・、さっき答えてきたんでしょ」

「え?なんて?」

「ふってきたんでしょ!!」

振る?ふる?だれが?だれを???

「あゝ・・・、もしもし?」

「どうしましう」

「とりあえずほっておいて、こっちの話を固めようか」

「そうですね」

皆さんなんか話しあい始めたようです。

僕は思考停止のまま、言葉が無意識に耳に入ってきます。

「まずはその娘が今後どう出てくるかだわ」

「フラれても追いかける、ですか？」

「あきらめない？」

「でしたら、なにか良く解る既成事実で防御が良いのでは？」

「そうね、でも何が良いのかしら」

「だれかとすでに付き合っている」

「そう見えるだけでも充分効果的ですわ」

「となると、いつも一緒に居るのを見られること」

「なんだか姑息なようですが」

なんとも不自由な皆さんです。・・・とは無意識な感想です。

「でも、肝心の瑞樹ちゃんのお持ちは？」

「今なら混乱中です」

「夢みてたことにしちゃえば良いのでは？」

「そうですね。一発かまして・・・」

「しかし、告られてからお持ちが入ることも有るし」

「あら、それは経験なのかしら？」

「ああ、蘭さんなら」

「アリジゴクですから」

「あゝそう！言うわね」

「「いえ」」

「まあ、不潔だわ」

「おっと、リンには言われたくないな」

「あら、なにかしら？」

「会長は涼やかに食べちゃいそうです」

「人生経験も豊富ですし」

「あなたち、だいぶこなれたみたいですよ」

「ほんと、キスもしたことないのにね」

「今すぐ出来ます！すぐできます！！」

「なんで・・・初ラブレターで固まっている人のために・・・あたしたち」

「ラブレターなら私の方が沢山いただいてますわ。」

「しってます」

「私たちだっていたいでます」

「あら、男性が苦手だったのでは？」

「苦手でももらってます」

「やっぱ本人が正気に戻る前に記憶を消しちゃおう！」

「でも、相手の方って誰なのでしょう？」

「あ、えっと、瑞樹ちゃん！相手の名前はなんていうの？」

「四谷 美香さんです」

「答えましたわね」

「ああ。答えた。」

「きつと、寝ている人に話すとしゃべるってのと同じでは？  
あれ、良くないって聞いたけど・・・」

「催眠術みたいなものでしょうか？」

「そうかもな」

「なら、今のうちに好きな人の名前をすりこんでしまえば・・・」

「「・・・」」

「えええい！抜け駆けはするぞ！！」

「そうです！無理やりはいけません」

「無意識にですわ」

「それよりも今はラブレターの話です！」

「四谷さんって知ってる？」

「もしかして、あのE組の・・・」

「あ、すごく綺麗な？」

「え？美人なの？なにそれ、反則じゃん！」

「蘭さん、反則って・・・」

「どれくらい美人なのかしら？」

「ええと・・・たぶん1年ではトップクラスかと」

「あ、あの弓道部の！？」

「はい、その人が入ったら部の見学者が倍になったとか」

「なんでまたそんな上玉が！」

「ほんと・・・、つくづく想定外な男です」

「・・・ただでさえ面倒な敵が多いのに、またですの・・・。」

「「面倒な敵って・・・」」

「まあ、恥ずかしいわ」

「とりあえず、あまり近づかないようにして忘れさせる！」

「そうですね。美人で性格良ければ貴女たちでは難しいでしょうし」

「ほお、自分の性格は良いと？」

「恥ずかしいわ」

## 29 未知との遭遇

< 29 未知との遭遇 >

下駄箱に封筒が入っていた。

・・・これって、デジャブー？

昨日は確か栗山駅前公園に呼び出されました。

で、E組の四谷さん？に告白された？・・・

でも、気がついたらTMS基地に居たし、会長はじめ皆さんが

「夢でも見たの？」な反応だったし・・・。

でもリアルすぎなんです・・・。

訳わかりません。

ああ、四谷さんって随分美人な評判の人ですよ。たしかにチラッと見ましたが、

でも面識まったくナシですし、その夢？では、座っている僕の前まで来て・・・。

で、告って、僕がふって？・・・で、帰っていった・・・。

終始お一人でしたし、都合の良い場所だったし。

まあ夢とは思えません。もう言つのやめよう・・・。なんちゅう妄想してる呼ばわり決定ですから。

で、なぜに今また封筒がここに・・・

あゝ・・・、僕の名前が表に有るだけです。これも同じですね。なんか中も同じような気がしてますが・・・、

やっぱり。・・・噴水前に4時ですか。

とりあえずまた夢なら実害ないし、かるくいつてみましょう！

「あゝ・・・、また雑誌買うの忘れました。夢でも同じこと思ってたはずですが・・・」

「おまたせしましたわ」

「・・・あゝ、会長！？なぜここへ・・・」

「あら、ラブレターお出ししましたのを読まれたから一条君もきたのでしょうか？」

「・・・あ、会長が書いたのですか！」

「恥ずかしいですわ」

「・・・えゝ、なんかボクってますので頭まとまりませんです。

「昨日、ラブレターをいただいた”夢を” 見られたと嬉しそうに言われてましたので、

ここは正夢にと考えましたの。」

「あ・・・、僕、そんな状況まで言っていましたか・・・」

「ええ、それはとてもよい”夢” だったようですわ」

「なんか・・・お恥ずかしい妄想を披露してしまいました」

「いえいえ、私もラブレターを書くの初めてでしたので、それはそれはドキドキさせていただきました。」

「いままこうして自分でも解るくらい顔を火照らせてしまってます。」

ああ、なんかシナツとしないでください！見とれてしまいます！

「一条君。好きな人いらっしやいますか？」

あ、これも夢と同じだ……。まさにデジャブー？  
今回登場したのは会長でしたが……

「あ……。ああ、居ます」

「まあ、どれはどなたなのかしら……。？お答えできますか？  
なんでしたら……」

あ、左手で僕のシャツをつまんで、右手の指を僕の口に……。  
なんだ！？やっぱりこれも都合の良い夢？

「恥ずかしいのでしたら……。そつと小声でも構いませんですわ。  
……」

p i p i 〜〜！！指導〜〜！！

????なぜか遠くで笛の音がしたような……。  
どこかで柔道とかしているのだろうか……？

会長、しばし下を向いて「ちっ」  
?……今、舌打ち？

「さあ、これからデートいたしましょう！楽しみですよー！」

あゝ、それからですが、僕の自転車で二人乗り↓少し離れた川の土手で

会長お手製のモンブランと紅茶でしばし談笑。

ああ、まさに高校生ペアの帰り道を堪能いたしました。

夢？・・・やっぱりこれも夢でしょうね。自転車は重く感じましたが・・・

「・・・重く？」

いえ！甘く・・・です！甘い感情を感じました！です。

良く解らないまま、また翌日。

有るんです。封筒が下駄箱に・・・。

なんでまた同じ夢を何度も見るのでしょうか？

これって何かの暗示？夢占い??

「まったゝ!？」

「ら、蘭さん！なぜまたここへ!？」

「ひっどゝい！勇気出して告白した乙女にそんなこと言うゝ!？」

「え・・・乙女・・・」

「・・・何か？」

「ほんとに、純情な乙女の蘭さんに！すみません！失礼なことを」

「でしょゝ!!さゝ!!行こう」

「???どこですか？」

「決まってるじゃない〜!!デートよ!自転車よ!~!」

あれ?デートで自転車っての決まり?これも僕の夢の暗示?

「それ〜!」

「!!わ!!、蘭さん、抱きつかないでください〜!」

「え〜、落ちちゃうじゃん!~!」

「だって、む・・・当たるんです!グニツと!~!」

「あら〜?いやなの?~?」

「・・・いやではないのですが・・・刺激ありすぎていろいろと困りますので」

「ええ〜?何があ〜???」

p i p i p i p i ~ ! p i ~ ~ ~ ~ ! ! 反則 ~ ~ ~ ! !

あ、また笛の音。

・・・これもセツト?

「・・・ちっ  
」

・・・舌打ちですか。ここでもですか・・・。

え〜、川の土手です。蘭さんお手製の・・・焼きそば?  
「食べてね〜!!ベニシヨウガもたっぷりよ〜!」

ええ、おなかも減ってますのでとても嬉しいです。

でも、弁当箱の形のまま固まってますね。冷えちゃったのですね。いつ作っただろう？これ？

「よし！これから二人柔軟しよう！」

「・・・？なぜ？？」

「食後の運動！密着感も刺激的よー！！」

「刺激は・・・ねれなくなりそうですのでお手柔らかにお願いします」

えー・・・二度・・・いや三度目はおそろく・・・

「・・・春香と夏美」

「あら、私たちでは不満ですの？」

「わたしは少々不満ですわ」

「あの・・・一応聞きますが、なぜこちらに？」

「「ラブレター」書きましたの」「

「・・・ですよ。二通入ってましたので予想しておりました」

「まあ、私のことを妄想されてた？」

「恥ずかしいこととかいやらしいこととか・・・」

「字が違いますね。そういうことも得意ですが、今はまだ明るいので」

「だいたい、なぜ私たちだけペアでなのでしょうか？」

「いつも一緒だと思われては心外ですわ」

「ああ、僕も思いました。しかも、封書の指定が違う所でしたら困りました。」

ええ、二通とも同じ内容でした。．．．でも、それならば一通にまとめても．．．なんて考えません。  
怖くて言えません！

「「命拾いされましたわ」」

「「さあ、一緒に行きましょう」」

「あの．．．、川の土手？」

「もちろんです。」

「「こちら辺では何もないでしょう」」

「ああ、確かに．．．。でも．．．。」

．．．．自転車ですよ。お二人を乗せるのですよね。．．．どうやって．．．

子供の座席をハンドルに付けるとか？？

「瑞樹さん。今、地雷踏みましたね」

「よくよく注意された思考されたほうがよろしくてよ」

「．．．．気をつけます」

結局、自転車は置いたまま歩いて行くことに。  
左右の腕にしっかりと抱きついてます。

えっ……、蘭さんでは無いのですでなんとか・

「よくよく……」

「注意された思考で」

「……もうしません」

おにぎりです。今日はまた素朴なお弁当。

左右から差し出されるいろいろを一つの口に詰め込むのはいかな  
ものかと……。

あゝ！！嬉しいのですが、このイベントは何ナノでしょうか……？？

そういえば今日は笛鳴らなかったな……。

なんだか犬のうなり声みたいなのは聞こえてましたが……。

「「では、これから寝ましょう」「」

「……は？」

「お昼寝ですよ」

「添い寝です」

あゝ、食後ですね。眠くなりますね……。

二人が解らない……

「「おやすみなさい、お兄ちゃん」「」

マジその設定も解りません。

金曜日です。月曜から続いた封筒。

昨日で終わると思いましたが・・・が、入っております。

あゝ・・・なんでしょうか？少し香ります。香水？？

ああ、ウラにはキスマーク？いきなり濃厚な封筒に見えてきました。  
なんとなく重い気がします・・・。

場所の指定も、なぜか今回は学校・・・。保健室・・・。

時間は6時・・・？

ああ、帰っても良いでしょうか・・・。

カメラ所持のこと・・・とも書いて有ります。

えゝ・・・、僕の夢って・・・もうそのレベルを欲しているの  
でしょうか！

それとも・・・甘い一週間の罰がついに・・・。

今回は自転車いらなそうですね。

「待っているわね・・・」

2階の渡り廊下。

見られてますね。読んだことをしっかりと。目から言葉って通じる  
んですねー！

先生・・・。ボンテージの時間なのですね。

### 30 本能寺

<30 本能寺>

時に噂は意思をもったように広がるがあります。

普段は名前を聞いても特にきにもなかったのですが。先週、夢での

出来事以来、なにかと耳にすることが多くなってきました。

「美香さん、だれかに告白したらしい」

「それもふられたとか」

「それが本当ならどんな相手だったか見てみたい」

そうです。1年生マドンナと言われています四谷美香女子。ほんとに、先週まででしたら気にも留めない名前だったのですが・・。

「ご紹介しますわ。1年生の四谷 美香さんです」  
「よろしく願います」

ここは会長の部屋です。そして、来客者は、あの四谷さん。なぜ、今ここに彼女はいるのでしょうか。会長とお知り合い？とか・・。

「瑞樹さん、先週はどうもありがとうございました」  
「はい……」

先週？夢での話？僕は美香さんと面識あるのでしょうか……。

「美香さんは、いろいろとお聞きたいことがありますとのことで来られました」

「はい、先輩はじめまして皆さんに」

「じつは私、先週初めに瑞樹さんへお話したいことが有りまして、お逢いさせていただきました」

……初め、月曜日？

「お話の後、自分の気持ちをなかなか整理できず、翌日にも同じ場所へ出向いたのです」

……翌日……は、火曜日？たしか、会長と僕はお逢いしました。

「同じ時間、同じ場所で……。その翌日も、またその次も……」

水曜日は蘭さん、木曜日は春香と夏美。

「理由を聞かせていただけたらと思ひまして、鈴さんをお願いいたしました。」

・・・月曜日からの出来事は・・・まるでらせん階段のように少しずつの違いで繰り返す時間軸みたいでした。  
最初と最後は別の話みたいでしたが。

月曜日。それは四谷さんに呼び出された日。そしてある質問だけさえた日です。

「そう・・・見てたんだ」

「毎日同じ時間で・・・、ただし逢うのは別人」

「私はそのことを先ほどお聞きしましたの。それでこちらにおいていただいたのです」

「お話は・・・、一条君にも聞いていただかないとダメなのでしょうか」

「もし不都合でないのなら・・・」  
「そう」

「あなたに逢った後、一条君は私たちと会いました。一条君は美香さんの

話を理解されてませんでした。」

「・・・理解してない？」

「はい。お話をお伺いしたこと、怒らないでくださいね。一条君も理解してないため

話されたと思います。

本人もそのような軽はずみな人ではありません。」

「でも、そのことと翌日からのことが繋がりません」

「そう。そこなのですが……。これを話すのが一条君にとって良いかどうか……」

「……？僕に？ですか……。」

なにかあまり良くないお話でしょうか……。

「このさい黙っててもいたしかたありません。私たちの気持ちです」

みんなの気持ち？……会長や蘭さん、春香夏美の……？？

「私たちは皆、一条君……、瑞樹ちゃんのことを守りたいのです」

「……？僕を守りたい……」

「瑞樹ちゃん……。瑞樹ちゃんは……。」

会長「……。」

「バカなんです」

「……は？」

「美香さんにも先ほど言いましたが、さっぱり理解されてませんでした」

「あ……お聞きしました」

「なぜか。．．それは、瑞樹ちゃんが女恐怖症で男と過ごすのが好きだからなのです。なので女性にはバカなのです」

[illegible]

会長~~~~!!何いってるんでしょう!!

「結果、美香さんからの言葉を理解することも、しよつとも出来なかったのです」

「そ．．．そんな．．．。ゲイ？」

ちよおおおおつ・・・と待つてくさい！！！！

こ……声が……でません……！！！！

全力で否定しなければならぬこの場面で！！！！

．．．．．ら．．．蘭さんに抱きかかえられて．．．と言うか、首．．．  
入ってます！！

春夏！！口と鼻ふさぐな~~~~！！！！苦……苦しい……

「ゲイ……では無いのです。でも、これは心の病。」

「……つまり、女の子とは……話せない精神状態だと……」

「そうです。」

・ ・ ・ ・ ・  
あ ・ ・ ・ ・ ・  
何か ・ ・ ・ ・ ・  
空から ・ ・ ・ ・ ・

「そこで、私たちは瑞樹ちゃんを救いたい・・・と思ったのです。美香さん、あなたに告白されたのと同じことを繰り返す。それも毎

「回違う女性と・・・。」

「それは・・・、女性恐怖症のリハビリ・・・？」

「そうです。同じことを何度も繰り返す。同じことですので安心感が心にゆとりを持ちます。」

「自然と女性への恐怖心も消えていくのでは・・・と」

「私は、あることから瑞樹さんのことを考えるようになりました。この気持ちは・・・初めてでした。」

「勇気を出して・・・伝えたくもありました。それが・・・瑞樹さんにとって、瑞樹さんの病のせいで伝わってなかったのです・・・、私も一緒に、瑞樹さんを助けたいとおもいます。」

「美香さん・・・。ごめんなさい、とても不快なお気持ちにさせてしまいましたこと」

「いえ、私の方こそ、なにも知らなかったとは言え、たいへん失礼なことを・・・。」

「今言われましたこと、ほんとうによろしいのかしら？」

「はい、ぜひお手伝いさせてください」

「わかりました。一緒に瑞樹さんを救いましょう。でも、しばらくは告白できませんよ」

「・・・はっ！！・・・死ぬかと思った・・・。」

「か・・・会長！僕はゲイではありません！！」

「一条君。わかってますわ。そのことは大丈夫です。私たちは皆解ってますわ」

「・・・女恐怖症でもありません・・・。女性が少し苦手で」

「瑞樹くん。」

「はっ！？・四谷さん」

「・・・わたしも・・・、これから私とも、お友達になってください」

「・・・へ？・・・あの・・・僕と？」

「はい！ぜひ！」

一瞬気を失ってて理解出来てません・・・。

会長は・・・いつも通りまともに説明していただけなさそうです。  
他のメンバーはさらに無理でしょうし・・・

なぜ、四谷さんと友だち宣言だったのか？？？ですが・・・。

・・・結局、僕の近くにまた美人の女性が増えたみたいです。  
・・・ああ、じつはさっき死んだのかな？そうかもしれない・・・。  
ここは・・・あの世？

「美香・・・って呼んでくださいね！」

「これでうまくまとめましたわ」

「とりあえず抜け駆け横取りされるのは避けられたんだ。」

「あんな強敵、かないません。」

「しばらくは安泰です」

あゝ・・・、連合組んだんですね。

しってますか？今日の見方は明日の敵・・・とか・・・。

あ、すみません。無意識の言葉です。

翌日からよく僕のクラスへ遊びに来るようになった美香さん。

当然周りは大騒ぎです。二年の美人、そして一年の美人と、次から次と

はべらかしている地味男！・・・と。

ところが、その騒ぎも有る時いっさいなくなりました。

敵視する目も・・・。

なぜだか解らないのですが、ホッと一息です。

時に噂は意思をもったように広がることがあります。

あの、美女を何人もかかえこむ地味男の正体。

それは・・・ゲイ・・・だと。

### 31 潮騒

< 31 潮騒 >

「ねえ、この軽便って何？」

「あ、はい。これは普通より小さめで貧弱な規格の鉄道です。」

「なんて読むのこれ？」

「けいべんです」

「……大便の反対？」

「違います」

「……便秘の反対？」

「それも違います。排泄物である便……から離れてください」

英語ではナローゲージ。ナローは狭い、ゲージは幅。

線路の幅などが狭い鉄道規格を言います。

詳しくはホームページで……で、どこの？

で、この蘭さんとの会話って何？なのですが……。

10月の土曜日、僕は久々に鉄道模型イベントに来たのです。

軽便鉄道模型祭。年に一回、模型愛好者やメーカーが集まって開いているお祭りです。

特殊な分野だけに、愛好者も若い人が少ないかわりに、上級ベテランが揃っています。

僕の好きなモデラーも何人か参加されてますので、できれば作品を

ナマで見ようかと。

会場は同好の人でいっぱいでした。間をぬって模型作品を一通り見た頃、蘭さんからの電話が・・・

「瑞樹ちゃん！やつほー！何してる〜？」

「あ、蘭さん！僕は今ちょうど模型イベントに来てるところです。なにかありましたか？」

「ねえ、そのイベントってどこ？」

「あ、えつと・・・目黒です。」

「目黒？・・・目黒って渋谷と近い？」

「ああ、たしか2駅だったかと思います」

「ほんと〜！！！！ラッキー。じゃあ、私も行くから場所教えて〜！」

「・・・へ？・・・蘭さん？どこですか？」

「だからし・ぶ・や！。目黒ついたらまた電話するから〜、道教えてね〜！じゃ〜！」

・・・なんで蘭さんが・・・。

数分後、目黒駅からほぼ電話つながっぱなしでの道順誘導で目の前までやってきました。

「来たたよ〜！説明ごくり。で、何見てたの？」

「はあ、ここで開催されてますイベントです」

で、冒頭の会話になったのです。

「じゃ！見ようか！」

「えゝ・・・、蘭さんが・・・？」

「何？見られちゃ不味いとかなの？やっぱスカトロ？」

「・・・いえ・・・、どうぞ。入場料¥500かかりますよ」

「学割は？」

「ありません」

先ほどより若干すいてる会場を、蘭さん先頭で歩いていきます。

「なにこれ？天空のラピュタだって・・・。あ、見た見た！最初に空から落ちてきた女の子を受け止める所だ！」

「それは、その場面をジオラマで再現したんです。ほら、トロツコとか」

「こっちはすごい崖。なんだかネズミの遊園地にある乗り物みたい」  
「ああ、ビックリさんマウンテンですね。似てますね」

「わ、ケーキの上を汽車が走ってるゝ！お菓子の国みたい！」  
「鉄道模型のアートですね」

「なんかテッちゃんのイベントとか言ってたからあんまり期待しなかったけど、すごく面白いゝ！。

いる人も子供はほとんど居なくておっちゃんばっかねゝ」  
「蘭さん・・・声、大きいです・・・」

冷や冷やです！すごく浮いてます！！蘭さん制服だし・・・。コミ

ケとかだつたら馴染んだんでしょうが。

あ、なんか蘭さんに電話が入ったみたいです。キリが良いのでいったん外へ出て一休みです。

ほんと、少しの間で精神的に疲れました……。

「は……、面白かつた……！来年はみんなも連れて来よう……！」

あのメンバーですか！？

………、すごく……、勘弁かものですが………。

「あのね……、瑞樹ちゃんにお願いが有って……。」

「どうしたんですか？」

「え……と、じつは今日さ……、競技会あったんだよね……。で、終わって電車のつてたら……寝ちゃってね」

「あ……、それで渋谷ですか？」

「そうそう！渋谷で降りたの。で、ついだしちよつと見てたら……、電車に荷物忘れてたの思い出したのね」

「あ……それは……。」

「それで、今見つかったって電話きたんだけど……、ちよつと遠いの。」

「え？どこまでいっちゃったんですか？」

「え……、海の方」

「それは……辛そう」

「で、取りに行こうと思うんだけど……お金貸して？」

「え？持ってなかったんですか。」

「手持ちは少しで、あと荷物の中」

「それは……、ますます災難でした。」

ほんとに、災難・・・と言いますが、蘭さんらしい？

「じゃあ、僕も行きます」

「え？なんで？遠いんじゃないよ？」

「ええ、でも今から行ったら帰りはもっと遅いですよね。蘭さんが心配ですから」

「うわ～！瑞樹ちゃんやさしい～！！私のこと心配してくれてる～！！」

「あゝ、なんか遠いことに怒り始めて駅員さんに難癖つけそうで・・・」

「瑞樹ちゃん、言うようになったわね」

「鍛えられました・・・」

蘭さんに聞いた駅は、マジ遠いでした。いったいどれくらい渋谷で遊んでたのか・・・？

その間荷物のことすっかり忘れて。

荷物を無事受け取った頃には、帰るのにギリギリの時間です。

「蘭さん、もうすぐ電車きちゃいます！急ぎましょ」

「うゝん、もう疲れた～！！眠い～！！」

「子供ですか！！」

「眠い眠いねむいの～！！」

マジ子供です。

「ねえ、明日も休みだし、このあたりで泊まっていこう!」

「は? そんなの無理でしょ。だいたいこの時間で、しかも高校生を泊めてくれる旅館なんてありませんよ」

「えゝゝゝ」

しばらくブツブツ言っていました。突然どこかに電話をかけてます。なんかよく聞こえませんが、借りは返すとか一生のお願いとか・・・??

「よし! じゃあチャレンジしよう!。あの旅館がまだ開いてそうだし!」

「え? マジですか? 失敗したらもう帰れませんよ!?」

手をグイグイ引っ張られながら一応忠告です。

「あ、瑞樹ちゃんは弟だから、よろしく!」

「は? 弟?」

ガラッ

「あの、すみません! お願いがありました」

中からおかみさん?らしき人が出てきました。

蘭さん、なにやら電話の電源を少しだけ借りたいと交渉中。

電車の時間が迫っているのに電池切れ、乗る前に家へ連絡したいとか・・・。

おかみさん

「まあ、急がなくちゃ! どうぞこれ使ってね」

ああ、優しいです。

で、蘭さんさっそく充電しながら電話を。

・・・声聞こえます。電話相手の。

何やら遅いから心配だとか、どこか見つけて泊まってこいとか・・・  
あ、蘭さん弟も一緒だとか言ってます。

おかみさんを見た蘭さんが

「あの・・・今日ここに泊まることができますでしょうか？」

と聞いてます。

おかみさん、蘭さんとこつちをチラッと見て少し考えて

「部屋はあるけど・・・ご兄弟？」

「ハイ、電車の忘れ物を取りにきたのですが、帰りが遅くなつてしましまして・・・

あの、母も出来ましたらと言ってまして・・・あ、電話をかわってほしいとのことなのですが・・・」

おかみさん、蘭さんの電話に出て話してます。うなずいて、あ、了承してるみたい。

「解りました。お母さんからもお願いされましたのでどうぞあがってください」

「ありがとうございます。助かりました」

「そうなの、競技会で・・・まあ、弟さんも一緒に？仲良いのね。それにしても、ここまで荷物取りには大変だったわね。今日はゆ

つくりと休んでね。

「明日も出る時間は気にしないで。疲れがとれてからで良いですからね」

部屋に通されて一通り話をしました。

ええ、荷物取りにきてこの時間はあつてます。

その後のことは・・・？

そして・・・、弟である僕は当然同じ部屋です。似てないのに・・・でなく、

どうするんですか～～～！！！！

「えへへ～～！不倫旅行～～！」

「・・・だれか結婚してますか！。しかし・・・蘭さんも大胆な嘘を・・・」

「見た通り真面目な女の子だからね～～！優しくしてもらえるの！」

「・・・はいはい。ところで、さっきのアレ、誰ですか？」

「え～～・・・、リンちゃんです～～！」

「え？会長！？・・・声聞こえたけど解りませんでした」

「でしょ～～！何度助けてもらったことか」

「・・・あまり聞かないようにします。」

「さあ、お風呂行かなきゃ！もうギリギリだし！」

「ご飯はおにぎりとオカズだけしか無いみたいですね」

「食べれるだけ良しでしょう！」

お風呂から出てくると、布団とおにぎりが用意されてました。

「あとビール有れば満足なんだけどね」  
・・・あんた、高校生だろ

日付が変わる頃には食事も終わり、今日撮影した会場の様子をカメラでちらつと確認。

「あ、カメラ持ってたんだ。」

「ええ、一応いろいろと撮りました。」

「ねえ・・・あたしを撮ってくれない？」

「え？いいですよ。浴衣姿ですか？」

「うん、なんだか記念にしたいくて」

「バックは・・・夜なので外は無理ですね。」

「見えなくてもいいから、窓開けて外をバックでがいいかな」

ここは海が目の前です。松の木の向こうには青い海・・・なのでしょうが・・・少し残念。

蘭さん、浴衣姿が色っぽくてちょっとドキドキです。

何枚か撮った後

「一緒に撮ろう！」

と言われて、カメラを固定しつつ蘭さんのとなりへ。

「えへへ、新婚旅行！」

「のりのりですね！こっちはドキドキです」

「じゃあ、もう一枚撮って寝よう！」

「そうですね」

用意してまた蘭さんの隣へ。

「リンとは前に撮ってるのよね」

「え？・・・」

・・・

「これでおあいこ！ほんとに顔をこっちに向けようかと思ったけど・  
・自制した」

・・・・固まりました。

「ほら！寝るわよ！」

「は・・・はい」

波の音だけがします・・・。寝れない・・・。ドキドキが止まらない。

蘭さんはもう静かになってる。すっかり寝たのかな・・・。

今さらながら、同じ部屋で、横に寝ていることが気になってしまっ  
て・・・。

バサッ

・・・・お願いします。布団めくれています。暗い中で妙なラインが浮  
き彫りになってます・・・。

寝相・・・直してください。

・・・・

「見たい？」

「・・・わざわざですか」

「正解！」

「………寝ます」

「あら……残念」

モハ101……くは201……さは301……  
朝に……、早く朝になってほしい……。

### 32 夜の大捜査線

< 32 夜の大捜査線 >

「眠いです・・・」

「昨夜はすごかったからね」

「あゝ、ツツコミも出来る元気ないです」

もう拷問状態。本人はあの後瞬時に眠ってしまいましたが、こっちは蘭さんのいたずらにもヘトヘト、複合された疲れがピーク・・・。  
浅い眠りにしか入れなかったです。

「今日はもう何もないんだよね」

「はあ、そうですね。あとは帰って寝ようかとおもいます」

「そんなに興奮して寝れなかったの？」

「おかげさまで」

「あたしはいつでも良いって言ってるのに。安全日だし」

「すみません、ツツコミスルーさせてください」

「・・・ツツコミ、する？」

「・・・」

「あのね、あたし、ちょっと途中下車して寄り道しようかな・・・と思うの。」

だから、先に帰ってて」

「あ、なにか買い物とかですか？」

「んん・・・、見物・・・かな」

なんかいつもとは違う笑い方が気になりました。なんでだろう？

「あの、おじゃまでなければ付き合いましたよ？」

「眠いんですよ？」

「外歩けば目もさえそうですし」

「ふん……。じゃ、一緒に少し散歩しようか！」

途中下車したのは旅館の駅から2つ目。まだ松林の海岸が続いているくらい近くでした。

海岸にはもう泳ぐ人は居ませんが、散策する家族や

釣りを楽しんでいるグループなどでけっこうにぎわっています。

蘭さんは駅からの脇道をすり抜けて気持ちの良い松林に入っていきます。

「なんか、まったりとして心地よい時間だわー！瑞樹ちゃんとも一緒だし！」

「ええ、ほんとうに。気持ちも和らぎます」

「あつ！また写真撮ろうよ！もういたずらしないから！」

「いたずらナシは少し残念……。とか冗談ですが、蘭さんの写真は素直に撮りたいです」

蘭さんは昨日のままの制服です。いつものエロ話しなければ無条件で魅きこまれてしまいます。我が校2年生のエンジェルと言われるだけのことはあります。

歩きながら、時には波打ち際で。そして松林の中で。自然なそぶりの蘭さんを撮影。  
これって、カメラの腕関係なく、間違いなくベストセラー写真集にできます。

「あそこに座るね！」

しばし松林の中を歩いたところ、蘭さんはひとつのベンチを指さしつつ近づいていきます。

丁度、遊歩道になっている両側に互い違いにあるベンチで、座ると海の方ではなく、松林の外側を向くことになります。

「瑞樹ちゃんは自由に散策していいから！」

「そうですか……。では少し堤防のほうまで行ってみようと思います。」

堤防は数百メートル向こうに見えています。釣り人の脇を僕はゆっくりと先端まで行き、  
遠くまで見晴らせるようになった松林を撮影したり見たりしてました。

近くにあった自動販売機で飲み物を2本買い、蘭さんにも届けようと蘭さんのベンチへ  
向かします。姿を確認するところまで来たのですが、  
表情が……。すごく真剣なのに気付きました。

なにか一点を見続けています。

目線の先をたどってみますと松林の外に一軒の住宅。そこでは家族らしい人影が

なにかワイワイ賑やかに工作をしているようです。

なぜか解りませんが、僕も動けないまま、蘭さんと家族をぼんやりと見続けました。

どれくらい時間すぎたのでしょうか。家族は家の中へ入り、蘭さんも目線を回りに戻し始めたのでゆっくりと近づきます。

「すみません、遅くなってしまいました。

蘭さん、コーヒーと紅茶のどちらが良いでしょう？」

「あ！あつりがとー！じゃあ紅茶！」

横に座りながら缶をさしだします。

蘭さんはいつもの感じに戻ってます。

蝉がまだ居るとか、松くい虫つてのがはやっているとか・・・、普通に話をふってきます。

ふいに、横から腕に抱きついてきました。

「ちよつと眠くなつたから、休ませて」

腕に埋めた頭は、そのまま僕の胸に強くおしつけてきます。

僕は・・・どうすれば良いかも解らないので、

そのまま黙って座ってました。

「さっ！帰ろう！」

時間は解りません。

蘭さんが言うのにあわせて僕も立ち上がり、  
駅の方へ歩き出しました。

電車で隣り合わせで座ってます。ここからだとな時間ぐらいかかり  
そうです。

「今度眠っても、どちらか起きれば良いので気が楽だわ」

「で、二人で寝過ごしたらどうでしょう？」

「その時は、山の温泉宿に泊まるう！。今夜は寝かさないわよ」

いつもの蘭さんです。

ほっとしたら、ほんとに眠くなってきました。肩には蘭さんが寄り  
掛かってます。

半分夢心地の中

「瑞樹ちゃん、ありがとう」

聞こえたようなきがしました。

<次は金十、かねとです>

「……あ、そろそろ着きそうです」

「え？瑞樹ちゃん下りるの？」

「はい！ついなので、会長にお土産わたそうかなと」

「おみやげ？そんなの買ってたの？」

「ええ、干物ですけど」

「・・・真面目ねえ」

「蘭さんはどうします？」

「あゝ・・・あたしは、今日はやめとこうかな・・・。  
なんとなく危険な香りがするし・・・」

「・・・？危険？」

<お出口は左側です>

「あ、着きますので下りますね。ではまた明日にです！」

「うん！ありがとね〜！」

電車がホームに滑り込んで・・・止まる？・・・会長？？

開こうとしているドアの外に、仁王立ちの会長がいます！？

え？どこかに行くのでしょうか？？

「あら、一条君、奇遇ですわ。まあ、蘭。2時間ほどお待ちしてましたわ」

「あ！あゝ・・・リン！ご機嫌うるわしく・・・？」

「ええ、今とても麗しくなりましたわ。さあ、お二人とも行きましよう」

「へ？会長、どこへ？」

「私の部屋へですわ」

見えないアームで捕まったように、会長の後を歩く二人。

「ターゲットA、およびBを発見。確保完了。基地隊も撤収のち合流のこと」

会長……、今の電話は何かの作戦でしょうか……。

私服、ジーンズ初めて見ました。ああ、何でしょう？ロープお持ちですね。

あ、どこからか現れたのでしょうか？四谷美香女子ですね。やはりジーンズが似合ってますね。

「一度着替えさせていただきませうね」

美香さんと出ていかれた会長は、数分後に黒い短パンに履き替えてきました。

美香さんはミニのスカートです。

「こちらのほうが窮屈で無いのです」

……会長。あんなに隠してた蜂の絵が見えます。

「やべー！リンったら本気だ……」

なんすか！その不吉なツブヤキは……！！

やがて春夏姉妹も部屋に入ってまいりました。

今日は学校無いのですが……、みなさん集合ですね……。

「ああ、皆さんに甘いものをご用意いたしました。お食べになつて下さいね」

ああ、これはおそらく会長特性パフェですね！すごく美味しいので大好きです。

・・・が、二つだけ色が違うような・・・

「蘭さん、一条さん。さあ、遠慮なさらずにどうぞ食べてください。会長自ら差し出してます。あ、スプーンに盛って・・・はいっアーンのポーズ・・・」

「・・・あの、会長。・・・怒っていらつしやいます?・・・」

「まあ、恥ずかしいですわ。これを食べていただけましたら少しだけレベルが下がるかもしれせんわ」

・・・あつ、蘭さん一気に食べ始めた〜!!・・・なんか目をつぶって耐えてますが・・・。

「さっ、一条さんもうどうぞ」

・・・

「では、お話をしましょう。」

会長の・・・、お話・・・。怖い・・・。

「一条さんはたしか模型の方へ行かれたとか？」

「は、はい！イベントを見に行きました」

「まあ、それはそれは楽しかったみたいですネ。」

「はい。楽しかったです・・・」

「でも・・・、昨日のお話ですわよね」  
「・・・・・・・・・・」

「蘭さん、競技会はいかがでした？」

「え！あ！、なかなか良いタイムを出しまして」

「まあ、それはそれは！」

「えへへ・・・・・・・・・・」

「で、そのあとどなたかとお遊びになったようですが」

「あ・・・、リン、ありがとう。助かりました・・・」

「それは何よりですわ」

「それで、その方は今どちらに？」

「え・・・・・・・・・・」

「たしか、弟さん・・・との設定でしたわ。蘭さんより若い方なのでしょうか。」

「え・・・・・・・・・・」

蘭さんがリン会長に根回ししてましたので、まあ内容はバレバレですね。

ああ、周りの女性はじいじと見てます。パフェにも手を出されな  
いまま……。

「一つお聞きしたい重要なことがあるのですが。……解りますね  
?」

「はい！そこだけはきちんと！」

ジューツと見つめる皆さん。

「……。解りましたわ。……でも、そこだけ……の前はいか  
がかしら?」

「あ、ああ……。」

会長、そこで僕の方に向き直ります。

「一条さん、いろいろと楽しめたのかしら?」

「え? あゝ、はい」

「それは何よりですわ。そうそう、そのバッグの中は?」

「あ……、これは会長にお土産で買いましたもので」

「あら、とても嬉しいですわ。何かしら……。まあ、干物ですわ」

「はい、丁度地元のお店が」

「あら、海が近かったのですね」

「…………あ……はい」

「そのカメラにはいろいろと写っているのかしら？」

「……………」

「……！」

「見させていただいても？」

「…………どうぞ」

「まあ、いつ撮られたのでしょうか？綺麗な蘭さんの写真がいっぱいですわ。」

「まあ、ほんとに」

「まるでなにかの写真集のようですね」

「あら、風景もいろいろと有るんですね」

「とても良い写真撮れてますわ。ほんとに……うらやましいですわ」

「……………」

あ…………、弁護士呼んでもよろしいでしょうか。

会長はそこで一枚の写真を見続けてます。

「蘭…………、いかれたのかしら」

「…………、うん、近かったから……」

「そう・・・」

それはベンチに座っている蘭さんを遠くから撮った写真です。  
あの時、なぜか一枚シャッター押してました。

その写真を見た時、静かに蘭さんに問いかけた感じです。

「蘭さんを信じますわね。これはここまで。さあ、皆さんも食べてください」

「やっと落ち着きました」

「もうフライングはしばらく勘弁ですから、蘭さん！」

「めんごー！」

ふー！緊張が解けました。

蘭さんと宿泊したのはバレバレでしょうが、我慢しておいて良かった・・・と実感。

「理性を我慢されました一条さんからの土産は、皆さんで分けましょう」

男の苦悩を解ってらっしゃいます・・・。

「ところで・・・一条さん、模型の写真は無いのですか？」

「ああ、これは前の日でしたのでこちらに」

「まあ、細かい模型ですわね」

「すごい作り込みだな」

「人がいっぱい。。おじさんいっぱい」

「次回は誘ってくださいね」

・・・あゝ、やっぱり？

皆さん連れて行くの、気が重いです。

「」「あら？」「」

「・・・これは・・・」

「？・・・！！！！」

「随分となまめかしいお姿ですね」

「みごとにフェロモンを表現している」

「・・・浴衣、風呂上がり」

「そこだけ・・・の前がいっぱいありますわ」

「神に誓って・・・終点には行つて無いです」

「」「・・・！！！！」「」

「・・・ずるい」

「「・・・私たちもコレ欲しいです」「」

「・・・まあ」

・・・、会長以外の方々は再び目つき変わりましたですね。

あ、会長。部屋にある写真立て、仕舞い始めましてね。

なにか立場が悪くなるものでもあるのでしょうかね。

「だって・・・私も欲しかったんだもん」

あゝ蘭さん、可愛らしくいわないでください。

あちらの方々に油そそいでますので。

### 33 秋祭り

<33 秋祭り>

「コンテストですわ」

「・・・は？」

「来週、金十商店街のお祭りがありますの」

「・・・ああ、神社の祭りにあわせたアレですね」

「そこで、ミス&ミスターコンテストがおこなわれます」

「ローカルなコンテストですね」

「我がTMSも参加したいと思います。」

「・・・」

ああ、会長また変なスイッチが入ってしまいました。

「有力な素材を揃えております我が会です。それでも油断は禁物ですわ。」

たしかに有力な素材ばかりです

「そこで、全員での出場を考えております。調査班から報告おねがいしますわ」

「参加は各個人とグループとなっております」

「個人は男性、女性。グループは2人以上での参加です」

春夏さん、会長のサポートもしっかりと板につきました。

「そうしますと、会としてはグループ参加ですね」

「そうとも限りませんの」

「それぞれの皆さん光る個性があります。ただし、その個性もただ集まっただけでは有効には働かない場合があるのです」

「なるほど。会長と春夏姉妹のイメージ、蘭さんと美香さんのイメージとなりますね」

「・・・一条君、その根拠はなにかしら？」

「・・・？、なんとなくだったのですが・・・、違いましたでしょうか。」

「Cクラス、Eクラス？」

「？・・・車？」

「“普通” か “豊か” かですわ」

「すみません・・・ほんとにただイメージで、ウラありませんです」

注意：美香さんは豊かです。

「あ、でも・・・、蘭さんと二宮先生もどこか通じているかも・・・」  
「ほう？・・・さて、その意味は？」  
「・・・いえ」

「あと、隠し選考として、ベストカップル賞があります。」  
「男女ですか？」  
「基本的にはです」

「ゲイ？」  
「違います」

「そのそれぞれの優勝者には、商店街各店舗の割引券。」  
「そして各部門とも賞金10万円となります」

「身近だけどなかなか賞品だねー！」  
「しかし、それを集めると莫大な資源となるのです」  
「あゝ、それが狙いなのですね」

「そこで、今日はコンテストへ向けての作戦会議を行いますわ」

なるほど！一番強豪なのがグループ部門かも。

個人部門は華となるでしょうが、参加する方も充分な度胸と自信が必要でしょう。

それに比べ、グループだと皆で共有する〓集団効果で気楽に参加できます。

また選考基準も綺麗や恰好良い以外の部分、楽しい、明るい、存在感などが

効力をもつてきます。

これはなかなか難しい人選になりそうです。

「まずは、個人部門の人選からはいりますわ。ただし、皆さん自分からは  
言い出しづらいかと思われますので、ここは異性である一条君からの意見を基に考えたいとおもいますわ」

・・・え〜〜〜！、ここで皆さんの魅力を分析して言え・・・と・・・  
怖い・・・。あとが怖い。

「あの・・・、あくまで一般的な意見としてでしたら・・・」

「もちろん、そのことはわかってますわ」

「・・・あとで・・・怒りませんか？」

「そんなことはありません・・・ですわ」

「では言います。皆さんはハイレベルな部分での比較になりますことをあらかじめ言っておきます。

我が高校のマドンナ、エンジェル、フェアリーなどの異名持ちですので」

・・・あ、なんか少し喜んでいるみたいです。

しかし、僕はこれからこの異名を持つ人たちのランキングをするんですよね・・・。

なんちゅう愚か者なのでしょうね。他から見たら「死ぬ」ですね。

「どの部分を魅力として見るか・・・なのですが」

・・・なんか、また皆さん。目が怖いです。ほんとに死ぬかも。

「春香さん、夏美さんの場合、個々でも充分妖精といわれる力をもつてますが、

やはり双子の威力を存分にだされた方がよいかと思います。」

「私たちはセットのまま出ると」

二人とも目が怖い。

「おふたりとも、そんなにニラんだら一条さんが泣いちゃいますわ」「そうだぞ、あくまで瑞樹ちゃんとしての意見じゃないと思えば」

・・・あの、泣きそうなのはあたりかもしれません、  
会長も蘭さんもなんか喜んでません？

「あの、続けても・・・」  
「もちろんですわ」

「次にスタイルでの魅力ですが・・・」  
「ちっ」  
「おほほほ！」

「・・・言いたくねえ！！ほんと、全然意見として聞いてない・・・」

「蘭さんは・・・、その・・・充分な能力をお持ちです」  
「えゝ！えへへゝ！そうかなゝ」

「「「・・・このエロ牛・・・」」」  
→・・・僕ではないですから！

「また、おそらくですが・・・、美香さんも・・・その魅力的なスタイルかと」

あああ、皆さん美香さんの上から下まで睨んでいます・・・。目が怖いです。

「私の・・・前に見た？」  
「いえ・・・、見てません・・・。想像で・・・」  
「想像・・・・・・・・想像で・・・・・・・・、いや・・・」

美香さん・・・・・・・・、赤くならないでください！！妄想とかではなく、たった今  
そうなのかな・・・と想像したことですので！！

・・・会長・・・、さつき春夏をなだめた言葉をそっくり言わせてください。

顔が・・・見たこともないヤンキーです。僕、泣きそうです。

「すみません・・・、続きを・・・。」

「・・・どうぞ」

・・・声のトーンがガツツリ下がってます~~~~。

「たいして・・・、会長のすらりと延びた身長、全身からの知的なイメージ、

セミロングの黒髪、いわずと知れる整った小顔は清純な女子高校生イメージで

校内一かと感じてます。」

あゝ、会長泣きそう・・・僕よりも先に泣きそうです。

皆さんもくやしそうですが、無言でうなずいています。

「そして再び美香さんなのですが、じつは美香さんも会長に続く知的イメージを

おもちです。なおかつ弓道部だからかものですが、キリッとした正義感も。

もちろん、美人なのは全校生徒の知るところです。

結果、蘭さんのセクシーな部分と会長の知的美人の部分足を足したイメージです」

あゝ、ますます赤くなって下向いちゃいました・・・。見ててドキ

ッとします。

・・・会長・・・、蘭さん・・・。僕、殺される前に帰っても良いでしょうか。

「なにになになに！私ってエロいけどバカッぽいってこと!？」

「わたくしは頭力チコチの凹凸なし女と？」

あゝ・・・、だからなぜそこまで極論になるのでしょうか・・・。  
よかった！、美香さんの所で「若いのも」と付け加えなくて・・・。

「で、誰がいった？」

蘭さん、もうヤケになってますね。

「その、僕も解らないんです・・・。美香さんの魅力はそうなのですが、魅力を魅きたてる

には、反対側、言い換えますと、マイナス部分になりうる要素も重要かと思われます。

会長ですと、すこし小悪魔的な部分。蘭さんは開けっ広げで落ち着かない活発さなどです。

それは美香さんには無いので、このあたり審査員がどのように見るかかと・・・。」

なんか、お二人納得したのかどうか、微妙な顔してます。

「まあ、しかし・・・、冷静になると、ほんと見てるね、私たちのこと。」

「ほんとうですわ。一条君の言っていることは薄々自分でも解りますし、

なにより他の方のイメージが納得ですから」

「ところでさ、春香と夏美は最初に除外しちゃったから聞いてないけど・・・」

「そうですね。きいてみたいですよ」

「聞きたい」

美香さんまでこっちを見てます・・・。

「分析が正解か解りませんが・・・。彼女たちは見ての通り双子としてのイメージが

強く出てます。なので、他の方からは個別の魅力まで目が届かないかもしれません。

じつは、同じに見えて微妙な違いがあります。

春香は一応姉となっている分、妹を想う気持ちが行動の中に出るところがあります。

自分だけでなく妹も一緒に・・・でなくてはならない。

たいして、夏美は妹である自分をよく理解してます。一歩ひいた気持ちがあり、

なにかある時は姉をたてる。そして、姉は先生であり目標である。

おたがいを立て、敬い、あこがれることで自然と強いつながりになっていると思います。」

「この魅力はなかなか見えることが出来にくいので、一時的なコンテスト向けではないかと思えます。

性格と外見はさきにも言いましたが、十分な魅力をもってます。少しあどけなさの見える

全体と、大きな目や人形のような髪。もしも自分に娘がいる審査員でしたら、有無いわずに選んでしまうでしょう。」

春夏は黙って下向いてます。聞きたいとは言え、自分のことですから恥ずかしいのかも・・・。

「なるほどね。そんな差が瑞樹ちゃんには見えてるんだね」

「ほんと・・・、憎らし人だこと」

「それぞれの魅力か・・・。一人を選べたっていても・・・無理なのかもね」

だれにともなく蘭さんがつぶやいてます。

「コンテスト、出るのはやめますわ。私たちには無理そうですもの」

「会長、もうひとつご報告が」

「隠し選考のベストカップル賞ですが」

「キス選考があります」

「」

「では、ベストカップル賞の出場者選考会議をはじめますわ」

・・・会長・・・。帰ってもよろしいでしょうか・・・。

## 34 旅

< 34 旅 >

「テストも土曜日までで終わるね。今週の日曜とか予定してるの?」  
「そうですね、久々に写真を撮りに行こうかと思ってます。」  
「鉄道?」

「はい、ちょうど現役を引退する車両がありますので」

最近よく美香さんと昼いつしよに食事したりしてます。春香や夏美もたまに入りますが、同好の方（主にアニメ）とも集まっているようですので

週に1度くらい。美香さんとは2〜3度ですので、かなりの頻度です。

放課後は弓道部の練習であまりTMSには参加できないようです。

周りもだいたいこの光景に慣れたようで、美香さんを眺めて楽しんでいる

愛好者には喜ばれているようです。

ただ、その寛容な心には、ある人物がゲイであるとの情報が大きくかかっています。

本人の知らない話です。

「ほんとは土曜日の午後から行く予定なのです」

「テスト終わってすぐですか?」

「はい、知り合いの別荘・・・とは言っても小さな小屋ですが、

そこに泊まらせてもらって、翌日朝から撮影しようかと」

「一人で？」

「なかなか付き合ってもえらえる仲間も居ないので……」

そうです。残念ながら、鉄道趣味を話せる知り合いが未だ居ないのも寂しいです。

そのかわり以前では皆無でした異性の友人は沢山できました。

「あの、私もついて行っていい？」

「え？・・・、だって鉄道見に行くだけで、全然観光地には行きませんけど」

「ええ。邪魔もしないし、ただついて行くだけす」

「そんなこと言う人、初めてですよ。旅が好きとか？」

「キラ伊じゃないですけど・・・、瑞樹くんの楽しいってのが見たいと思いました」

「なんか・・・、後で幻滅されそうです」

「ダメ？」

「何もないですよ」

「ダメ？」

何故？ほんとに幻滅が心配です。

「良いですけど・・・、後でクレームつけないでくださいね」

「了解しました」

「では撮影は日曜日だけにします」

テスト最終日。午前中で終わりました。

美香さんと打ち合わせしようと教室を出たら、丁度むこうから。

「待ち合わせを決めようとやってきました」

「あ、僕もその用件でした」

「何時にしましょう？」

「早いですよ。始発に乗りますから5時集合でしょうか」

「え、それでは夜になっちゃいます」

「そんなにかかりません。2時間ぐらいです。」

「？そうしたら着くの8時ごろになります？もう電車も終わりになるのでは？」

「・・・いえ、そこから撮影はじめますが」

「夜って走るの？」

「・・・あの、行くのは日曜日ですよ」

「え？でもこの前土曜日からって」

「あ、その予定でしたが、美香さんも行くので明日日帰りです」  
「？なんで？」

「なんでって・・・、美香さん泊まりになっちゃいます」

「はい。そのつもりでしたが」

「・・・それはマズイでしょう！女の子が男と外泊って！」

「え？もちろん家にはちゃんと言ってますよ」

「・・・僕と行くと？」

「ええ。・・・いやだった？」

ごくごく自然に言われる内容では・・・ないよう・・・なんてアホなこと

考えてないで・・・頭整理・・・、整理、

「普通、怒られるでしょ？」

「私は隠さないから信頼されてるのか？それとも放任主義かしら？」

・・・放任主義ってのはないだろうけど・・・オープンな家なのですね。

好きな人が出来たらすぐ報告しそうです。

「報告しました！」

・・・ああ、たっぱり。・・・あ、そして好きな人が居るんですね。

「とにかく、早くいきましよう！」

「あ、でも僕、明日からの予定だったから」

「ダメ？」

「・・・手配します」

一度帰宅した家で、初期計画どおり今日から行くとだけ言って

機材と簡単な着替えを持って出てきました。

美香さんとは前に日替わり告白された公園で集合です。

「私の家もこの近くですよ」

「そうだったんですか」

「瑞樹くん、この公園で私と逢ったのですよね」

「は……聞いてましたか。恥ずかしながらそんな夢をみたよう  
で……」

「夢……なのね」

「男子高校生のはかない夢と流してください」

なんかつまらなそうですが、僕としましても夢なのがたいへん勿体  
ないことで……。

「これからのことは現実ね！」

「あ、はい。……たぶん」

正直、また夢みているのかも……と思っていますが……

夢でもこんなスペシャルなでしたらすばらしく幸せなことです！  
堪能しなくちゃ。

電車でおおよそ2時間。山に囲まれた小さな集落の無人駅で下りま  
す。

今夜寝る小屋はここから歩いて15分ほど。小屋には自転車もあつ

て、

以前ここをベースにしてアチコチ撮影しました。

美香さんとは今後の撮影予定を話したり、食事は美香さんが作ってくれるとか、

近くに小さな温泉があるとか、ココまでの間にいろいろと話してました。

こころなしか、学校の雰囲気とも違って少し子供っぽさがあります。

「昔話にできそうな山あいの風景だね。俗っぽさなんて一切無い」

「ええ、僕もその普通の日本風景が好きで、電車の撮影以外でも何度か来てるんです」

「食料調達しなくちゃね」

「あ、お店は駅前しかありませんので」

そうです。百貨店と看板がでているよろずや1件だけ。

「じゃあ、私が買って先に行ってるね！」

「あ、はい！お願いします」

この駅で、日が暮れるまでの間に2本通る電車を撮影する予定を話しましたら、

美香さんは夕食を作るとかで、事前に小屋の地図を渡してあります。楽しそうに行ってしまいました。

少し山道を登ったあたりにカメラを設置。電車が来るまでは暇です。

線路は築堤になってて、ぽつんと小さな駅。その周りは少ない平地  
いっぱい田んぼ。

前後は山になってますので、まるで切り取った模型のような風景で  
す。

「なんで、美香さんと一緒に来てるのかな？」

ほんとに不思議なことです。最近では会長ほかTMSメンバーの女性  
陣にもすっかり

慣れました・・・いえ、振り回されるのにも順応してます。

それは有無をいわさない状況に流されているのですが、今回ののはち  
よっと違います。

僕のいつもの生活に、なぜか学年一番の美少女が居るのです。

「好きな人はほつといて大丈夫なのかな？・・・。夢だったら僕が  
その男なんだけど、

まあ、残念ながら夢は夢だし」

遠くで音がしました。山の向こうから電車が近づいてきたみたいで  
す。

山あいの日没は早いのですが、今ちょうど良い光線が広がっていま  
す。

今回の遠征、良い写真が撮れそうです。

2本目の電車を撮り終え、静かに戻った山あいの風景を数カット。  
夕陽に浮き出る部分と山の影とのコントラストが印象的です。

撮影しながら歩いて小屋まできました。美香さんは無事着いてたみたいで、  
窓から明かりが見えます。

「只今かえりました」

「あ、おかえりなさい。満足できるの撮れた？」

「ええ！想定外でした。紅葉には少し早いのですが、今の季節は光線が良いです」

「ほんとに楽しそうですね！その顔、見れて良かった」

・・・なんか、一人興奮してるのが恥ずかしい？

あれ？こんな感じ、前にもありました。遠い昔。

ああ、ムツねえと電車を見に行った小学生の頃の思い出と似てます。

「・・・、なんか、料理がスゴイのですが・・・」

「内容はシンプルなんですよ。ただ見栄えの良い感じで揃えてみました」

「いやいや、これは・・・。焼き物、揚げ物、煮物って・・・シンプル？

「そうだ、お風呂が解らなくて・・・、瑞樹くん入りたいでしょ！」

「ああ、伝え忘れてました。ここ薪風呂です」

「あのなんかスゴイの、やっぱりお風呂なんだ。」

ええ、スゴイ・・・とは、ほとんどドラム缶みたいな桶の風呂で、

薪を燃やして入るんです。なので手間かかるんです。

「なので、いつも近くの温泉使ってます。今日やってるかちょっと見てきます」

少し奥側に湯治場みたいな温泉があります。時期によって開けるので、

いつも一番に確認してたのですが、すっかり忘れてました。

「あゝ．．．、明日からか．．．」

張り紙には今週は今日までお休みと．．．。

今夜は風呂ナシだな．．。美香さんに悪かったかな．．．。

帰って報告後、さっそくご飯いただきます。

「やっぱり百貨店？にはあんまり無かったのね。でもおばあさんがとってきた

野菜とか山菜とかいっぱいあって。だからそっちメインのご飯なの。

「ああ、それで野菜づくしですね。でも料理がいろいろあってビックリです」

「いろいろとおばあさんに食べ方教わったの。それを作ってみました！」

美香さん、楽しそう！

電車の撮影だからと心配しましたが、取り越し苦労だったのかもです。

楽しみ方はいろいろと見つけれられるんですね。

「ふふふ！なんか夫婦みたい」

「え・・・、う、急に恥ずかしくなりました」

「瑞樹くん、後で夜景を撮りに出るのよね」

「ええ、夜の駅に停まっている電車をバルブ撮影しようかなと」

「でも寒いでしょ？」

たしかに。さすがに夜の冷え込みは街とは違います。

「あのね、私、あのお風呂作ってみたいのだけど」

「え、あの薪風呂ですか？」

「冷えきった身体にお風呂は生き返るわよ」

「たしかにそうですね・・・、作るの大変ですよ？見てなくちゃいけないですし」

「なかなか体験できないもの。楽しそうだね。良いかしら？」

「楽しんでいただけるのでしたら助かりますが・・・」

「決まり！作り方教えてね！」

ほんとに、楽しみは見つけるものです。

駅は日に数本しか電車が止まりません。最終と言っても9時前ぐら

い。

あとは明日の朝まで一切来ないので、街に慣れた自分には空いた時間の使い方が思いつきません。早寝早起きになるにはとても良いかもです。

小屋へ戻ると薪風呂から湯気があがってました。

「瑞樹くん、沸いたみたいだから入れるよ!」

「ほんとに作ったのですね。大変だったでしょう」

「楽しかったわ!ちよつと暗くてビクビクだったけど」

薪風呂は小屋の外にあります。ほとんど露天ですので、日が落ちた山あいの暗さが僕でも怖く感じます。

「さつそく暖まってちょうだい!」

「あ、はい。・・・でも美香さんだつて冷えきったのでは?」

「そうねえ・・・。だけど入り方がちよつと解らないので、後で入るわ」

ああ、すのこを沈めて入るんです。たしか五右衛門風呂でしたか。慣れないと解りづらいですね。

「だから、私もここに居て良い?」

「は?」

「瑞樹くんが使うの見て覚えたいの」

「・・・僕の風呂をですか?」

「やっぱり恥ずかしい?」

「・・・なんとなくですが」

「ダメ?」

「はあ、まあ・・・いいです」

なんか、この「ダメ？」ってのにいつも負けるんです。

・・・まあ、地味な男ですから見られてたいしたかんじでないですし・・・。

他の女性陣には以前見られたらしいので、もう良いですが・・・。

弥次喜多道中記ではゲタで入って釜を壊す話が出てきます。  
本来はお湯に浮いているスノコを足で沈めながら入ります。

かけ湯をして手ぬぐいを腰に回して

「じゃあ、入りますよ」

「はい、よろしく願います」

・・・美香さんの家ではいろいろなことがオープンなのだろうか。  
まったく動じることなく僕の動作を見てますが。

「こつやってゆつくり身体を沈めて行きます。」

「へえ、面白。湯加減はどう？」

「ええ、冷えきってましたから今は熱いですが、しばらくしたら慣れそうです」

「ならもう少し薪入れれば良いのかしら」

「そうですね」

美香さん、薪を少し入れて「解ったわ！」と小屋へ戻って行きました。

は、なんか、普通の家族みたいな・・・、自然な動作が僕の羞恥心を消してくれている感じです。

上を見ると星の多さ。周りは山なので、真っ暗な部屋に天井だけきららと

明るく切り取った絵のようです。  
落ち着きます。なんかじじむさい？

美香さんが戻ってきました。

「えへへ、こんなの一つだけ用意しました！」

「え、これって・・・？サワー？」

「ちよつとだけなら羽目はずしてもね！」

咽も渴いてましたのでありがたくいただきます！

「あゝ！！酒が美味しいってのはこんなかんじなんですネ」

「でね、お願い有るの。」

「はい？」

「私も入って良い？」

「・・・？・・・はい?!」

### 35 宿

<35 宿>

何を美香さんは言っているのだろう？

「やっぱり冷えちゃったし」

・・・ああ、そうか、寒くなってるんだ。なら早く交代を

「薪、入れるね」

「あ、それじゃあ、僕はすぐ・・・」

「ダメ、まだ入ったばかりです」

あ、ジャージを脱ぎ出した。下も・・・！！

ちよつと・・・、下着に手を・・・

ヤバい、どうしよう！とにかく目をそむけて。

今回は「ダメ？」とは聞いてこないのですか！

「み・・・美香さん！。ちよつと」

わわわ、入ってくる！後にぴったりと・・・たぶん背中。

「ゴメンね！かけ湯・・・しないで入っちゃった」

「・・・かけ湯」

思考が停止です。なにが・・・、なんで・・・。

「温かい。」

・・・少し・・・、落ち着いてきました。いろいろと数値を頭で考えました。

「・・・あの、すごく大胆ですよね」

「・・・はい」

さすがにこれは自覚している！

「水着とかだったらまだ・・・」

「計画してなかったので、持ってきてないです」

まあそうでしょう。こんなことまで計画してたら・・・。

「それでしたら・・・、タオルとか」

「ぬれてしまうと使えなくなりますので」

お風呂は二人ぐらいいは入れる大きさです。

ですが、今の僕にはとてつもなく狭い。身動きがとれません。

「少し、落ち着きましたか？」

「・・・かろうじて」

「ほんとうは・・・、私もすごく恥ずかしいんです」

「……」

「でも、恥ずかしいことを頑張っても、夢になっちゃうんだったら・

・  
いつそのこと思い切った恥ずかしいことをしちゃおうかなと  
「……夢？……これも夢？」

「瑞樹さんにはそうかもですね」

「……」

「私は……現実ですよ」

美香さん、少し動いて……、肩？……頭を僕の背中に？

「暖かい。」

……手を僕の胸に回しこんで……ちょ……ちよつと……  
後に抱きついてます。柔らかい……

……まずい……、今、すごくマズイ……！

「安心してください。これ以上は私からちよつかいだしません」

……充分すぎです。僕はまったく免疫、経験無しなんです！

「私からは……です。」

あ、さつき飲みかけのサワーを僕の手から取って、美香さんの口へ・  
。飲んでます。

「美味しい……。いろいろと熱いからしみ込みます」

どれくらいでしょう。息も極力おさえてとてつもない時間が経っている気がします。

目をつぶると身体感覚がさえてきます。なので正面を見続けて。

ふと目線を感じました。からだを傾けて下からジッと美香さんが見てます。

腕に・・・当たっている。・・・あ、自分の手は・・・??美香さんのヒザ!

「ほんとうは、一人で入るのも怖かったの。真っ暗ですし。そう伝えたら

落ち着かれるかしら?」

「はい・・・少し。・・・ですがその、くつつくのは・・・」

「ごめんなさい。私の望むことばかりしちゃって・・・。辛い?」

「・・・正直」

「もう、のぼせそうかしら?出ます?」

「はい」

「瑞樹君から?それとも私?」

「・・・いろいろと悩みます」

なんともなければ僕からですが・・・、手ぬぐいではちょっと手遅れに・・・。

「じゃあ、私からね」

ザアツと音がして美香さんが立ち上がったようです。  
僕は再び目を瞑って・・・

「きゃ！」

「え？滑った？」

思わず目を開けたら・・・

！！！！

「少しは・・・見て欲しいものです」

・・・やられました。しっかりと目に。

小屋に戻るときちゃんとジャージを着た美香さんが。  
なんとなく恥ずかしくて少し遠くへ離れてと思ったのですが、  
今まで通り、まったく普通の会話をしてくるので、ついついいつも  
の感じに戻ってました。

「では寝ましょう。明日早いですよね？」

「あ、はい。6時の電車を一回撮りに行こうと思ってます」

「でしたら、またその時にご飯作りますね」

「あ、ありがとうございます」

「ここ、ちゃんとベットもあるんですね」

「ええ、2台だけですがセミダブルになってます」

お風呂の片づけは明日にして、まだ早いのですが寝ることに。  
テレビが無いと、ほんとに早寝になります。家でもそうしようか・  
・。

・・・美香さんと同じ部屋？

さっきのことが気になります。前の蘭さんのこと思い出してしま  
います。

リビングで寝ようか・・・

「男の人って、大変なんですよ。ゴメンナサイ。

もう”私から”いたずらはしませんので安心してくださね。  
ただ瑞樹さんがでしたら・・・、私・・・」

ダメです。それ以上は・・・抑えられなくなりますから。

「しばらくお話してもいいかしら」

「あ・・・助かります」

「瑞樹さんは私と初めて会ったのはいつだか覚えてます？」

「・・・正確には会長の部屋でだったと」

「では不正確には？」

「・・・それは、・・・スミマセン、僕の変な妄想でしたので」

「公園で？私に呼び出された？」

「・・・はい」

「それまでは私のこと知らなかったのですね」

「・・・はい。うわさにはなってたかと思いますが、僕は知らなくて・・・」

しばらく美香さんは何か考えてたようですが・・・

「瑞樹さん、昔から電車を好きだったのですね。」

「あ、はい。物心ついた時には好きでした」

「それは、小学校の頃もですね」

「はい。まだカメラも持ってませんでしたので、ただ見て絵を描いてとか」

「良く見にいったのでしょうか？」

「ええ、近くに電車の車庫がありまして、よく見に行っていました」

「車庫を見てたのですか？」

「車庫・・・と言いますか、車庫に出入りするのを眺めてたです」

「お気に入りの場所から？」

「あ、ええ。よく脇にある土手から見えました」

「朝早くに？」

「ええ、ラッシュアワー前の早朝が出入り多いので・・・。」

・・・あれ？なんで朝のことしってるのだろう？

「私もそんな経験あるんです。」

「え？電車を見に行つて？美香さんが？」

「ほんとうは、電車を見に来てた男の子に会いに言つてたのですが、そんな子が僕以外にも居るんですね」

「その男の子とは、いろいろとお話しました。電車の話、学校の話、家庭の話、そして異性の話。」

「仲よかったんですね」

自分とムツねえの場合は、かつてに突つ走る自分でムツねえはつきあつてもらつてた感じでした。

「私の家つて、少し資産があるの。大きな家なのね。兄が3人いて、私は末っ子の一人娘」

「ああ、なんか幸せそうですね」

「ほんとうはそうでもないの。」

「・・・？」

「私の母は・・・、いわゆる2号さん。その母が幼い頃に死んでしまったの。」

一人になった私は、父の家へ入ることになったのね。正妻の母と3人の兄ができたわ。

良く聞くいじめとか辱めみたいなことは無かった。家族として普通

に生活してた」

「ただ一つ、ものすごく男尊女卑な家だった。正妻の母にもですが、それ以外の

女性は、それこそ虫けらのような扱い。あ、父は母以外でも何人が女性がいました」

「いつしか、私も男の人が怖くなってしまって、女であることが悪だと思うようになったのね。

なので、自分は男だ、女では蔑まされる汚いものだ・・・と。

だから男の格好をして、男言葉を使って、怖いと自分で思っている男になりきったわ。」

「そんなある日、朝早く起きてしまって、なんとなく庭に出てたら・・・、土手に座って

ただ電車を見ている男の子に出会ったわ。」

「まだ朝の6時よ。変でしょ。それも家の敷地界の土手で。」

「それからたびたび見かけるようになった。私も朝早く起きて、来ているかと見に行くようになったの。だいたい雨の日以外は来てたわ。」

「二週間ぐらいして、初めて声をかけたの。いったい何を見ているの？」と。

そうしたら、「電車」だって。電車を見てるのが好きな人にあったことなかったの。

とても不思議に思えたわ。」

「それ以来、見かけたら声をかけたわ。男の子も私が電車を見に来ているとは

思わないみたいだけど、なんとなく話せるのがうれしかったみたい。

」

「だんだんと電車のことだけではなく、学校や家などのことも話すようになった。

ある日、私が思っていること・・・、男って怖い話をしたのね。そうしたら、

その男の子は「いや、女の方が怖い」って。」

「男は単純だからすぐ好きな娘ができちゃうけど、女は頭が良いから計算して好きな男を決めるんだって。

変でしょ？勝手な言い分だと思わない？・・・でもその子は真剣に信じてた。

その根拠を訪ねたわ。そうしたら・・・あまり言えないみたいで・・・。ただ辛いことがあったとか」

「ほんとに意味のない言葉だったけど、もしも私が怖いと思っている男も、女が怖いと

思っているなら、それは怖いと思うのをやめれば良いだけのこと？

つまり、女を隠して男の真似するより、女であることに自信を持てば怖さもなくなる

かもしれない。」

「それからはあまり自分を隠すことしなくなったの。ただ、あの家はどうしても

息苦しかったので外に出てしまったけど。」

「でも、その男の子、今どうしているでしょうね。もしもまた会え

たら・・・  
きつと抱きついてしまつかもね。たとえば裸でお風呂に飛び込むとか」

「・・・美香さん？・・・て、あの、かおる君？」

「美香では女だから、かおる。毎朝電車を一緒に見てた香。今気付いた？」

「・・・だって、あの時は男の子だとばかり・・・」

「男してましたし、今みたいに胸も無かったし」

「結果的に、瑞樹君のおかげで、どうしても壊せなかった恐怖を克服できたの。

だから今日は女の私を見せつけたの。私の自己満足なのだけど、あの頃は

女なんて思われてなかったからね。ちょっと後悔してたのね」

とんでもない話でした。まったく幼い僕ですので、ほんと勝手なことばかり。

しかも朝から会う男の子相手にです。そんな前から、美香さんとは会ってたんですね。

でも・・・、見せつけるってあまりにも直線的すぎです！

「あのね、そちらで添い寝させてほしいな」

「・・・スミマセン、女を充分すぎるほど解らせていただきましたので・・・無理です」

「もっと解ってほしいこともあるのだけど」

「…………自分の限界は解ってますので」

「ダメ？」

「……………ダメ」

「残念」

…………勝った！僕は誘惑に勝った！…………むなしい…………、後悔…………。

「だめ？」

「……………ダメです」

### 36 フォレストガンブ

<36 フォレストガンブ>

階段で2階に上がると正面から変な動きしている女生徒が・・・

「蘭さん、なんでしょうか？そのロボットみたいな動き」

「なんだ、知らないのか？ ポンダポンダポンダ」

「・・・？」

「シティイの宣伝で踊ってたアレ」

「・・・知りません」

あんた・・・、ポンダシティイ・・・って。

そつえば、折り畳みのバイクが付いてたんだよね。

「カンチん、S・Xしよ！」

「！！わあ~~~~！ビックリした！！。会長・・・掃除用具箱から出てください。」

そして謎のセリフもやめてください。」

この二人は、懐かしの昭和特集でも見たんだか・・・。

「さっ、瑞樹ちゃん、リン、一緒にポンダ歩きで体育館行くぞ」

「すみません！まだ自分を見つめ直す時期ではないのでパスさせていただきます」

あまり2年生の教室には行かないのですが、二宮先生直々のお達しで・・・。

「瑞樹ちゃん、鈴と蘭を体育館まで呼んできてほしいんだけど。」

「メールとかでは？」

「見るかどうか怪しいし、電話は禁止だし。とにかく手が一番確実だから」

そのようなことで、一応メールを入れてから迎えにいったのです。小学生を連れ帰りに来たわけでは無いです。

体育館に入ると1年の3人、春香、夏美、美香が来てました。

「おっ、みんな揃ったな。いやゝ、すまないが話があつてな。」

「ポンドポンドポンドポンド・・・」

「あ、シテイイのCMだな？」

間違いない、この人はリアル世代だ。

「じつはみんなで組んで踊ってもらいたいんだ」  
「なんですか？それ」

「いや、有るところで隠し芸大会があるんで、ちょっと協力してほしいなあ・・・なんて」

「・・・?」「」

なんか、ちょっと前にもこんな話し有りましたが・・・。  
ああ、お祭りのコンテスト。

「いったいどこで?」

「うん・・・、昔なじみの所でね。」

・・・昔なじんだ所って・・・アレですか?ヤン時代?

「恥ずかしいわ」

・・・、やはり会長と根は同じ?

「先生、それは先生にとってとても重要なことなのですね?」

「まあ、正直私事なのだけれど、その通りだ」

「では私はお手伝いいたしますわ」

「まあ、先生にはお世話になってるから断れません!」

「わたくしども同じです」「」

「私もします」

ああ、みなさん、即座に了承ですね。まあ僕も依存ありません。

「ありがとね〜！」

「それで何の踊りなのでしょう？」

「うん、オナアターズだ」

「・・・てんぱいぼんちん？」

「よく知ってるな〜！」

「「「・・・では、失礼します」」「」

「あゝ！冗談！ちよっとした冗談でした」

解るほうも異常でしょう・・・。

「ちなみにセイラー服を脱がしちゃうぞでもないぞ」

「・・・おにゃにゃん娘・・・」

「踊りとは言ったけど、寸劇が有って、きめポーズが有るんだ」

「・・・？、もしかして・・・、コスプレ？」

「正解〜！。戦隊もので〜す」

「・・・先生、なぜ？」

先生、昔いろいろとヤンだった頃のお話で、・・・ああ、夜露死苦の時代ですね。

いろいろと親身になってくれた人が居たそうです。

その人が居なかったら今の先生、そして弟のテツさんにはなってなかったそうなの。

女性です。児童相談員だそうで、もうお年なので引退されるとか・・・。

そこで、先生とテツさん達が中心で感謝の会を開くことになったそうです。

「でな、今は年なので小さな子供たちが多いそうだから、その子らに見せる劇と踊り・・・なんだな」

元ヤン先生は以外と子供付きかも？

そんなわけで、その日から練習始めました。

さて、日は経ちまして本番です。

＜ここに、二人のヤンだ女の子がいました。

理由はアレコレありますが、とにかくヤンでした。＞

ナレーションは先生です。脚本もですね。

「おらー！ただで人の顔見てんじゃねえよ！金払えってんだ！」  
・・・会長・・・、マジ怖いです。

「ごめんなさい。僕、お金あんまり無くて  
僕の役はカツ上げされてる中学生・・・。

「あたしの顔見てお金ないだあ？しめるぞコラア」  
・・・蘭さん・・・。何もいません。

しかし・・・。先生。

このヤンでる方々の衣装って・・・自前ですよ。  
だいぶ懐かしの・・・に見えます。スカート超長いです。  
カバンはほとんどペツタンコ、その・・・ラクと入った紙袋なんて  
まだ有ったんですか・・・。初めて見ました。

「ごめんなさい、これだけなんです・・・。  
でも、あの少しだけでも残していただけたら・・・」

「こんなショボーいので残せるかっての。とつとどつか消えろ！」  
「ちっ！ブンタのカートンも買えねえ」

<とてもヤンでる彼女達はパックマンで遊ぼうとゲーセンへ。その時です>

「な、なんだ？この光は？」  
「見えねえ」

「あななたちに、先ほどの少年がどうなっている見せてあげましよう」

天使が降りてきました。これは美香さんです。

「なんだ、お前？」  
「ここはどこだ？」

「あの少年のお金は、妹達への誕生日プレゼントのためのお金だったのです」

ここで二人の妹を前にする少年が光のなかにうかんできました。

「春香、夏美。誕生日おめでとう」

「兄さん、ありがとうございます」

「僕は二人に謝らなければならんだ」

「兄さん、どうされたのですか？」

今どき、ツギハギだらけの服って……

左門ん豊作君の兄弟か！

「二人が欲しがっていた大人のバイ・・、  
ぬ・い・ぐ・る・み・をあげることが出来ないんだ」

先生！台本差し替えないでください！！  
危なく危険な名称言わされるところでした・・。

「にいさん・・」

「私たちはそんな・・」

「僕から渡せるのは・・今日アルバイトした花屋さんからもらった  
花だけなんだ」

「まあ、きれい」

「にいさん、私は幸せです」

「……私たちはなんてことをしてしまったんだ」

「こんなことなら、もっと他のヤツからカツ上げたのに・・・」

あゝ、いきなり悔い改めてます。少し改め方が間違ってます。

「あななたちの純真な心が見えますわ。さあ、もう不幸なことは忘れましょう」

「私たちになにかできますでしょうか？」

「もちろんです。さあ、ここに月の光を吸収した壺があります。これを使って、

あなたたちも純真な天使となるのです」

「まあ、この壺で」

「私たちが天使に」

「そうです。わたくしもこの壺で力が持てました。

貴女たちも広く、この壺の力をみなさんに差し上げるのです。」

ヤンでる二人が壺に触ると・・・

なんとヤンキー制服が脱がされて純白の

・・・レオタードに。

ああ、天使様も同じくレオタードに。

「さあ、いきましよう。世界中の人々がこの壺で素晴らしい力を手に入れるようにしましよう」

「はい、私たちも頑張つて幸せの壺を広めていきます」

「さあ、みんなで踊りましよう！竹富士を」

ここで春・夏姉妹も入って5人の白レオタードが踊りはじめました。

先生はナレーションを続けてます。

＜そうです。皆さんにもこれからだれかを幸せにする力があるのです。

この優しい心が、あの兄弟を、そして世界中を。  
このことを忘れないように、これから未来をつくっていつてくださ  
いね。＞

「ではー！ごきがんばろうー！」

ポンドポンドポンドポンド・・・

ええー・・・、子供たちは目が点ですね。そうですね。

道はずさないうようにしてくださいね。

僕のように・・・

### 37 クリスマスキャロル

<37 クリスマスキャロル>

「今まで女性から恋文をいただいたことが有ります方は手をあげてください」

会長、なにかまた……。有るも無いも僕だけですよね。

「まあ、一条君は手をあげないのですか？」

「はあ、非常に残念なのですが……」

「たしか6通ほどお持ちだったと記憶いたしますが」

「は？、あれは会長、蘭さん、春香、夏美、先生からの呼び出し・と、

あれ？もう一通は……。夢でもらった美香さんの？も入るのでしょうか。」

……。美香さん？

「ほら、ちゃんといたでいてるではないですか」

「義理チヨコと同じささやかなことでしたので」

……。美香さん……。顔の横まで来て睨まないでください。

「まあ、とても気になることがお有りのようですね。

その美香さんですが、私の予想ではいただいていると思われるのですが」

「あ、はい、以前いただきました。」

「思った通りですわ」

マジッすか！！男の僕ももらったこと無いのに・・・。

・・・あ、美香さん・・・、再び睨まないでいただけましたら・・・

「このような話をしましたのも、

これから皆さんに良いお知らせをと思ひまして。」

「私たちは、幸せなことに多くの方々から好意をいただける幸運を持っているのです。しかし、今週末のクリスマス周辺は残念ながら決まった殿方などと過ごす予定が皆様無いようです。これを放置することは世にとりまして、たいへんな損失だと思います。」

えゝ、要約すると、自分たちは美人なのに男が居ないのはおかしい・・・ですね。

「そこで、23日より25日までの3日間、この損失を有効へと変換することを考えました。」

「はあ・・・。」

「みなさんの魅きつける力で鈴八洋菓子店、  
クリスマス販売をお手伝いいただけましたら」

え、会長によりますと、クリスマスケーキ&オリジナルクッキーの  
販売だそうです。で、なぜラブレターの調査だったか・・・ですが。

「ご家族の方はクリスマスケーキを囲んで過ごされます。ですが  
私たちのように、一人で過ごされる若いおかたも多いのです。  
しかし、それはなにかと寂しい気持ちになってしまいます。  
そこで、私はひと足早いバレンタインのプレゼントとして  
ケーキやクッキーなどでの一時の幸せをと思いましたの。」

要約しますと、クリスマスデートなど予定ない人に  
ケーキやクッキーとか販売したい・・・ですね。

「そのさい、少しでも心が沸き立つために、私たち販売員も  
すくなくらずお手伝いするべきかと。そこで、先ほどの調査です」

??

「美香さんには、男装していただきますわ」

・・・は？

「ターゲットは女子中学生から高校生です。同性へのあこがれをくすぐります」

・・・

「春香さん、夏美さんにはセクシー&ロリータな衣装。

女子高生の心をくすぐる可愛さをアピールしていただきます」

「そして、蘭さん、私はミドルセクシーです。この場合のターゲットは

家庭持ちの男性です。会社帰りにケーキを買われる方向けのサービスです」

「また、遅い時間からは玲子さん、二宮先生などにもご参加いただきます。

こちらの場合、夜のスナックなどへ向かう男性向・最終兵器とお考えください」

会長・・・、恐ろしい計画をたてました。

あらゆる客層を逃さない、まさに地引き網。

「23日。24日は時間的に私の家にお泊まりいただいてと考えております。

なお、販売参加者は報酬は当然のこと、プラス大晦日大忘年会へご招待。

そして1日午前零時になった時に、お隣にいた方とキスの権利が

つきます。」

・・・キス！

「海外では自然なことですね。いかがでしょう？悪くない話と思いますわ」

なんてハーレムなイベントでしょう！

イヤではないです。幸せなのでしょうが・・・、なんでか恐怖感が。

23日は午前から仕込みの手伝い。

洋菓子店は通常営業中ですので、クリスマス品とともに用意するだけで大騒ぎです。

それでも手際の良い女性陣により3時ごろには予定数を用意できました。

「では、みなさん、よろしく願いしますね」

会長の言われてました通り、春・夏・姉妹はかわいらしい赤い服で、帽子も似合ってます。

さっそく女子学生などに囲まれて大人気。

美香さんはいわゆるヒツジ衣装。

ツ力的魅力は年齢とわなない一部女性の琴線にズバッと入ったようです。

なぜかお客さんが買い物の後で「がんばってください」と手を握っています。

会長と蘭さんの主戦場は夕方以降ですので、今は裏方役。

商品を運んで並べて計算して袋詰めで大忙し。

僕は……、会長が用意しましたサンタクロースで、風船を子供に配ったり、

駅の方でちらしを配ったりです。

6時から会長と蘭さんを前線投入。すらりと伸びた足に赤いブーツを

最大限に生かしたミニワンピ。家路を急ぐ会社員を吸引する力抜群！美香さんと僕が商品管理に回りまして、春・夏・姉妹が駅前勧誘。

8時を回って最終兵器の登場です。

キワどいです。赤いレオタードみたいなのに白いフワフワを巻き付けた

アダルトセクシー2人組み。このお二人には自制心ナシです。

クラブの呼び込み？

僕と2年生女子が商品管理。初戦で奮闘しました1年生女子は厨房に下がってます。

見事な連携作戦は大きな威力をあげ、  
夜10時には翌日分として用意してましたものまで売れてしまいました。

「皆様、今日はほんとうにお疲れさまでした。予想以上の結果で、明日の分が無くなってしまいました、申し訳ないのですが、明日も午前中から仕込みをお手伝いいただけましたら・・・」

「僕は大丈夫です」

「私たちもです」

「ありがとうございます。今日はこのままゆっくりお休みくださいね。」

お床も用意してますので」

「」「」「ありがとうございます！」「」「」

翌日もほぼ同じ作戦です。あいかわらずキュート&セクシー全開のスタッフ。

変わったのは、最終兵器の色が赤↓黒でアミタイツ。ヒールのブーツ・・・

これ、完全に先生の私服ですよネ・・・

「私のスウィートなスポンジ、食べてみない？」

食べたい・・・けれども危険です・・・。

「皆さん、ほんとうにありがとうございました」

「2日間でもんでもない数を販売できましたわ。これも皆さんの魅力のおかげですわ」

「玲子さん、会長、なにりも美味しいケーキがあればこそその人気だと思います。」

昨日買われた方が、今日もいらっしゃってましたのが証明してます！」

「あたしもそれ思った〜！今度作って！」

「じつは明日の材料がなくなってしまいましたので、販売は今日で  
おしまい。」

ですので今夜はお疲れさま会も兼ねましたクリスマス会をいたしましう！

もちろんケーキもちやんと有りますわ」

来週のお店用の材料まで使われたとか・・・  
これでは2、3日営業できないみたいです。

「まずは皆さん、先にお風呂でサッパリとしてくださいね」

会長の家は大きめの浴室ですが、さすがに4人限度ですね。交代で入って、その間パーティー用の食事も交代で用意。準備整った頃はすでに12時でした。

「遅くなりました。ご免なさい。では！お疲れさまでした。」

「  
「  
「  
「  
かんぱ  
い  
！」  
「  
「  
「  
「

「……あゝ！！うまいゝ！！」

「こら、少しだけだぞ！」

「そんな先生！明日も休みなのだからいいでしょ！」

「そうですよ。無礼講ですよ！」

ほんとに、この集団は現実世界とは思えない・・・上級素材揃い。  
僕は、ものすごい幸運男です。食事も美味しい！  
お腹も少し落ち着きました。

「あの、僕お風呂いただいてきます。」

「あ、そっか、まだ入れてなかったんだよね。ごめんね！」

「先に乾杯だけでもしないと、皆さんお待たせするわけにいきませ  
るので」

「じゃあ、じっくり洗ってきなさい！お姉さんが後でチェックする  
からね」

「・・・・・・・・行ってきます」

ふいふ・・・・、さすがに嵐の2日間は疲れました。  
でも、大盛況でほんとに良かったです。  
あの子どものコス、写真に撮ってみたかったな・・・。  
ほんとに似合ってた・・・。

ガラッ！

「ねえ！瑞樹ちゃん、私も入るー！！」

「ちょ・・・・・・・・ちよっとー！！！！！！美香さん！！」

「あゝ！！やつぱり！！美香ずるい！！」

「瑞樹ちゃん、ムツねえが洗ってあげまぢゅよ」

「何してんですかゝ！蘭さん、会長まで！！。早く出てってください」

「皆さんずるいです！」

「私たちなんて、キスの写真もないんですから」

「春香さん、夏美さん。お願いしますゝ。向こうでパーティーしてくださいゝ」

「さあ、坊や・・、こっちにおいで」

「先生・・、酔ってませんですよ。正気の沙汰ですよ」

「まあ、大きくなって。ママが洗ってあげますね。背中も前も！」  
「玲子さん、なに脱ぎ始めてんですか」

「えい！」

ザバツ！

「きゃ！」

ザバザバツ！

「えへへ！水もしたたるいい女ゝ！」

「ジャージのまま入って……。どうするんですか！後が大変です！！」

「では脱いで・・・」

「会長！脱ぐのも禁止です！！僕が大変になります！」

動けません。もうお湯ないじゃん……。浴槽にギッチリ4人＋僕。

「マドンナも、酔っ払えば ただおばさん」

「なに落ち着いて俳句読んでの」

「・・・おばさん？」

「ほお？おばさん？」

え、僕が地雷踏んだ瞬間でした。

先生・・・、ボンテージ衣装のままですね。

「私のスウィートな地獄突き、お食べなさい」

「クリスマス、乱交ではなく ご乱行」

「うまい！座布団無いから私をあげちゃう！」

「……………ご蘭行」

### 38 黒船

<38 黒船>

「おまたせいたしましたわ。ブレンドコーヒーです。」

「あ、ありがとうございます」

「いゆうつゝつくりどうぞお〜」

ここは鈴八。そして只今帰宅途中にお茶してます。

「ミズキ、この cheese cake はとてもデリシヤスです!。good!」

「はい、こちらに持ってきた彼女が作っています。」

「Oh! She is very young。すばらしいことです。ぜひ教えて欲しいデス」

「彼女に伝えましたら、きっと喜びます」

向かい側に座っているのはメアリー。メアリー・リンドバーグ。父が海外赴任中、親しかった友人の娘さんです。短期留学のため日本に

来たのですが、今僕の家ホームステイしてます。

「目が青いわね」

「髪が真面目に金色です」

「美白だわ」

「ユニバーシティって大学生？」

「私、勝ったわ」

「・・・胸ですか」

「それだけですわ」

「私は負けました。」

「あの・・・、隣の席から大声で評価しないでください」

「彼女たちハ、ミズキのフレンズ？」

「あ、はい。皆さん同じ高校の友人です」

「Nice to meet you. ワタシ、メアリーデス。  
どうぞヨロシクデス」

「どうもどうも！先輩の三木蘭です。」

「四谷美香です」

「伍井春香」

「伍井夏美」

「It's キュート！あなたたちはツインズですか？」  
「はい」

「ええ、漆黒の黒い双子です」

「・・・良い度胸だ」

「後ほど呪いをかけてあげましょう」

「カノジヨは beautiful black hair デス。  
正しい日本ノ女性デス」

「ああ、美香さんですね。弓道をされてます」

「Oh! 武士道？」

「ええと、日本式の Archery です。」

「それはいちど見せていただきたいデス」

「少し・・恥ずかしいです」

「カノジヨは・・・ヤンキー？」

「おい！」

「イエス」

「・・・・瑞樹ちゃん？」

「あ、元ヤン・・、トラック&フィールドスポーツをされてます」

「What is it track and field sports？」

「あたしはスプリンターです！」

「それは魅力的デス！ランの走る所を見たいデス」

「ミナサン、ビューティフルガールデス。きっとボーイフレンドも  
沢山ですね」

「「「あゝ．．．、残念なのですが居ません」「」

「Why!日本のboyはオカシイデス!」

彼女たちもオカシイですけど．．

「「「何?」「」」

「ミズキもカノジヨ居ないのデスカ?」

「は?．．．はあ．．イエスです」

「デハ、ここに居るビューティフルガールズにアタックしないのデスカ?」

「．．．は?．．ええと．．Why?」

「Why?あなたオカシイ。こんなフレンドが居るのに。それこそWhy?デス」

「．．．なんで今ここで!僕はチキンボーイなんです」。

あ、遠くから会長がジツと見てます。かなり見てます．．。

「デハ、ワタシがアシストしましょう。まずはアソコのカノジヨ。最初にケーキを運んでいただきましたビューティフルウーマンにアタックデス」

「ええ〜〜!!」

「「ええええ〜〜〜!!!!」」

なぜ皆まで叫ぶんですか・・・。

「カノジヨでは不満デスカ？」

「いえ！不満では有りませんが・・・」

・・・と、会長！コツちに。

加速装置でも積んでますか？

「ナイスタイミングデス！さあ、今言つのデス」

「何かお話がありますのでしょうか？」

・・・聞こえてましたよね。

嬉しそうです。会長・・・、楽しんでますね。

ああ、汗が・・・滝のような汗が。

「ミズキ、ほんとうにチキンボーイ？」

「う・・・、言われると辛いです」

「チエリーボーイ？」

「○× □!!!!」

「I understood. It's have a confidence. デス。」

「I will open the door.」

え？メアリーの顔が近づいて

「「「え!?!?!」」」

バシッ!!

「What?」

「痛タタ!」

目の前が真っ暗に!.....

ええ？トレンチを顔にあてられました。何が起こった？

「The necessity doesn't exist.

His intention is important.」

「Why do you understand?」

「I sincerely love him.」

会長が持っていたトレンチを僕の顔に押し付けたのですた。

一瞬でしたので何が何やら・・・。  
会長、何かメアリーと話してましたが・・・、すごく流暢な英語。  
ビックリです。  
僕には????ですが。

「ゴメンナサイ。ワタシが軽率でした。気を悪くシナイでください」  
「いえ、こちらこそごめんなさい。」

「ワタシ、メアリー・リンドバーグデス。アナタはミズキに大切な人。ヨロシクデス」

「私は八神 鈴。よろしく願いしますわ」

「Please keep secret. He has no  
t known yet.」  
「OK」

なんだったのやら・・・。  
あ・・・鼻血出てきました。

### 39 フォレストガンブ（鈴が聞いた二宮先生）

<39 フォレストガンブ>（二宮）

「カリンちゃん、手を洗ってきなさい」

「フクママ、いつも子供扱い。」

「だって子供じゃない。私の自慢のお子」

カリンちゃん・・・は二宮花梨。

そうです。アラフォー決定女性教師の二宮先生。

フクママと呼ばれたのは、先生の相談員だったフクさん。

かりんちゃんこと、二宮先生の10代は、それはいろいろとあったみたいです。

一時は特別なご職業の方と同棲されてたとか。

そんな荒れてた時でも、年に1〜2回フクママの家に顔を出しては話したりしてたみたい。

フクママは、そんなカリンちゃんへ諭すでもなく、怒るでもなく。

ごくごく近所から帰ってきた子供に接するように声をかけてました。

10代で荒れてても定時制でなんとか終了証書をもらえた頃、カリンちゃんの

お腹には命が宿ってました。

「ママ、楽しみだわ。きつとカリンちゃんみたいに可愛いと思うの」  
「女の子とか解らないよ？」

「きつとそうよ。ママにはわかるのよ」

いつも通りのフクママ。怒るとかダメだとか言わないで、ただ楽しみだと言ってくれる。

「ひとつお願い有るのね。カリンちゃんはちゃんと食べること。  
そしてタバコはしばらく我慢してほしいの」

「ママ、それじゃあ2つじゃない」

「違うわよ。ママとお腹のお子からカリンちゃんへのお願いなのよ。  
だから一つづつね」

「お腹の子供がそんなことわからないでしょ」

「ママにはわかるわ。ちゃんと食べなきゃお子もカリンちゃんも病  
気になっちゃうんだって」

「また勝手なことフクママ言ってるし」

「あら、ママからのお願いはタバコのことだけですよ」

のんびりなのか、天然なのか……。ニコニコしながら話す顔には  
ちっとも

疑問なんて感じてないみたいです。

冬でした。カリンちゃんのお腹も少しずつ目立ってきてます。だけれども、この頃はいつも一人。お付き合ひしているお父さんは、まったく帰ってきません。

カリンちゃんはあまり良くないのだけれど、少し知り合いの男の人と一晩だけおつきあいしたりします。そしてお小遣いをもらってます。今はそれが生活費になってます。

その男の人は、お腹の目立ち始めた頃からなかなか相手をしてくれなくなりました。食べるのを少し我慢してましたが、どんなにしてもお金は無くなっています。

どうにもならない・・・と考えると、知らない男の人と一晩すごすことにしました。

初めて合う人です。カリンちゃんを知らないのはあたりまえです。3人目の男の人は、とても乱暴で、カリンちゃんは半分泣きながら相手をしてました。

朝になって、別れた後でもお腹が痛い感じです。それもだんだんひどくなります。

病院へ行くにはお金が足りません。

怖くて、痛くて・・・いつのまにかフクママへ電話しました。

「ママ、痛い。私どうしたら・・・」

「カリンちゃん、落ち着いて。すぐに救急車を呼ぶのよ。そして、私の電話番号を伝えるの。」

カリンちゃん、言われた通りにしました。  
すぐにフクママが病院へ。そしていろいろと手続きしてくれたので  
す。

カリンちゃんの具合はあまり良くないみたいです。点滴を受けてま  
すが、  
なかなかお腹の痛みが治まりません。

「お子も頑張っているのよ。カリンちゃんも一緒にね」

フクママはずっと手を握っていてくれます。

2日後、カリンちゃんは退院しました。ほんとうはもう少し安静に  
しなければ  
なのですが、カリンちゃんのお願い。  
赤ちゃんは女の子でした。ただ、どうしても状況が悪かったみたい  
で……。

「カリンちゃん、ママ、おしるこ食べたいのだけでも付き合っ  
てもらえる？」

フクママは何事も普通のようにカリンちゃんと甘味処にいます。

「フクママ・・・、ほんとうに・・・ありがとう」

「カリンちゃんほんとうに良い娘だね。私が思うのですから間違いないことよ」

「でも・・・赤ちゃんが・・・」

「自分を責めないのよ。赤ちゃんもカリンちゃんのこと責めてないわ」

「私のせいで」

「そうかもしれないわ。そうでないかもしれないわ。そう、カリンちゃんの

これからで、その答えが決まるのよ。」

この日からカリンちゃんはフクママの家で生活することになりました。

しばらくすると赤ちゃんのお父さん、同棲していた男の方が探しに来たみたいです。

フクママは終始「知りません」と言い通したとのことでした。

カリンちゃんも遊びに来る同じような子供たちの相手をしたり、フクママの手伝いを

したり。その生活でだんだんと明るさも戻ってきました。

ある日のこと、フクママが1通の封筒を出してカリンちゃんに言いました。

「カリンちゃん。あなたのおばあさまにご連絡しましたの。おばあさま、知ってますわよね。」

それは幼い頃、何度か母親に連れられて行ったことの有る旅館のお母さんの母親です。

「もしも、カリンちゃんにその気持ちがあるのだしたら、おばあさまの所で

一緒に住みましょうとのことなの。そして、これもカリンちゃん次第なのだけれど。学校へ行くことも考えてらっしゃるわ。」

フクママの話をただ静かに聞いてたカリンちゃん。

自分の居場所はどこにあるのか・・・フクママにも迷惑かけれない・・・。

不安と心細さで涙が出てきてます。

「間違いないでほしいことが一つだけあるの。ママはね、カリンちゃん

とても大事。見えない所に行ってしまうのがとても心細いわ。でも、ママ、頑張る。カリンちゃんが頑張るなら、ママも同じで頑張るの。」

フクママは私を遠くへ出すことを、本当に悲しがつている？  
こんな迷惑ばかりかけるのに・・・。なぜ？

「カリンちゃんは大事なママのお子だわ。だから当然信じられるのよ。」

東北の祖母宅での生活がはじまりました。旅館も手伝って勉強もして。

翌年には大学へ入学。学校と旅館との生活で昔の自分がすっかり消えてしまいました。

おばあさんは、そんなカリンちゃんを大切にしてくれています。大学も残り１年となった時。

「あなたの人生はあなたのもの。この旅館のことは考えないで、自分に挑戦なさい」

ほとんどおいだされるかのように外で仕事することになったのです。

高校の教師。数年前では考えられない変わりようです。

名字も母方の二宮になってからは、もっぱら「二宮さん」で通つてますので。

カリンちゃんと呼ばれるのも、フクママと一緒にのときだけになりました。

フクママももうすぐ75歳です。

いろいろと忘れっぽくなってしまいました。

相談員も引退することに。

私は教え子と一緒に送別会を開きます。

内容はもう解らなくなっても見て楽しんでもらえれば。

「ほら、カリンちゃん、手を洗ったらおやつ食べましょうね」

「フクママも一緒に食べよう」

「カリンちゃんはほんとうに良い子だね。ママとっても嬉しい」

フクママ、ありがとうね！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3849v/>

---

なぜ僕はここにいるのだろう？

2011年10月9日13時31分発行